

山梨県韮崎市

中田小学校遺跡

県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1985

韮崎市教育委員会

序文

本報告書は、昭和59年度県営圃場整備に伴い、発掘調査された中田小学校周辺遺跡の報告であります。

並崎市は縄文時代中期の集落址で著名な坂井遺跡をはじめ、国指定史跡新府城跡など文化財の多いところであります。埋蔵文化財については、大正から昭和にかけて行われた坂井遺跡が唯一の学術的調査であり、そのほかでは遺物の発見が断片的にあるだけで、本格的な調査は他の県市町村に比して立ち遅れの感がありました。しかしながら近年大規模開発にともない久保屋敷遺跡、坂井南遺跡など貴重な調査報告がなされております。このような状況の中で、山梨県随一の穀倉地帯である塩川右岸の通称藤井平での圃場整備事業が始まり、今回の遺跡発見、調査となったわけであります。

藤井平は塩川右岸の肥沃な平坦地で、古くより「藤井五千石」と称した水田地帯で、私たちの祖先が遠い昔より生活を営んできた場所であり、今回の調査によりその一端が世にあらわれることになったわけであります。調査の成果は報告文にゆずり、遺跡は住居址が主体で時代的には縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代と多岐にわたりており、何代にもわたる祖先の生活文化が解明されることとなりました。

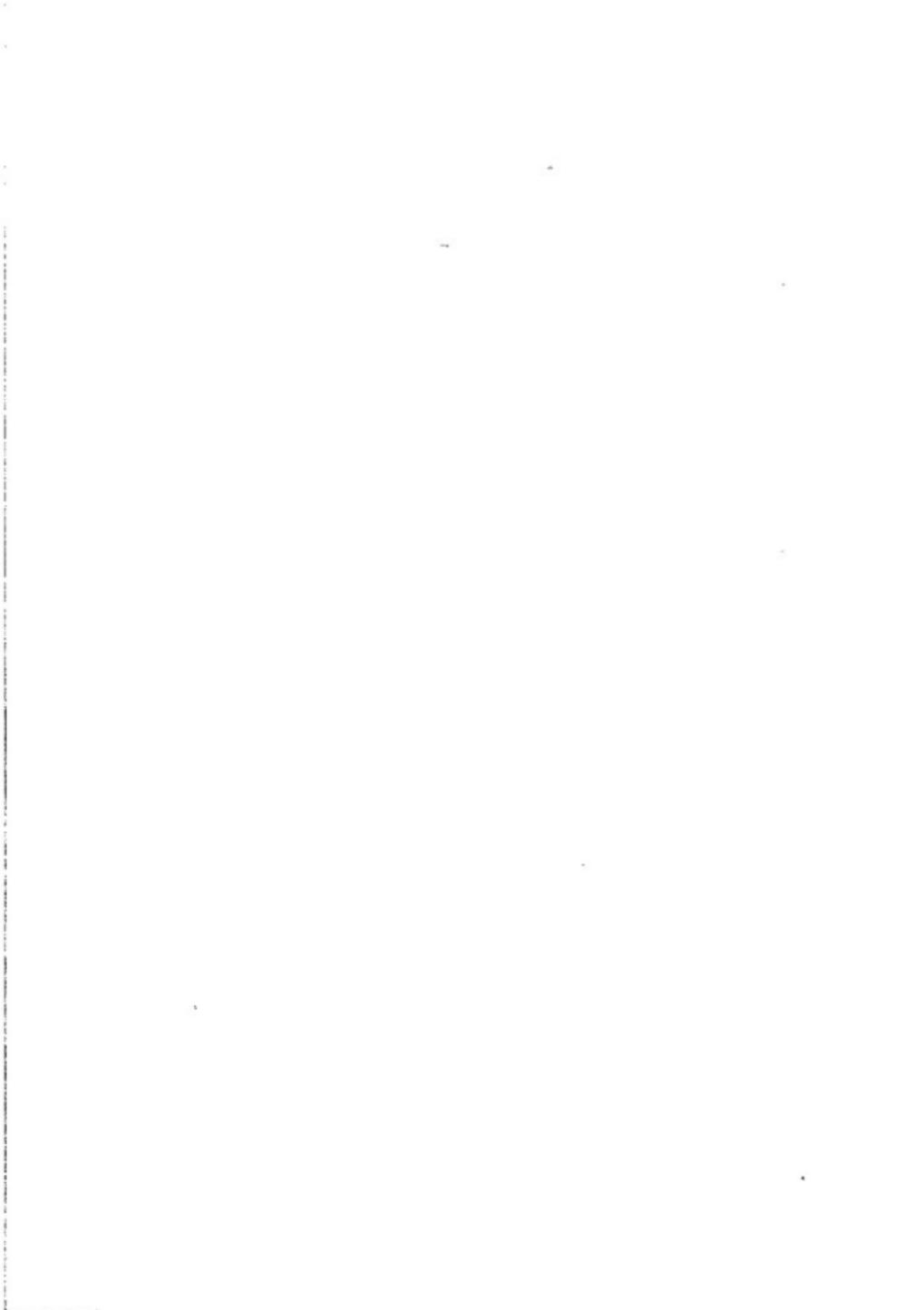
これらの貴重な文化財を保護し永く後世につたえるためにも、このたび本報告書が刊行できたことはまことに意義深いものがあると存じます。また、この小冊子が先学諸氏、並びに地域の方々のお役に立てていただければ幸いと思います。

最後に、今回の調査及び報告書作成に多大なる御理解と御協力をしていただいた関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

昭和60年3月31日

並崎市教育委員会

教育長 岩下俊男



例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業に伴う、中田小学校遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は、調査費の72.5%分を候北土地改良事務所と負担協定書を結び、残り27.5%分については文化省・山梨県の補助金を受け、韭崎市教育委員会が実施した。調査組織は別に示すとおりである。
 3. 本書の編集並びに執筆は山下孝司が行い、出土遺物一覧は山下・榎本勝が作成した。
 4. 造構の図面トレース及び遺物の実測・トレースは、山下・榎本・越石恵理子・神谷由紀子・山本由紀・岡田直・三井健二他が行った。特に、13号住居址跡2個・17号住居址跡鉄鏃の実測は、山梨県埋蔵文化財センターの保坂康夫氏の手による。
 5. 遺物整理は、調査参加者が主に実行した。
 6. 鉄器処理については、山梨県埋蔵文化財センターの協力を得た。
 7. 凡例
 - ① 挿図中のドットは焼土を表わす。
 - ② 挿図断面図の(●)は石を表わす。
 - ③ 縮尺は各挿図ごとに示した。
 - ④ 歴史時代土器断面白ヌキは土師器、黒は須恵器、スクリーンは陶磁器を表わす。
 - ⑤ 土器底部ヘラ削りの範囲は→で表わす。
- 尚、発掘調査及び報告書作成にあたり、諸先生がたの御指導・御助言をいただいたので、次に御芳名を記して感謝の意としたい。
- 末木健・八巻与志夫(山梨県教育委員会文化課)、新津健・坂本美大・米田明訓・保坂康夫(山梨県埋蔵文化財センター)、岡本嘉之(長坂町教育委員会)、柳原功一(大泉村教育委員会)、畠大介(甲斐丘陵考古学研究会)

調査組織

1. 調査主体　韭崎市教育委員会
2. 調査担当者　山下孝司(市教委社会教育課)
3. 調査参加者　岡本嘉一、小田切まさ子、小田切絹枝、鈴木きく江、小沢高恵、小沢みやの、小沢久江、小沢千代子、志村洋子、岡本保枝、乙黒きくふ、長島昌子、小沢春代、志村寿子、小沢明能、田中通也、三井健二、榎本宏、平賀久二男、東条晃嗣、雨宮実、名取克正、小池和仁。
4. 調査協力者　横森淳彦(韭崎市農林課)
5. 事務局　韭崎市教育委員会社会教育課
教育長　岩下俊男、課長　田中永歳、係長　眞壁静夫、主任　中島保比古・円道芳美

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
挿 図 目 次	
図 版 目 次	
I. 調査に至る経緯と概要 7	
II. 遺跡の立地と環境 7	
1. 遺跡の立地	
2. 周辺の遺跡	
III. 遺跡の地相概観 10	
IV. 遺構と遺物 10	
V. 発掘調査の成果とまとめ 80	
1. 縄文時代	
2. 弥生時代	
3. 歴史時代	
4. 編年試案／中田小学校遺跡出土土器編年表	
5. 年 代	
6. 墓石土器について	
7. 奈良・平安時代の集落構造	
おわりに	89
参考文献	90
図 版 (図版1～図版20)	

挿 図 目 次

第1図 中田小学校遺跡と周辺遺跡	8	第36図 17号住居址	43
第2図 中田小学校遺跡全体測量図	9	第37図 17号住居址カマド	43
第3図 1号住居址・カマド	11	第38図 17号住居址出土遺物	44
第4図 1号住居址出土遺物	12	第39図 18号住居址・出土遺物	45
第5図 2号住居址	12	第40図 19号住居址	46
第6図 2号住居址出土遺物	13	第41図 19号住居址出土遺物	48
第7図 3号住居址・カマド	14	第42図 19号住居址出土遺物	49
第8図 3号住居址出土遺物	15	第43図 20号住居址	50
第9図 4号住居址	16	第44図 20号住居址カマド	49
第10図 4号住居址出土遺物	16	第45図 20号住居址出土遺物	52
第11図 5号住居址・カマド	18	第46図 20号住居址出土遺物	53
第12図 5号住居址出土遺物	19	第47図 21号住居址	55
第13図 5号住居址出土遺物	20	第48図 21号住居址出土遺物	56
第14図 6号住居址	22	第49図 21号住居址出土遺物	57
第15図 6号住居址出土遺物	22	第50図 22号住居址	58
第16図 7号住居址・カマド	24	第51図 22号住居址出土遺物	59
第17図 7A号住居址出土遺物	25	第52図 23号住居址・カマド	61
第18図 7B号住居址出土遺物	26	第53図 23号住居址出土遺物	62
第19図 8号住居址・8Bカマド	27	第54図 24号住居址	62
第20図 8号住居址出土遺物	28	第55図 24号住居址出土遺物	63
第21図 9号住居址	29	第56図 25号住居址・カマド	64
第22図 9号住居址出土遺物	30	第57図 25号住居址出土遺物	65
第23図 幻の10号住居址出土遺物	31	第58図 26号住居址	66
第24図 11号住居址	32	第59図 26号住居址出土遺物	67
第25図 11号住居址出土遺物	32	第60図 26号住居址出土遺物	68
第26図 12号住居址	34	第61図 配石造構	70
第27図 12号住居址出土遺物	35	第62図 配石造構出土遺物	71
第28図 13号住居址	35	第63図 配石造構出土遺物	72
第29図 13号住居址出土遺物	36	第64図 配石造構出土遺物	73
第30図 14号住居址	37	第65図 土壙群	75
第31図 14号住居址出土遺物	38	第66図 埋壺	76
第32図 15号住居址	39	第67図 堀立柱建物址	77
第33図 15号住居址出土遺物	39	第68図 1号溝	78
第34図 16号住居址	40	第69図 造構外出土遺物	78
第35図 16号住居址出土遺物	41	第70図 造構外出土遺物	79

図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景、1・2号住居址
- 図版2 3・4・5号住居址
- 図版3 6・7・8A号住居址
- 図版4 8B・9・11号住居址
- 図版5 12・13・14号住居址
- 図版6 15・16・17号住居址
- 図版7 18・19・20号住居址
- 図版8 21・22・23号住居址
- 図版9 24・25・26号住居址
- 図版10 1号掘立柱建物址、配石遺構、1号埋甕
- 図版11 3・13・17号住居址遺物出土状況
- 図版12 19・20・21号住居址遺物出土状況
- 図版13 1・4・5号住居址出土遺物
- 図版14 6・7A・7B・8B号住居址出土遺物
- 図版15 14・15・16・17・19号住居址出土遺物
- 図版16 20号住居址出土遺物
- 図版17 22・24号住居址出土遺物
- 図版18 21・26号住居址出土遺物
- 図版19 幻の10号住居址・配石遺構出土遺物
- 図版20 1号埋甕、2号壇臺、溝状遺構出土遺物、遺構外出出土遺物

I 調査に至る経緯と概要

並崎市塩川右岸の県営圃場整備事業は、昭和57年から始まり、昭和59年度には、中田町中条の中田小学校南側の50000m²が実施予定となっていた。本市教育委員会では、塩川土地改良区事務局から依頼を受け、事業予定地区を昭和58年度に試掘調査を行い、遺跡の存在を確認した。引き続き、その結果をもとに、県北土地改良事務所・県教育委員会文化課・塩川土地改良区事務局・市教育委員会で協議を行い、遺跡名を中田小学校遺跡とし、昭和59年度圃場整備事業に先立って5000m²以上を対象として発掘調査を行い、記録をもって保存に代えることとした。

発掘調査は昭和59年5月より開始し、約半年間行った。引き続き遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは昭和60年3月であった。

II 遺跡の立地と環境（第1図）

1. 遺跡の立地

中田小学校遺跡は、山梨県甲斐市中田町中条字西町櫻田地内に所在した。

並崎市は山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的に畠山・台地・平地の3地域に分けられる。塩川右岸の氾濫原は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓西端の断崖と、七里ヶ岩台地東側の片山とにはさまれた低地性平地で、地内を貫流する黒沢川・藤井堰により水の便がよく、肥沃で豊かな水田地帯となっている。（「甲斐国志」には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、並崎等ノ數村ヲ里人藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。）当該地帯は平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、たび重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることが判る。このような微高地上は古来居住地としての利用を考えられ、本遺跡も西側を南東方向に沢がはしる標高約400mの微高地上に位置していた。

2. 周辺の遺跡

中田小学校は、仁科義男「甲斐の先史並原史時代の調査」（『甲斐志料集成』1935年）に、その敷地内から縄文時代の遺物が出土したことが報告されており、中田町中条周辺は縄文時代遺物散布地として知られ、金山（縄文時代・平安時代）①、下木戸（平安時代）②、中道（縄文時代）③などの遺跡がある。また南側に続く藤井町にも遺跡が多く、坂井1（縄文時代）④、宮の前（縄文時代・弥生時代）⑤、後田（縄文時代・弥生時代）⑥、殿田（縄文時代・弥生時代）⑦、北下条⑧などの遺跡がある。北下条遺跡は昭和57年11・12月に本市教育委員会によって調査され、弥生時代から平安時代までの住居址10軒が発見されている。それらの遺跡が存在する低地西側の片山（七里ヶ岩）台上は、八ヶ岳火砕流によって形成され、小円頂丘・窪地が点在し所々に湧水が発達しており、山梨県を代表する標式遺跡の坂井遺跡⑨をはじめ、古墳時代集落址と方形周溝墓の発見された坂井南遺跡⑩、天神前（縄文時代）⑪、中条上野1（縄文



第1図 中田小学校遺跡と周辺遺跡

時代) ⑫、中条上野 2 (縄文時代) ⑬の各遺跡がある。

また、中世の城郭跡として、武田氏の一族穴山氏の宅跡と伝えられる黒駒神社⑭とその要害城の能見城跡⑮、現在国指定史跡となっている武田勝頼の築城による、新府城跡⑯がある。



第2図 中田小学校遺跡全体測量図 (1 : 600)

III 遺跡の地相概観

調査区域は、中田小学校南側の約5000m²の日当りのよい、南へ緩やかな傾斜をもつ微高地で、東側は集落、西側は沢となっている。調査区域北端断面の土層を観察すると、上位から下位に耕作土・水田床土・暗褐色土・砂質褐色土・砂以下砂礫層の順に堆積がみられる。遺構はほぼ砂質褐色土中に掘り込まれているが、この層序はおおむねであり、調査区域内全体に共通するのではなく、西側では水田床土直下に暗褐色土があり、南半部は砂利の流入が多い。また遺構の検出されなかった部分では暗褐色土の下はすぐ砂礫層となってしまっていた。これらは旧河川の複雑な氾濫によるものであろう。

IV 遺構と遺物

調査の結果、堅穴式住居址27軒・掘立柱建物址2棟・配石遺構1基・溝・土壙群などが発見された。以下、住居址から遺構と遺物について順に説明する。

（1号住居址）（第3・4図）

〔遺構〕

調査区西北端に位置する。水田床土下の暗褐色土中に褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は東西約3.9m、南北約2.8mで、平面形は略長方形を呈する。壁高は20cm前後を測る。床面は暗褐色土で平坦である。柱穴・周溝はない。カマドは東壁を30cm程掘り込んで構築されている。長さ1m、幅90cmで、天井部は陥没、両袖に石を使い土を覆ってつくられている。燃焼部は床面より若干深み、厚さ30cm前後で焼土がみられる。

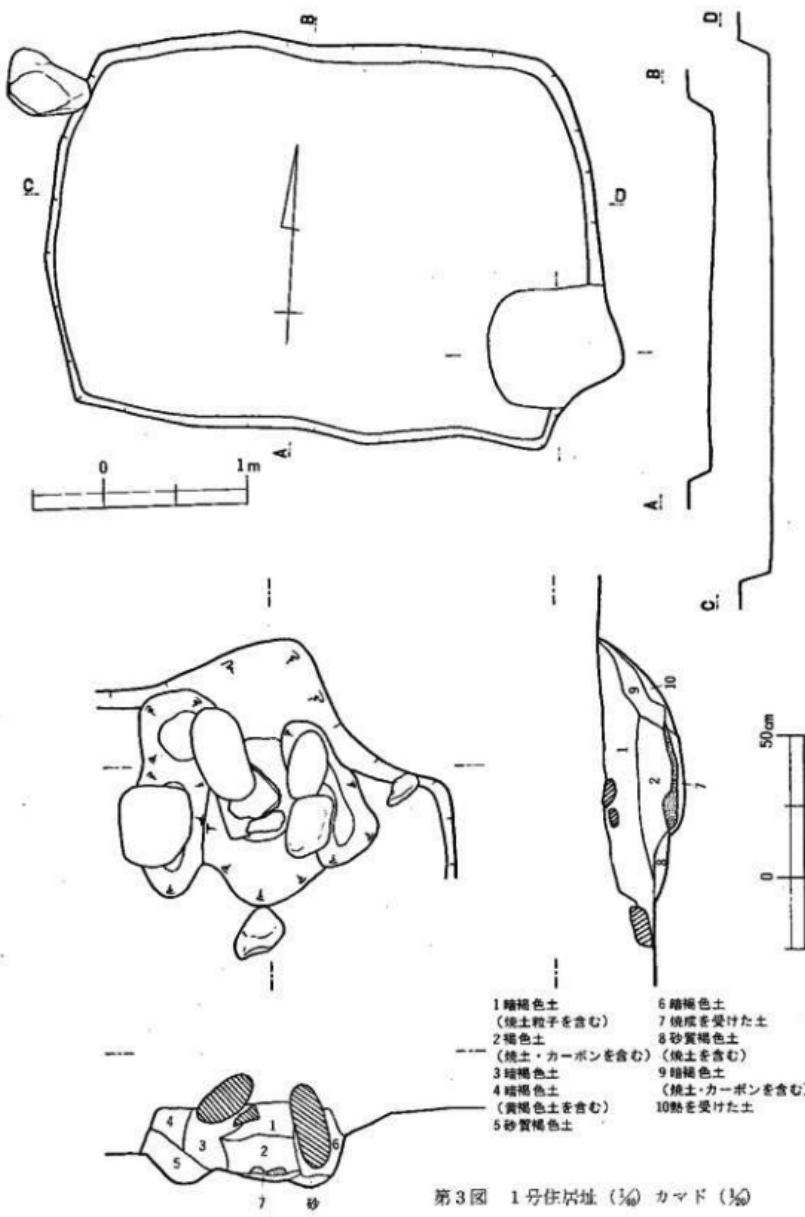
〔出土遺物〕

カマド南側に主に坏類が出土した。

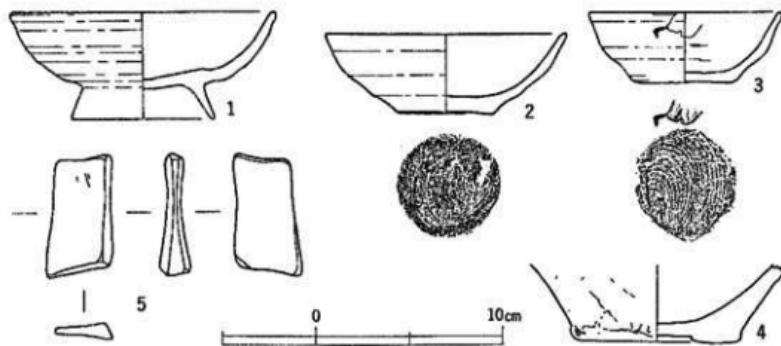
出土遺物一覧

（単位：cm）

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 （外色 内色）	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	上師器	坏	5.6	13.8	7.4	砂粒を含む	黄赤褐色	付高台？ 強欠損
2	上師器	坏	4.2	12.6	5.0	砂粒を含む	黄赤褐色	底部 回転系切り 強欠損 内面 埋下の煤付着
3	土師器	坏	3.7	10.1	5.0	砂粒を含む	褐色	底部 回転系切り 強欠損 外面 墓書
4	上師器	甕	—	—	8.4	金雲母を多量に含む	暗赤褐色	底部破片
5	石器	砥石						全面にわたり使用痕あり ツール付着



第3図 1号住居址 (1号) カマド (10)

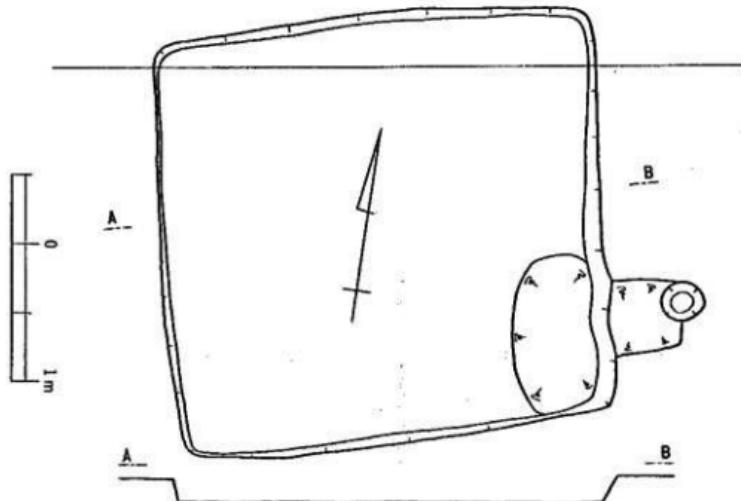


第4図 1号住居址出土遺物(?)

(2号住居址) (第5・6図)

(遺構)

調査区北東端に位置する。砂質褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、発掘する。規模は東西3.2m、南北3.2mで、平面形は方形を呈する。壁高は20cm前後を測る。床面は平坦。柱穴、周溝はない。カマドは東壁に構築されるが、煙道もなくただ掘り窪めてあるだけで、使用した形跡がまったくない。思うに、出土遺物のほとんどないことも考え合わせ、堅穴を掘った段階で何らかの理由により廃棄され使用しなかったのであろう。



第5図 2号住居址(?)

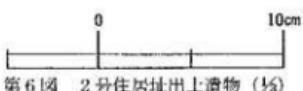
〔出土遺物〕

形状の推定できるものは土師器の环の破片のみ。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量		胎	土	色調 (赤色 青色)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径	厚				
1	土師器	环	—	12.6	—	精 製	赤褐色	外面 ヘラ磨き 内面 放射状暗文 略欠損



第6図 2分住居址出土遺物(分)

〈3号住居址〉 (第7・8図)

〔遺構〕

調査区北東端2号住居址の南側に位置する。住居址内埋没土は暗褐色土が主に堆積。規模は東西約4.5m、南北約4.2mで、平面形は略円形を呈する。壁は高さ55cm前後を測り外傾するが、南壁には段が認められる。床面は平坦で良好。柱穴・周溝はない。カマドは東壁を掘り込んで構築される。長さ1.6m・幅1.2mで袖は石を使い土を覆ってある。燃焼部は床面より掘り立んである。このカマド西半部は、投げ込まれたように石が集中し、壊れていた。

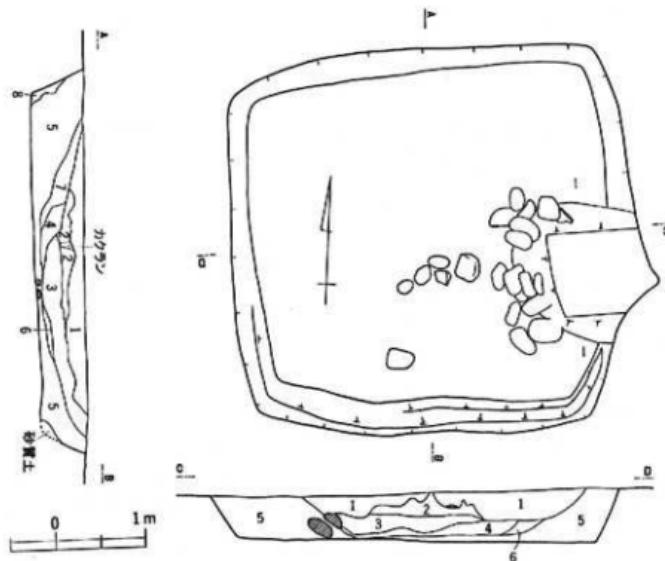
〔出土遺物〕

以上の状況は、部分的に集中するのではなく、須恵器壺はカマド北側、蓋は北壁、鉄鎌は北西コーナーといったように、壁よりに散布しており、そのレベルは床面より若干上位である。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎	土	色調 (白色 青色)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径	厚	砂粒を含む				
1	須恵器	环	4.0	14.0	8.5	やや粗い 白色粒子を含む	白灰色	底部 回転系切り	另欠損
2	須恵器	环	3.7	12.6	8.8	白色粒子を含む	暗灰色	付高台	另欠損
3	土師器	环	7.2	15.6	9.0	砂粒を含む	赤褐色	削り出し高台?	另欠損
4	須恵器	壺	13.0	4.2	6.6	白色粒子を含む	灰色	底部 静止系切り後ヘラ削り 略完形	
5	土師器	壺?	—	—	6.5	砂粒を含む	赤褐色 白褐色	底部 回転系切り 胴部上半欠損	
6	須恵器	蓋	3.0	5.4	—	白色粒子を含む	赤灰色		另欠損
7	鉄器	鎌							

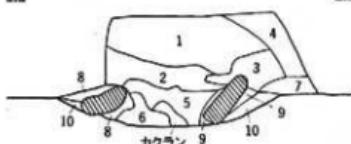
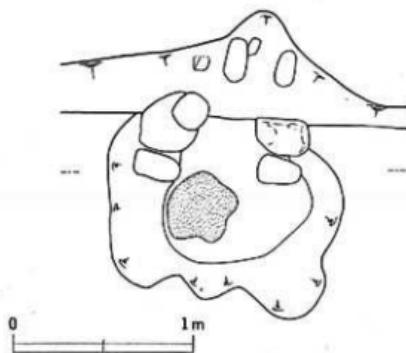


住居址埋没土

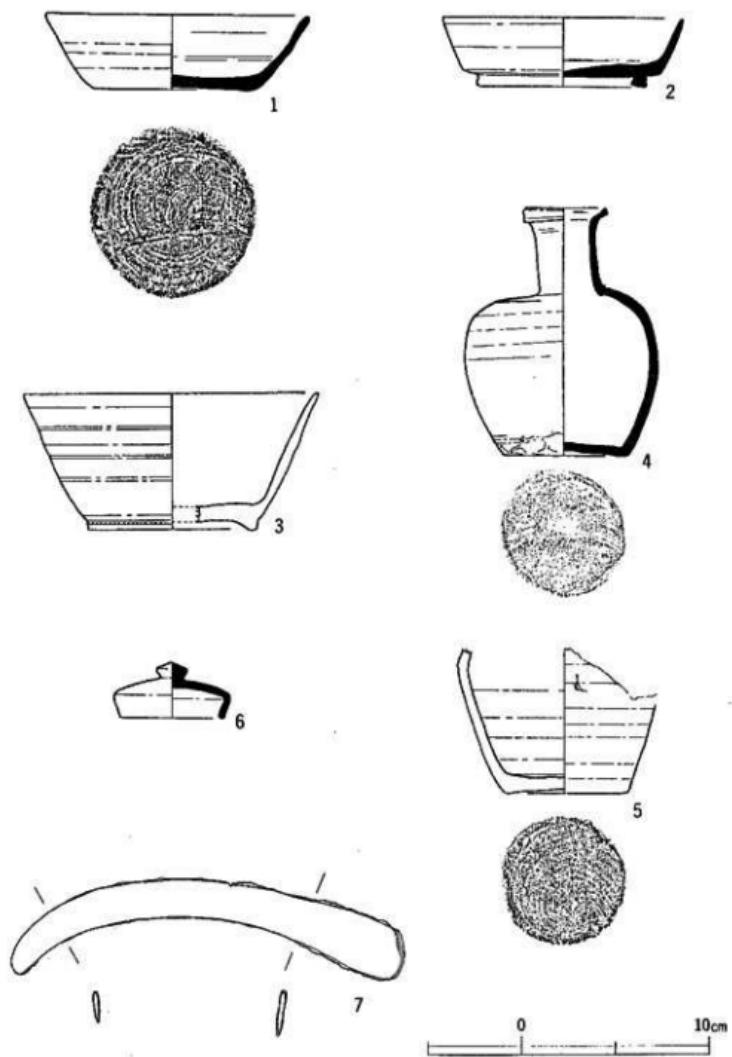
- 1 磨褐色土層(砂を含む)
- 2 磨褐色土層(多量のカーボンを含む)
- 3 磨褐色土層(小粒砂利を含む)
- 4 磨褐色土層(砂利を含む)
- 5 磨褐色土層
- 6 磨褐色土層(若干のカーボンを含む)
- 7 橙色土層(砂質で堅い)
- 8 橙色土層(鉄分を含む)

カマド

- 1 磨褐色土
- 2 磨褐色土(若干の焼土を含む)
- 3 磨赤褐色土(焼土を含み、粘性がある)
- 4 磨褐色土(砂利を含む)
- 5 磨褐色土+焼土+炭
- 6 烧土を多く含む土
- 7 磨褐色土(焼土を混入)
- 8 磨赤褐色土(全体に焼けた土を含む)
- 9 磨赤褐色土(焼土を含む)
- 10 砂質褐色土



第7図 3号住居址 (3) カマド (3)



第8図 3号住居址出土遺物(少)

(4号住居址) (第9・10図)

【遺構】

調査区北端に位置する。北半部は調査区域外で完掘できなかった。規模は東西約4.3mで、平面形は隅内方形を呈すると思われる。壁高は30cm前後を測る。床面は平坦で良好。周溝はない。カマドは北半部に構築されていると思われる。

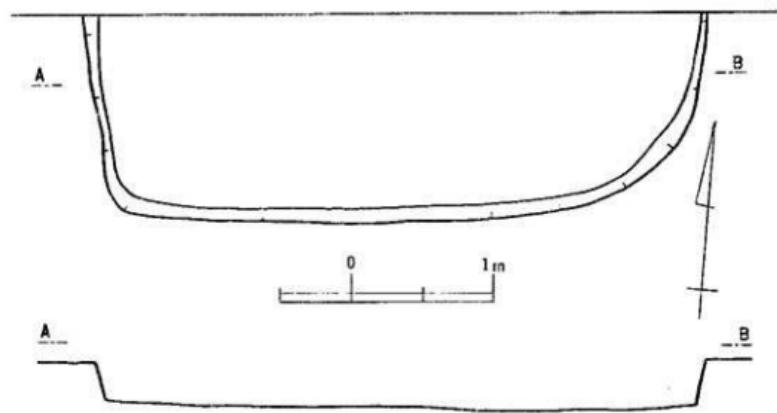
【出土遺物】

遺物の出土は少ない。須恵器の环が床面より20cm位浮上して出土している。

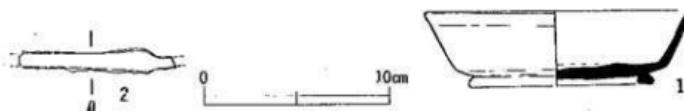
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (ΔE)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	环	4.0	14.2	9.8	白色粒子を含む	白灰色	付高台 口縁部若干欠損
2	鐵器	刀子						



第9図 4号住居址 (36)



第10図 4号住居址出土遺物 (36)

(5号住居址) (第11・12・13図)

【遺構】

調査区北東端に位置する。規模は一辺約4mで、隅円方形の平面形を呈する。壁は外傾し、高さ30cm~50cmを測る。床面は暗黄褐色上で全体的に平坦で堅い。柱穴・周溝は検出されない。カマドは長さ1.8m、幅1.3mで北壁を50cm程掘り込んで構築される。袖部には石が使用してあるが、天井部はくずれ焼土・炭等が多く堆積していた。燃焼部は床面より若干ひくく、焼土が厚さ5cm前後で堆積していた。

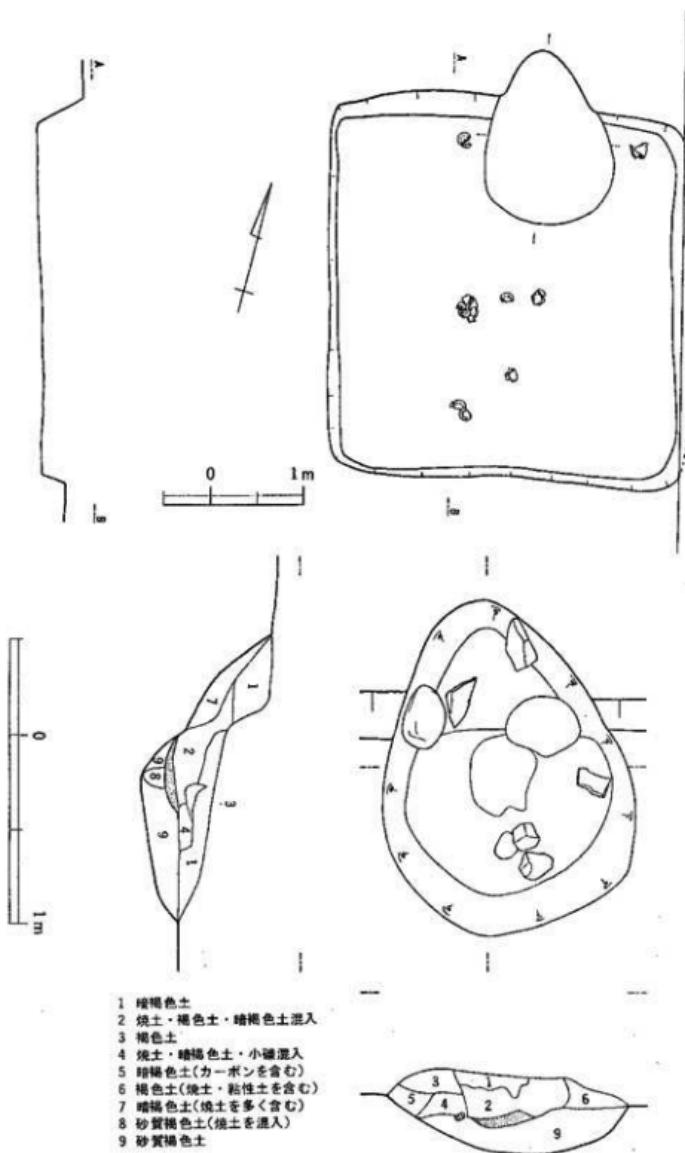
【出土遺物】

遺物はカマド周辺と住居址内中央部からの出土が多い。出土状態はほとんど床面直上からである。但し第12図10は床上20cm以上の埋没土中の破片を接合したもので、他の遺物とは時期を若干異にしていると思われる。

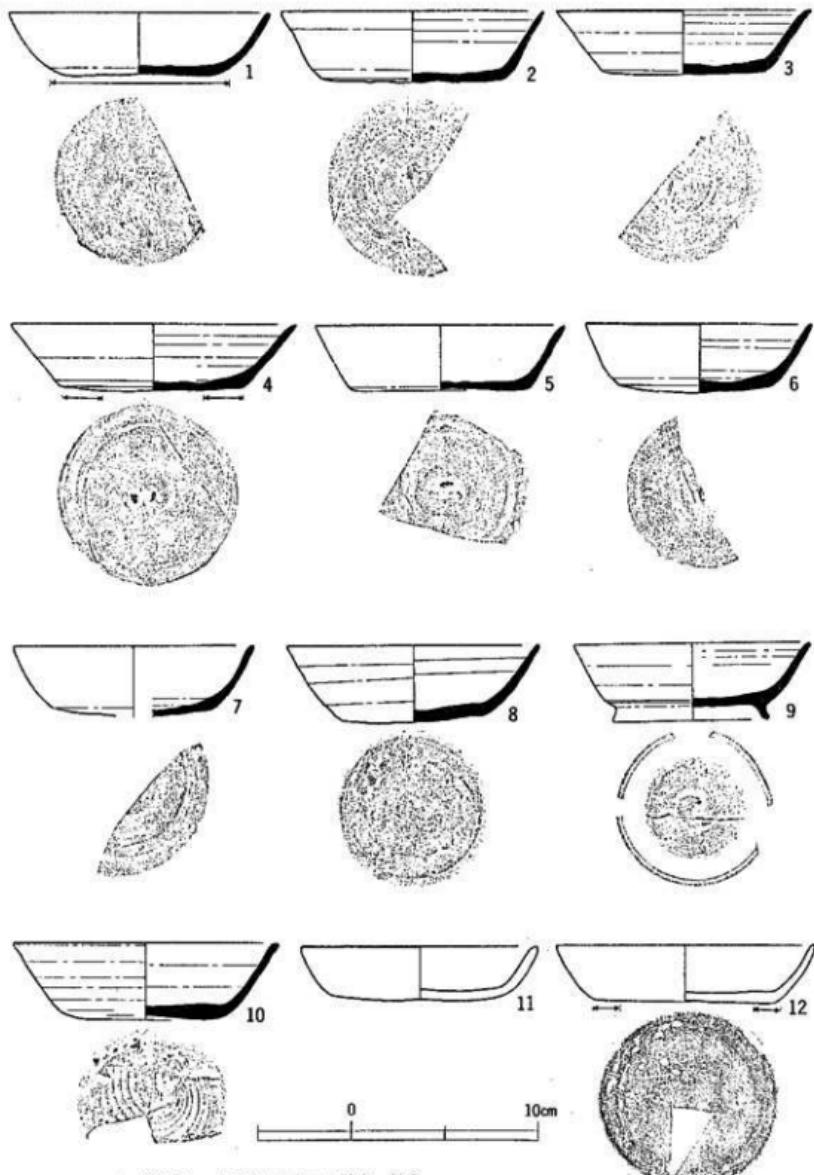
出土遺物一覧

(単位: cm)

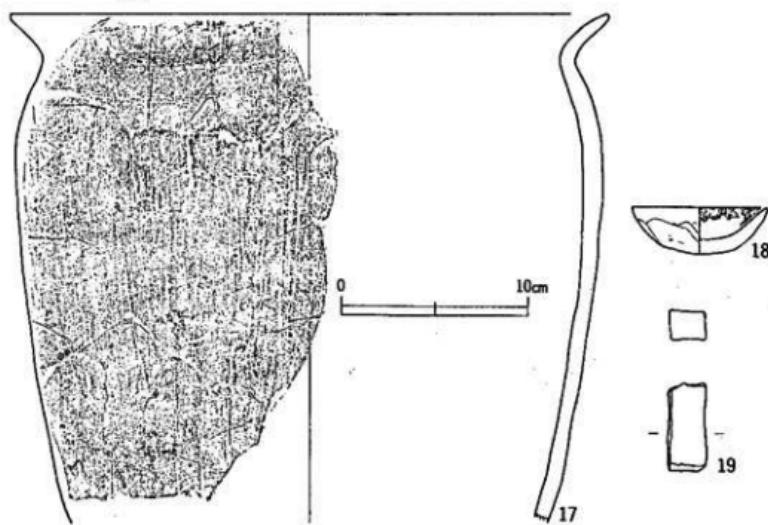
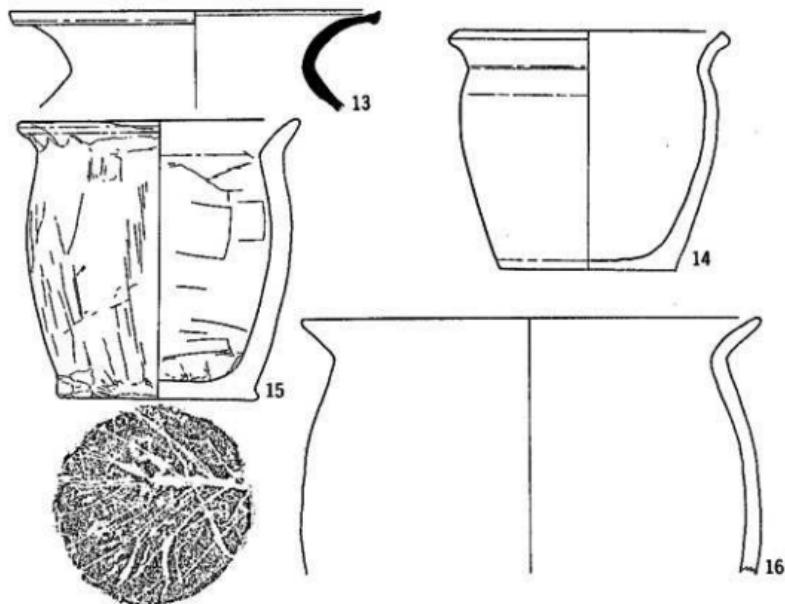
番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (外側) (内側)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	壺	3.4	13.8	9.0	白色粒子を含む	白灰色	底部 回転条切り後全面同軸ヘラ削り 1%欠損
2	須恵器	壺	3.9	13.8	9.4	やや粗い 白色粒子を含む	暗灰色 黄灰色	底部 回転ヘラ切り 1%欠損
3	須恵器	壺	3.5	13.4	9.0	やや粗い 白色粒子を含む	灰 色 白灰色	底部 回転ヘラ切り 1%欠損
4	須恵器	壺	3.5	15.0	9.5	白色粒子を含む	灰 色	底部 回転ヘラ切り後 外周ヘラ削り 1%欠損
5	須恵器	壺	3.5	13.2	9.3	白色・赤色粒 子を含む	白灰褐色 赤灰褐色	底部 回転ヘラ切り 赤焼 1%欠損
6	須恵器	壺	3.7	12.0	8.0	白色粒子を含む	青灰色	底部 回転ヘラ切り後 1%欠損
7	須恵器	壺	—	12.6	—	白色粒子を含む	灰 色 灰褐色	底部 回転ヘラ切り 1%欠損
8	須恵器	壺	4.0	13.3	7.5	白色粒子を含む	青灰色 黄灰色	底部 回転ヘラ切り後粘土を充填 1%欠損
9	須恵器	壺	4.1	12.4	8.2	白色粒子を含む	灰 色	底部 ヘラ切り後付高台 1%欠損
10	須恵器	壺	4.1	13.8	7.4	やや粗い 白色・黒色粒 子を含む	白灰色	底部 回転条切り 1%欠損
11	上師器	壺	2.8	12.4	8.4	精 製	白赤褐色 内面	ヘラ削り+磨き ヘラ磨き 若干欠損
12	上師器	壺	3.0	13.6	9.4	精 製	黄赤褐色	底部 静止条切り後外周のみヘラ削り 若干欠損
13	須恵器	甕	—	19.6	—	白色粒子を含む	黄灰色	



第11図 5号住居址(5) カマド(5)



第12図 5号住居址出土遺物 (3)



第13図 5号住居址出土遺物 (3)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (5色) (内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
14	土師器	甕	12.6	14.0	9.3	砂粒を含む	赤褐色	口縁部 横ナギ 外側 横ナギ
15	土師器	甕	14.8	14.8	10.4	砂粒・赤色粒子を含む	黄褐色	口縁部 横ナギ 底部 本葉底 外側 粗い縦ヘラ削り 内側 横ヘラ削り
16	土師器	甕	—	24.2	—	砂粒を含む	黄褐色 黄赤褐色	口縁部 横ナギ
17	土師器	甕	—	31.6	—	砂粒を含む	黄白褐色	口縁部 横ナギ 外側 粗い縦ヘラ磨き
18	土師器	壺 (付蓋有)	2.5	7.1	—	微砂粒を含む	黄褐色	口縁部 煙付着 底部 ヘラ削り
19	石器	砾石						全面にわたり使用痕あり

〈6号住居址〉 (第14・15図)

〔遺構〕

調査区北東端5号住居址の南側に位置する。東側は調査区域外で完掘できなかった。規模は南北約4.6m。削平されており、壁高は15cm前後を測る。床面は平坦であるが軟弱であった。柱穴・周溝はない。火災を受けたらしく炭化材が散在していた。

北西コーナーに、直径約1.2m深さ約60cmの土壤が検出された。

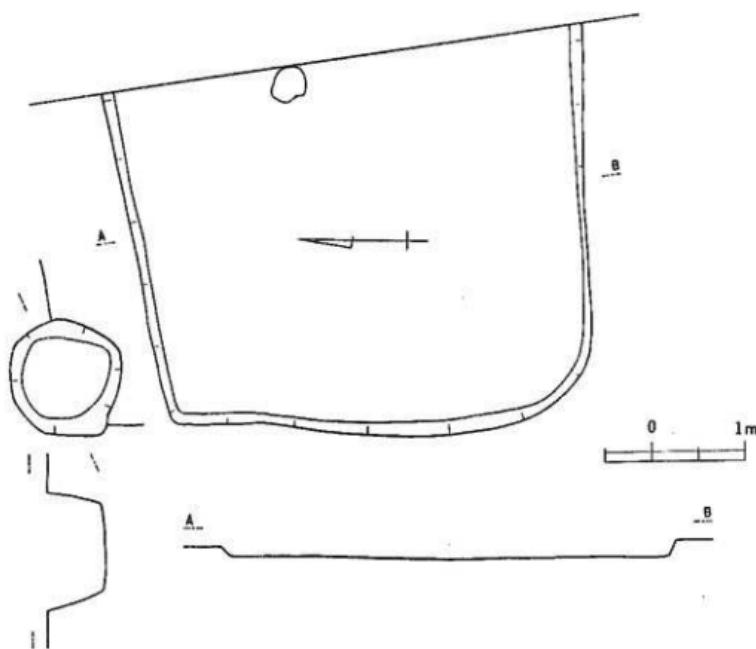
〔出土遺物〕

遺物の出土は極僅かであるが、炭化した木挽の口縁部破片と鉄器など特殊なものがある。

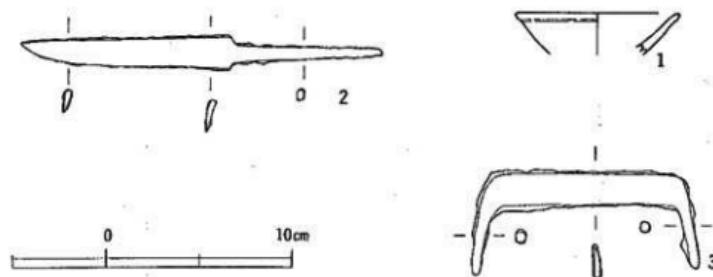
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (5色) (内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	木器	壺	—	8.6	—			全面炭化 口縁部破片
2	鉄器	力子						
3	鉄器							



第14図 6号住居址 (ノム)



第15図 6号住居址出土遺物 (ノム)

(7号住居址) (第16・17・18図)

〔造構〕

調査区北東部に位置する。砂質褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、土居觀察用土手を残し発掘する。当初一軒としていたが調査の結果東側にもう一軒確認され、前者をA、後者をBとした。

Aの規模は東西3.4m、南北3.2mで、平面形は隅円方形を呈する。小形の深い住居址であるが、東壁はBに切られている。壁高は45cm前後を測る。床面は砂質土で軟弱であった。柱穴・周溝はない。カマドは長さ1m、幅90cmで、北壁を約30cm掘り込んで構築される。袖部は石を使い粘土を覆ってあり、天井部は陥没。燃焼部は床面より若干産み、焼上の厚さは3cmを測る。

Bの規模は東西3.8m、南北4.3mで、平面形は不整長方形を呈する。西壁はAと重複しており明瞭ではなかった。壁高は25cm前後を測る。床面は暗褐色土で、堅く平坦であった。柱穴・周溝はない。カマドは長さ約1.3m、幅1.1mで、北壁を若干掘り込んで構築される。燃焼部は床面より産み、焼上の最大厚さは5cmを測る。粘土でつくられたと思われるが、つぶれていた。

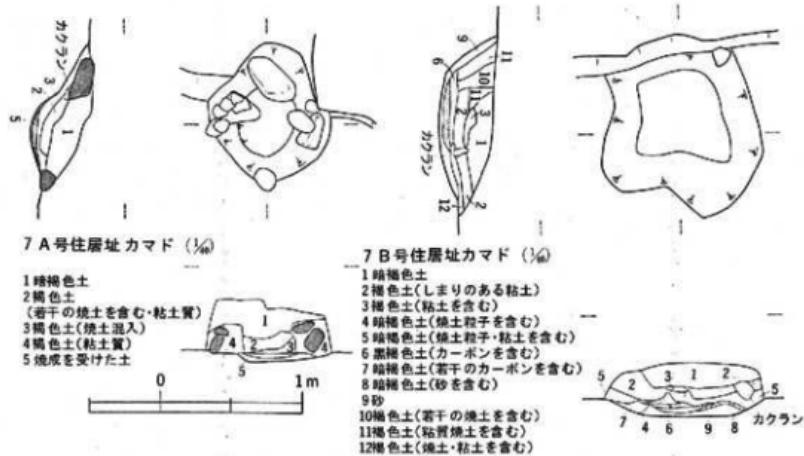
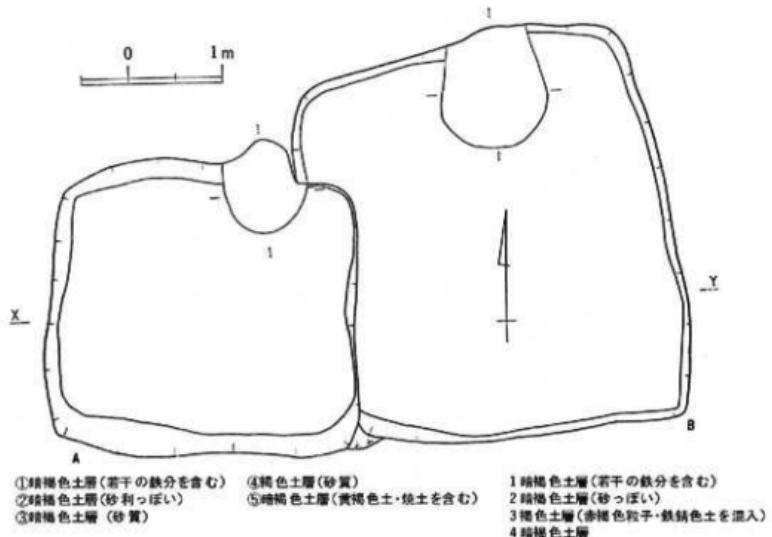
〔出土遺物〕

A、Bともに遺物の出土は少ない。Aは埋没土上位からの出土が多く、本住居址に伴うものかどうかは疑問が残る。Bは略床面直上での出土であり坏類が主である。また馬の歯と思われるものが、カマドより南西方向に50cm程離れて出土した。

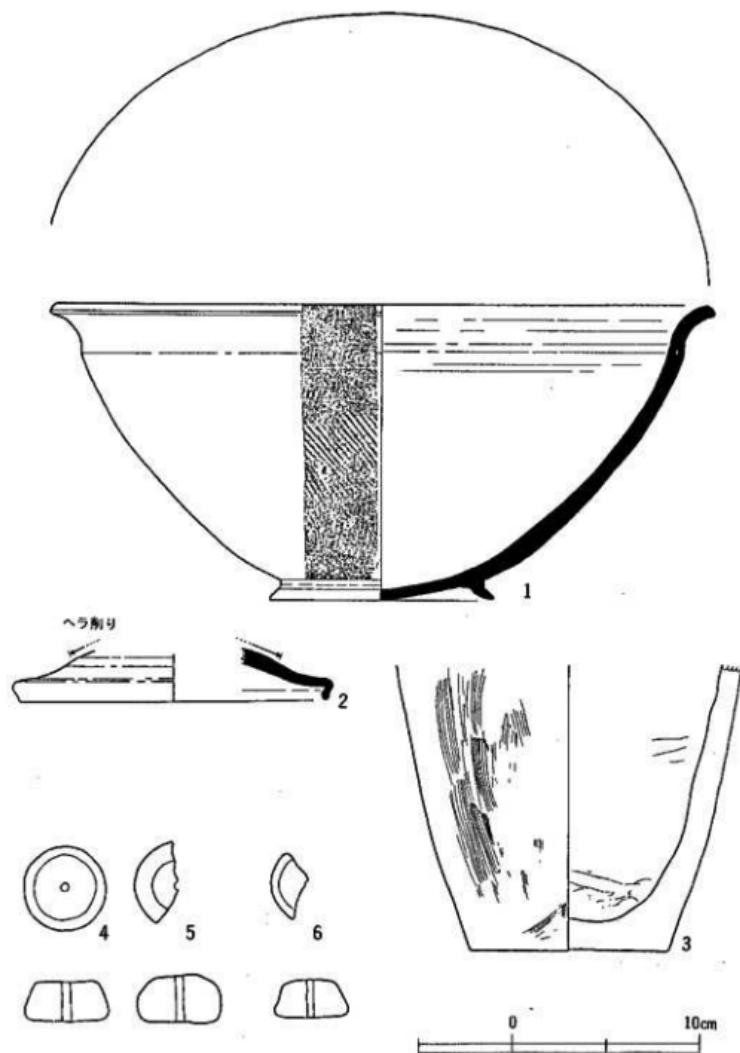
出土遺物一覧

(単位: cm)

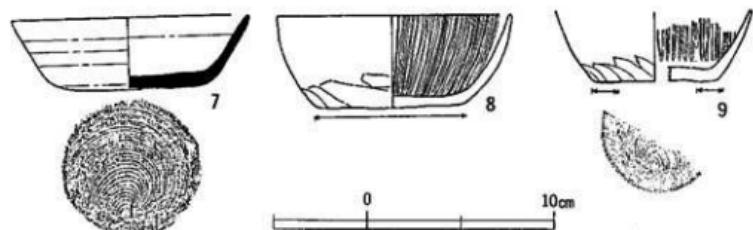
番号	種類	器形	法量			胎	色調 (外面)	形・特徴	その他
			器高	口径	底径				
1	須恵器	鉢	15.7	32.8	11.8	白色粒子を含む	赤灰色	外面 脊部下半に叩き目付高台	孔欠損
2	須恵器	蓋	—	15.2	—	白色粒子を含む	青灰色	外面 上部回転ヘラ削り	孔欠損
3	土師器	甕	—	—	10.5	石英・長石 赤色粒子を含む	赤灰褐色 黄褐色	外面 縦ハケ整形	底部のみ
4	土師器	紡錘車	3.2	3.3	4.4	微砂粒を含む	黄赤褐色		
5	土師器	紡錘車	2.5	2.5	3.6	微砂粒を含む	黄赤褐色		
6	土師器	紡錘車	2.0	3.7	3.6	微砂粒を含む	黄赤褐色		
7	須恵器	壺	3.8	12.5	7.2	白色粒子を含む	白灰色	底部 回転糸切り	孔欠損
8	土師器	壺	4.8	12.4	7.4	精製 赤色粒子を含む	黄褐色	内面・みこみ部 放射状暗文 底部・外面下半 ヘラ削り	完形 墨書き?
9	土師器	壺	—	—	6.4	精製 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 回転糸切り後外周のみヘラ削り 外面 下半ヘラ削り 内面・みこみ部 暗文	破片



第16図 7号住居址 (7th Dwelling Site) カマド (Kamado)



第17図 7A号住居址 出土遺物 (3)



第18図 7B号住居址出土遺物(3)

〈8号住居址〉 (第19・20図)

【遺構】

調査区北東側に位置する。排土作業に際し、カマド部が露呈し住居址と判断。北側に暗褐色土が続くので、十字にトレンチを設定し掘り下げた結果、床面を検出しもう一軒住居址を確認した。前者をA、後者をBとした。

Aの規模は東西約3.5m、南北約3.8mで、平面形は南壁がふくらむ不整長方形を呈する。壁高は20cm前後を測るが、北壁は暗褐色土で明確ではなかった。床面は堅く平坦である。カマドは長さ約1.3m、幅約70cmで、石粗粒製で東壁に構築される。

Bの規模は東西約4.8m、南北約3.6mで、平面形は不整長方形を呈する。壁は外傾し高さ40cm前後を測る。床面は平坦で良好。カマドは北壁に構築される。長さ約70cm、幅約70cmで、袖部は石を使い土を覆ってある。燃焼部火床は焼石があった。

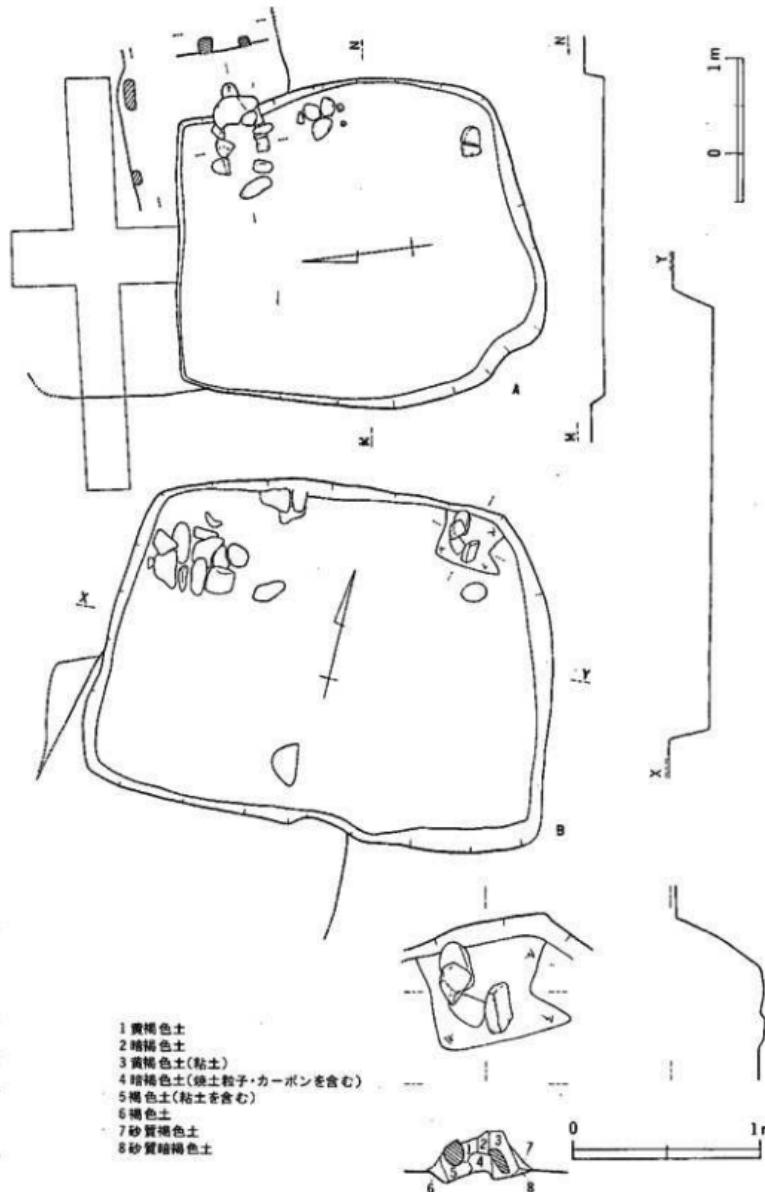
【出土遺物】

A、Bともに遺物の出土は少ない。Aからは、カマド南側床面直上に羽釜が、住居内南東部に床面にめり込んで須恵器壺片が出土している。Bからは、壺頸が床面より若干浮いた状態で出土している。Aの須恵器は若干疑問があるが、出土遺物はA、Bともに住居址にともなうものであろう。

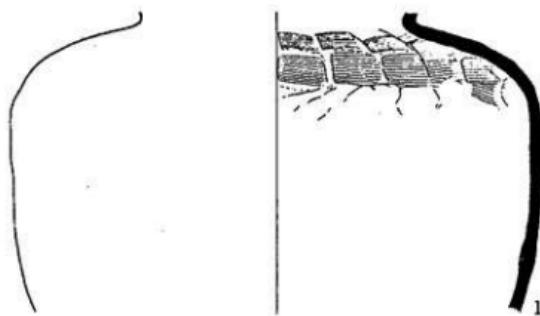
出土遺物一覧

(単位: cm)

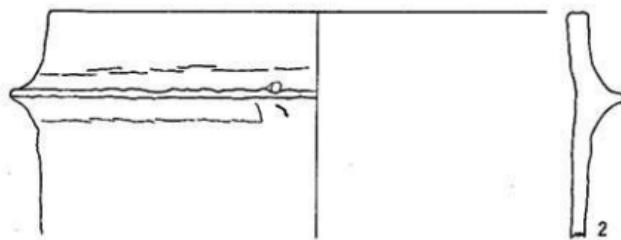
番号	種類	器形	寸 量			胎 上	色 調 (外 面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	壺	—	—	—	精 製	暗灰色 灰 色	外面 叩き目、上部に自然輪 内面 壁模あり 脚部破片
2	土師器	羽釜	—	28.0	—	砂粒を含む	黒褐色	外面 粗いヘラ削き 口縁部 横ナデ 口縁部破片
3	須恵器	壺	4.3	11.7	6.6	精 製	灰白色	底部 回転糸切り 3欠損
4	土師器	壺	4.3	11.0	6.0	精 製	赤褐色	底部 静止糸切り 外面 黑青 3欠損
5	土師器	壺	4.4	10.8	5.8	精 製	赤褐色 黄褐色	底部・外面下半 ヘラ削り 内面 花弁状暗文 破片



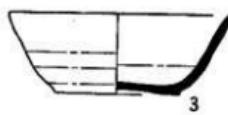
第19図 8号住居址 (3) 8Bカマド (3)



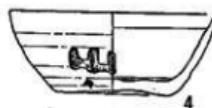
1



2



3



4



5



第20図 8号住居址出土遺物 (少)

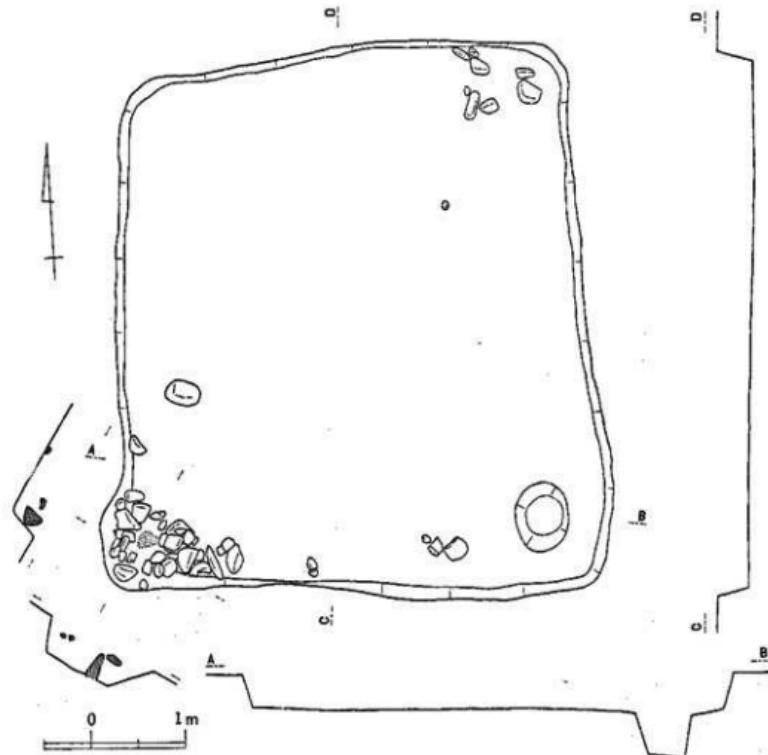
（9号住居址） （第21・22図）

〔遺構〕

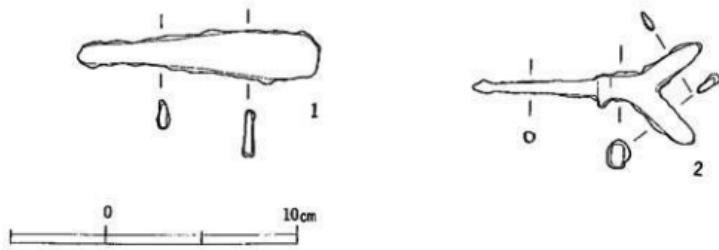
調査区北側に位置する。規模は東西約5.1m、南北約5.6mで、平面形は不整長方形を呈する。壁高は35cm前後を測る。床面は平坦で良好。柱穴は確認されないが、床面南東隅に直径約60cm～70cmの楕円形で床面からの深さ約50cmの穴が検出された。カマドは南西端に壁コーナーを約20cm程掘り込んで、石組で比較的しっかりと構築される。遺存状態は良好で、中央部に焼土がみられた。

〔出土遺物〕

遺物の出土は少ない。埋没土から縄文時代中期末から後期にかけての土器が若干出土したにすぎず、本住居址にともなうと思われる遺物は皆無であった。但し鉄器2点の出土が目についた。1はカマド袖石直下からの出土で、木質部を僅かに残す刀子と思われる。2は鉄鋤。



第21図 9号住居址（21）



第22図 9号住居址出土遺物(16)

〈幻の10号住居址〉 (第23図)

調査区北西部に、耕土作業に際し土器片の集中して出土した箇所があったので、何らかの遺構があるものと思い、10号住居址と番号をついた。しかし、調査の結果は縄文時代の土器片が出土したのみで、遺構は確認されなかった。

幻の10号住居址となったわけであるが、資料として以下にいくつかの土器片を紹介しておく。

本土器片は、縄文時代中期末葉から後期の初めにかけてのものである。1は無文で口縁部に微隆帯がめぐる。2は太い沈線により曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施されている。8・19も同様の手法による。3は微隆帯と沈線が施され、口縁部をめぐる微隆帯には縄文が施されている。4は縦位に細い条線が施される。16も同じ手法による。5は口縁部に微隆帯がめぐり、そこから胴部下半には縄文が施され、口縁無文帶には円形列点状刺突文が施されている。6は口縁部に2条の微隆帯がめぐり、その間に縄文が施されている。7は沈線による曲線的な区画文が施され、その間隙に充填縄文が施されている。9も同じ手法によるが、7が石英・長石などの小砂粒を多く含み器面がザラついているのに対し、胎土には白色小砂粒を含み焼成良好である。10・18も同様の手法による。11は内折気味の口縁形を呈し、沈線のみが施されている。12は「8」の字状文を有する把手の資料である。13は把手の資料で、胴部に縄文が施されている。14は縄文を地文とし、沈線による曲線的な区画文を施し、磨消縄文の手法により施文されている。15も同様の手法と思われる。17は縄文を地文とし、比較的太い沈線による区画文を施し、その内側に幅の広い無文帶をつくりだしている。20は沈線により曲線的な文様が施され、その間に刺突文が施文されている。21・22は底部資料。21は多く石英・長石などの砂粒を含み、底に压痕を残す。色調はともに褐色を呈する。23は蓋。直径7cm前後で、単孔を有するつまみがついている。色調は赤褐色を呈し、外面は丁寧にみがきがかけられており、2個1単位の小孔が対称的に2単位あけられている。つまみ部には刺突文がある。24は弥生時代のものと思われる台付甕の資料。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

〈11号住居址〉 (第24・25図)

【遺構】

調査区北半部、9号住居址と15号住居址との間に位置する。今回の調査で唯一の縄文時代の

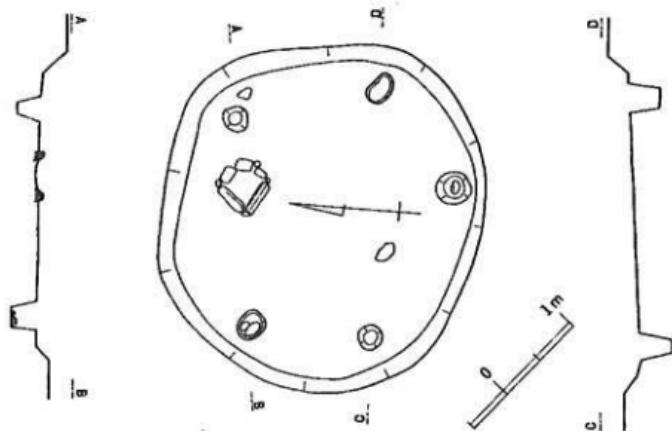


第23図 幻の10号住居址出土遺物（35）

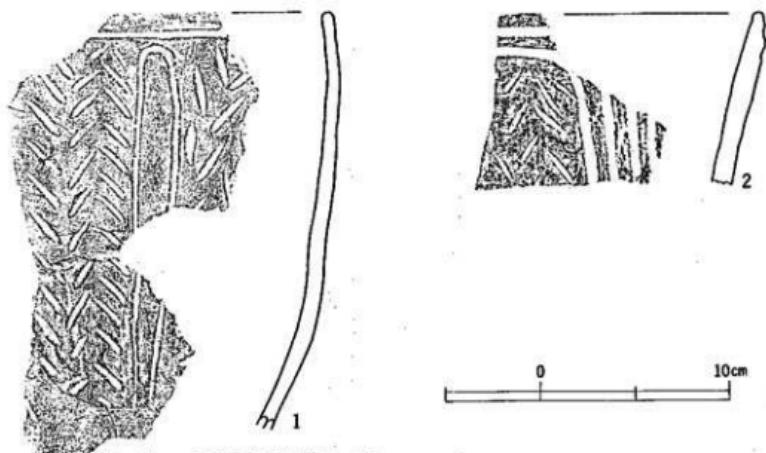
住居址である。規模は東西約3.8m、南北約3.4mを測り、不整円形の平面形を呈する。床面は平坦で良好。壁は外傾し、高さ20cm前後を測る。柱穴は壁に沿って5ヶ所確認された。炉は石圓炉で、中央から北よりに構築される。燃焼部は床面より若干窪む。

〔出土遺物〕

比較的浅い竪穴でもあり、出土遺物は少なかった。1・2ともキャリバー形の深鉢形土器の資料である。沈線を施し、脇部には「八の字」文が施文されている。



第24図 11号住居址 (3)



第25図 11号住居址出土遺物 (3)

（12号住居址） （第26・27図）

〔遺構〕

調査区中央部に位置する。規模は東西約5.5m、南北約6.8m。平面形は略長方形を呈するが、西壁が長さ約3.8mにわたり20cm程出ている。壁高は25cm前後を測る。床面は平坦であるが軟弱であった。4ヶ所に穴が確認された——位置、大きさなど若干問題はあるが、柱穴と考えたい。南西端にカマドと思われる石組遺構が検出されたが、使用されたことを物語る焼土がないためカマドとは別の遺構であろう。しかし他にカマドらしき遺構はなかった。

〔出土遺物〕

本住居址は暗褐色土の埋没土で、遺物はその上位から出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外側 (内側))	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	壺	—	—	—	精製	白灰色 灰色	外面 印き目 上部に自然縫
2	土師質	壺	4.2	15.2	6.6	微砂粒・赤色 粒子を含む	赤灰褐色 暗赤褐色	底部 回転糸切り 彌欠損
3	土師質	壺	2.4	9.4	5.3	微砂粒を含む	暗褐色	底部 回転糸切り 彌欠損
4	土師質	壺	2.5	8.6	4.6	微砂粒を含む	白灰褐色	底部 回転糸切り 彌欠損
5	土師質	壺	2.3	8.4	4.2	微砂粒・赤色 粒子を含む	暗褐色	底部 回転糸切り 彌欠損

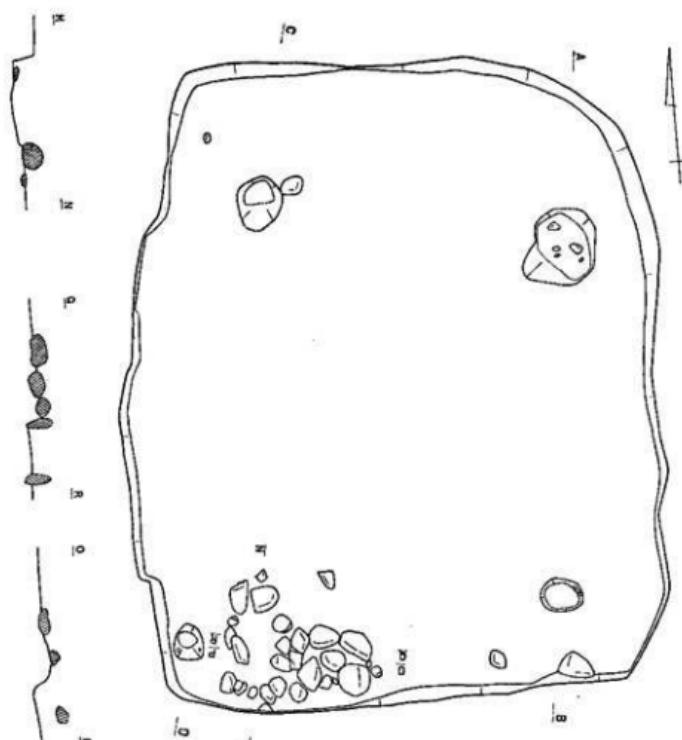
（13号住居址） （第28・29図）

〔遺構〕

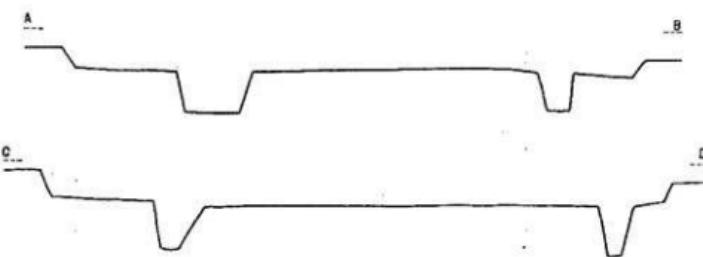
調査区東端に位置する。砂質土中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。規模は東西約4.6m、南北約4.9m。平面形は略方形を呈する。削平により南西部壁は遺存していない。残存部で壁高は5cm~15cm前後を測り、ゆるやかな立ち上がりをみせる。床面は踏み堅められ、いわゆるパリパリの状態である。柱穴、周溝は確認されない。カマドではなく、床面に焼けた跡が3ヵ所あった。

〔出土遺物〕

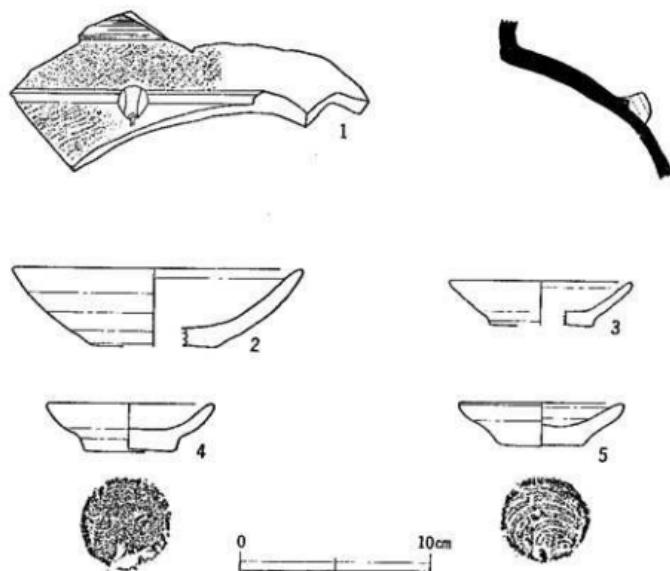
出土遺物は少なく、土師質土器が何点か出土している。特殊なものとして鉛2個が出土した。鉛は2個とも、床面より若干上に位置し、北壁際に発見された。一つは金銅製で、表面に僅かに鍍金の痕跡がみられた。また一部に布残片が付着しており、布につつまれていたか袋にはいっていた可能性がある。接合部は下部を上部の上に重ねる部分と、上部を下部の上に重ねる部分とが交互にあるようである。丸は径9mmの鉄球である。別の一つは鉄製で、接合部は上部の上に下部を重ねてあり、さらにそのつなぎに別の金属（赤金色を呈す）を用いている。丸は粉失して、ない。



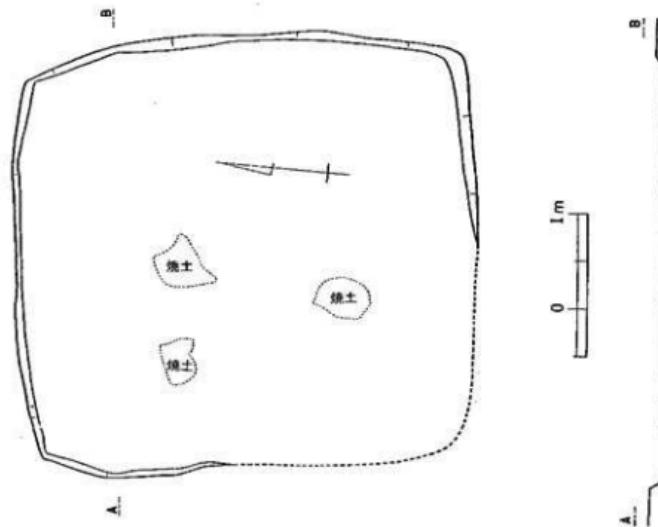
0 1m



第26図 12号住居址 (3)



第27圖 12號住居址出土遺物 (36)

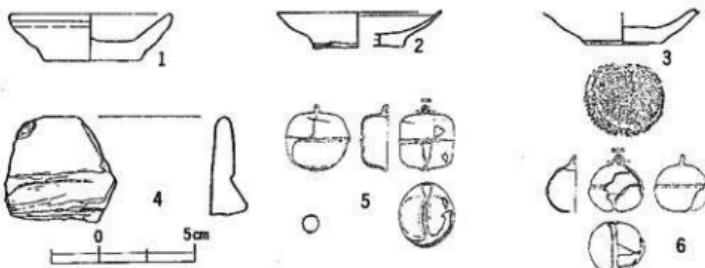


第28圖 13號住居址 (36)

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外側 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径					
1	土師質	壺	2.5	8.3	5.0	砂粒を含む	暗褐色	底部 回転条切り 弓欠損
2	上師質	壺	1.8	8.6	4.8	砂粒・金雲母を含む	黒褐色	底部 回転条切り 弓欠損
3	土師質	壺	—	—	4.0	砂粒・赤色粒子を含む	黄褐色	底部 回転条切り
4	土師質	羽釜	—	—	—	砂粒・赤色粒子を含む	黒褐色 黄褐色	
5	銅器	鉈						金銅製 表面に鍍金
6	鉄器	鉈						



第29図 13号住居址出土遺物(3分)

(14号住居址) (第30・31図)

【遺物】

調査区北半部、12号住居址の北側に位置する。砂質褐色土の中に暗褐色土の落ち込みを発見し発掘する。北側は正体不明の造構に切られていた。規模は東西約3.7m、南北約4.3m。平面形は路長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、高さ25cm前後を測る。床面は砂質土で、堅い面が散在するが、北側四半部は造存していない。カマドはないが、床面中央部から東へ寄った所に焼土があった。

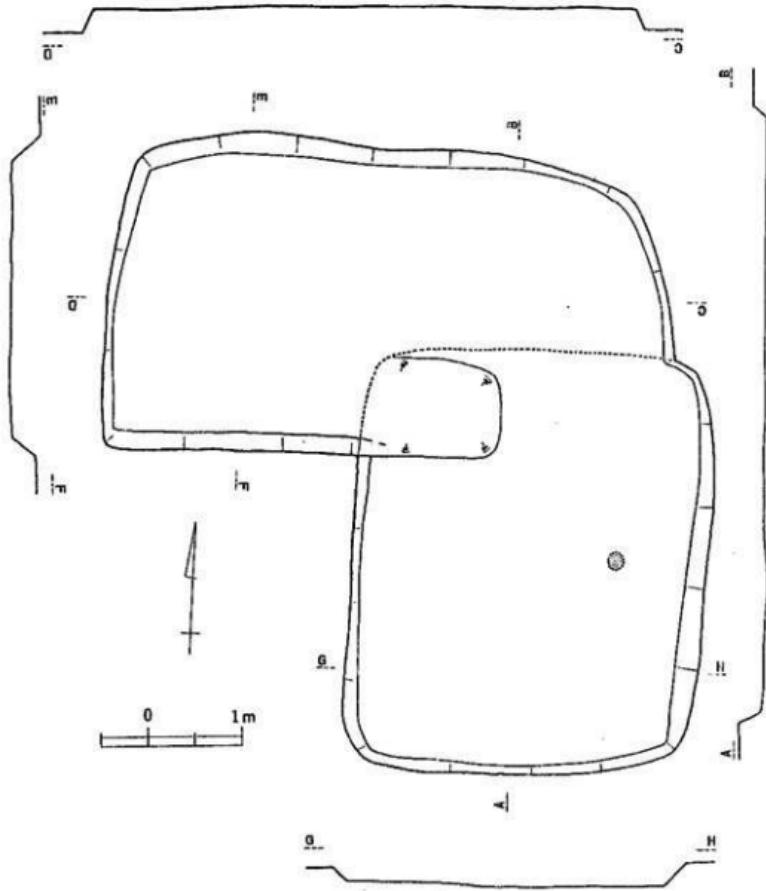
【出土遺物】

北側の造構からは遺物の出土はない。本住居址の遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

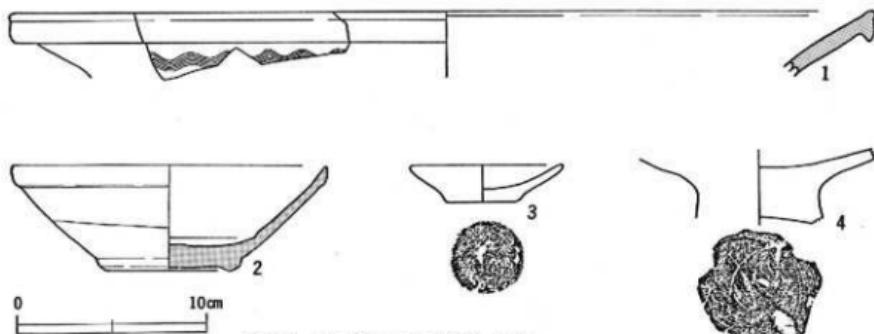
(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外側 内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径					
1	陶器	甕	—	46.0	—	精 製	灰褐色 綠灰色	外面 施釉 波状文あり 内面 自然釉



第30図 14号住居址 (ノ)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外面) (内面)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径					
2	白磁	碗	5.6	16.4	6.4	精 製	緑白色	彫欠損
3	土師質	环	2.0	7.8	3.6	砂粒・赤色粒子を含む	黄白褐色	底部 回転糸切り 若干欠損
4	上師質	台付环	—	—	—	砂粒・金雲母を含む	暗褐色	底部 回転糸切り



第31図 14号住居址出土遺物（少）

（15号住居址） （第32・33図）

【遺構】

調査区中央部に位置する。規模は東西約5.7m、南北約6.2m。深く残りのよい住居址である。平面形は略方形を呈する。壁高は一様ではなく、西壁は削平され約25cm、東壁は約50cm、南北壁は約35cmを測る。床面は堅く、平坦で良好であった。カマドは、南東コーナーに石組でしっかりと構築されるが、調査の結果燃焼部と思われる所に焼土は確認されなかった。柱穴・周溝は確認されないが、他に内部施設として、カマド北側東壁にそって長さ約1.5m、幅約50cmで台状の高まりがあった。

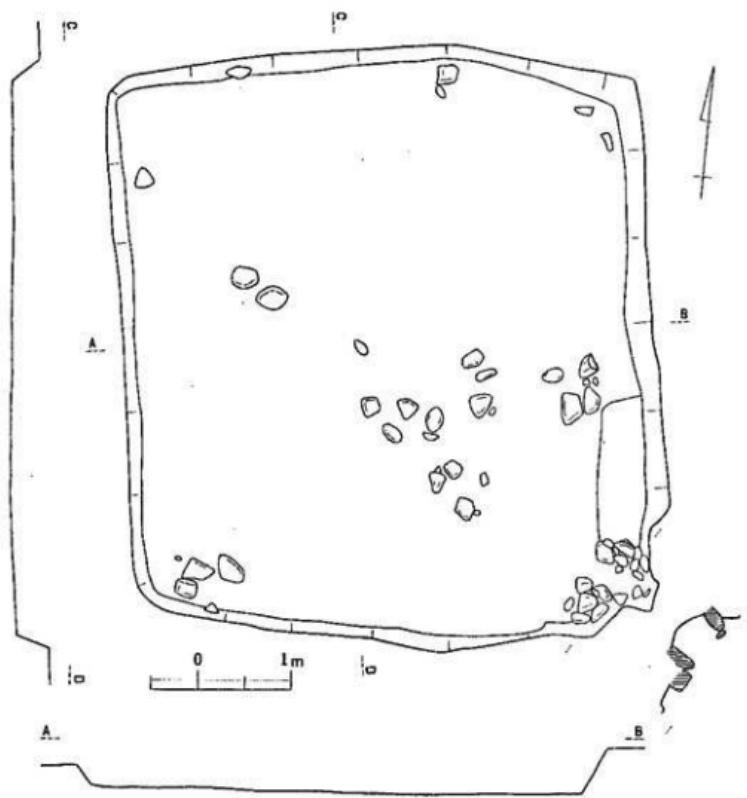
【出土遺物】

遺物の出土は少ない、カマド西側南壁中位に壺が重って出土した。

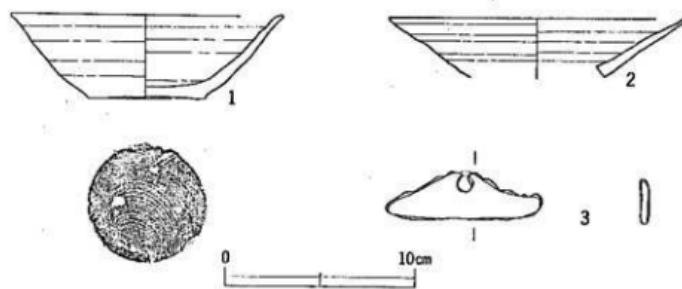
出土遺物一覧

（単位：cm）

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (表 内)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土師器	壺	4.5	14.4	6.2	砂粒・金雲母 を含む	赤灰褐色	底部 回転糸切り 口縁部若干欠損
2	土師器	壺	—	15.4	—	金雲母・赤色 粒子を含む	黄赤褐色	口縁部破片
3	鉄 器	火打 金						



第32図 15号住居址 (3)

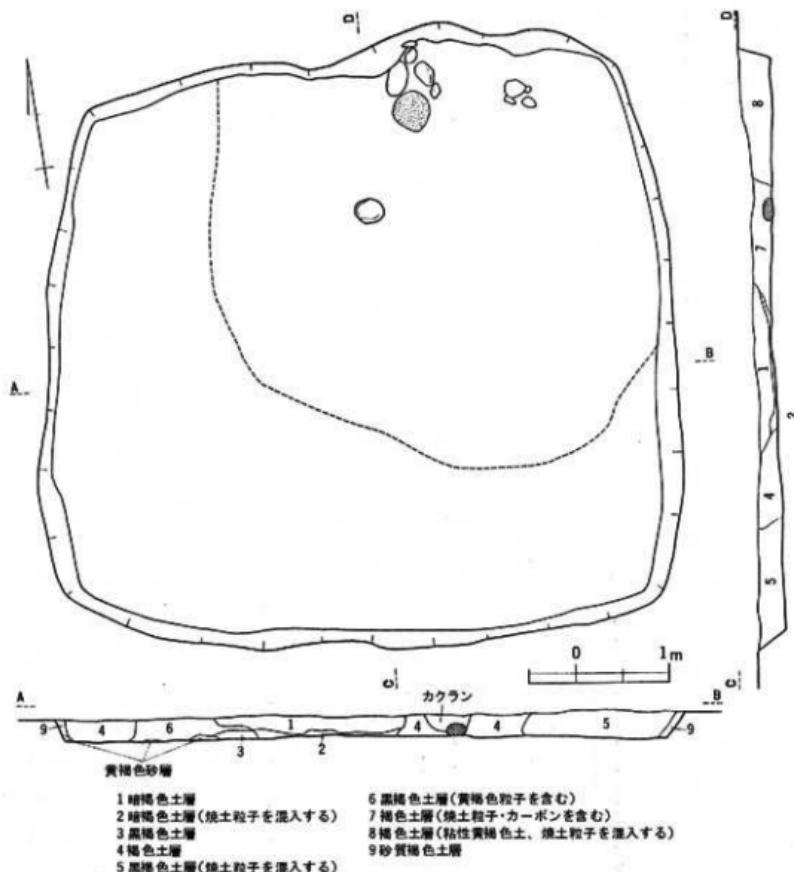


第33図 15号住居址出土遺物 (3)

（16号住居址） （第34・35図）

〔遺構〕

調査区中央部に位置する。規模は東西約6.8m、南北約6.2m。膨張り気味方形の平面形を呈し、埋没土は暗褐色土と褐色土が主に堆積している。壁は外傾し、高さ30cm前後を測る。床面は平坦で、軟弱。柱穴・周溝はない。カマドは北壁に構築されるが、破壊が著しく僅かに袖部に使用された石と、燃焼部に焼土が確認されたのみであった。カマド周辺（図の破線内）には、粘土・焼土・カーボンなどが散在していた。



第34図 16号住居址 (16)

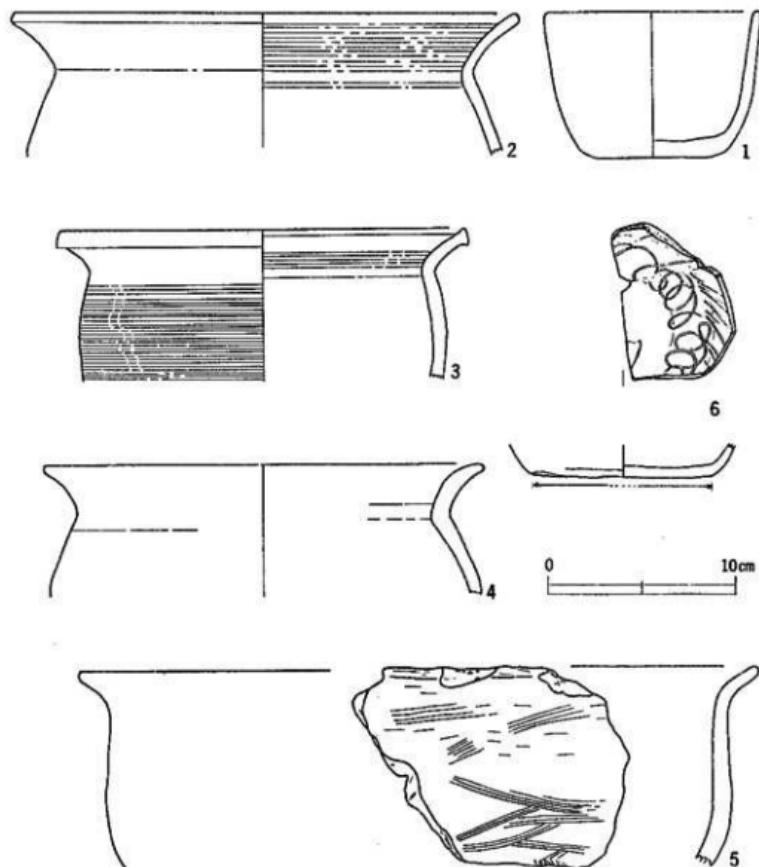
〔出土遺物〕

カマド周辺の粘土・焼土等が散在した中からの出土が主である。形状のしっかりとしたものの出土はまったくなく、ほとんど全部が破片であった。中でも形状の推測可能なものは図化した。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎 土	色 調 (内面)	整形・特徴 その他
			器高	口径	底径			
1	土器	椀?	7.6	11.2	6.0	砂粒・赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 ヘラ削り 1/2欠損



第35図 16号住居址出土遺物 (1/2)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外側) (内側)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
2	土師器	甕	—	26.6	—	砂粒を含む 黄赤褐色	内・外面 横ハケ整形
3	上師品	甕	—	21.4	—	砂粒を含む 赤褐色 暗褐色	内・外面 横ハケ整形
4	土師器	甕	—	23.0	—	微砂粒を含む 白褐色	外面 ハラ磨き
5	土師器	鉢?	—	35.8	—	砂粒・赤色粒子を含む 暗褐色	内・外面 横ハケ整形
6	土師器	环	—	—	9.4	細かい粒子を含む 赤褐色	底部 回転ヘラ切り後、静止ヘラ削り 内面 暗文

〔17号住居址〕 (第36・37・38図)

〔遺構〕

調査区中央部に位置する。砂質褐色土中に暗褐色土の落ち込みを発見し、遺構の切り合ひを考慮し上層觀察用土手を残し発掘する。埋没土の状態は、暗褐色土と褐色土が交互に堆積していた。深く遺存状態の良好な小形の住居址である。規模は東西約3.8m、南北約3.9m。平面形はやや脚部のふくらんだ隅円方形を呈する。壁は外傾し、高さ60cm前後を測るが、南壁上部は8号住居址と重複しており明瞭ではなかった。床面は平坦で良好、特にカマド周辺は堅く踏みしめられていた。柱穴・周溝は確認されない。カマドは北壁に構築される。規模は長さ約1.3m、幅約1m。袖部に石を使い、土を覆って築かれたものと思われるが、遺存状態は悪く、流入した石が多く検出された。燃焼部は床面より若干高く、厚さ約2.5cmで焼上が堆積していた。

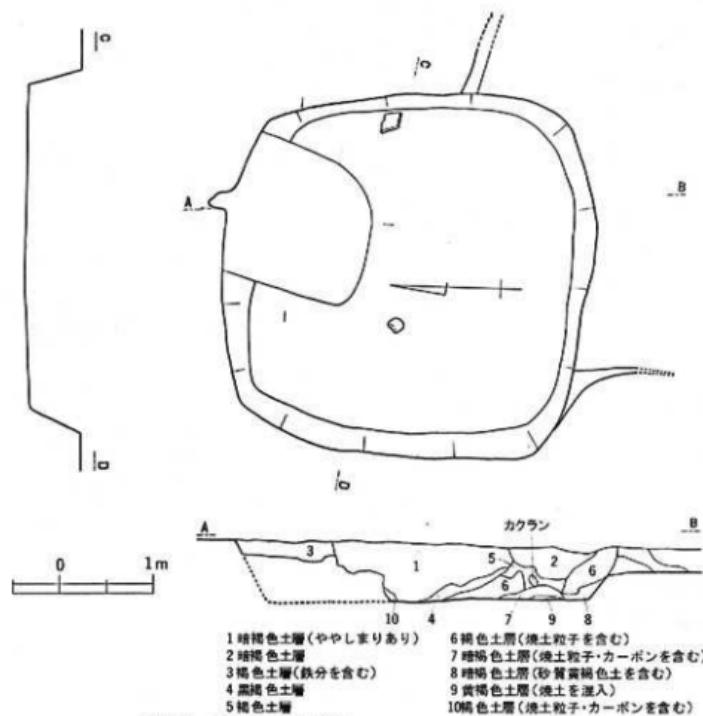
〔出土遺物〕

遺物の出土は少ない。カマド西側壁際中位に須恵器の环が略完形で出土している。住居址南西端床面直上に砾石が出土している。カマド南側床面直上に鍾が出土している。

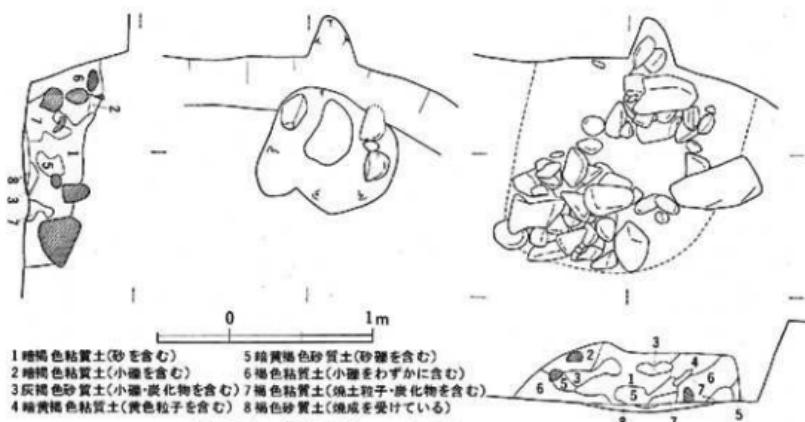
出土遺物一覧

(単位: cm)

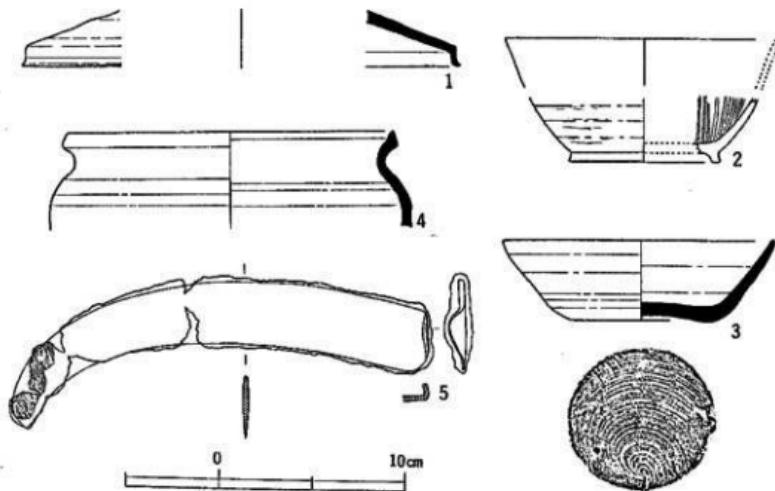
番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外側) (内側)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	須恵器	甕	—	23.4	—	白色粒子を含む 明灰色	破片
2	土師器	环	—	—	8	細かい粒子を含む 赤褐色	内面・みこみ部 暗文 高台付 破片
3	須恵器	环	4.2	14.3	7.2	白色粒子を含む 白青灰色	底部 回転糸切り 口縁部若干欠損
4	須恵器	甕	—	17.3	—	白色粒子を含む 明灰色	破片
5	鉄器	鍾					鉄に付着して全面に本質が残存していると思われるが、先端と基部とに確認ができただけである。



第36図 17号住居址 (3)



第37図 17号住居址 カマド (3)



第38図 17号住居址出土遺物（分）

（18号住居址） （第39図）

【遺構】

調査区中央部に位置する。北西部分は17号住居址に切られ遺存していない。埋没土は大体褐色土と暗褐色土に分けられる。規模は東西約4.7m、南北約5.7m。平面形は短辺がややふくらむ隅円長方形を呈する。壁高は約20cm～30cmを測り、南壁が削平により浅くなっている。床面は堅く良好であるが、壁際では軟弱であった。床面4ヶ所に穴が検出されたが、柱穴かどうかの判断はむづかしい。炉址は遺存部にはなかった。

【出土遺物】

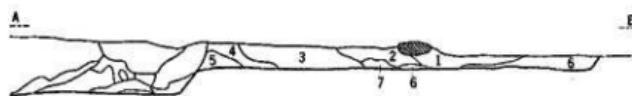
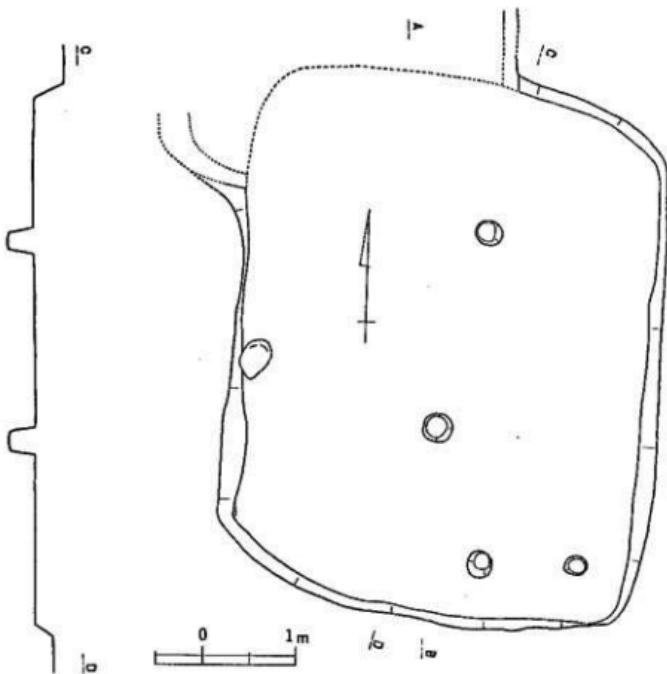
住居址内南端床面直上に潰れて土器が出土したのみである。

色調は暗褐色を呈し、胎土には白色小砂粒を含む。口縁部外面は細かい刷毛目が施され、胸部外面は縦方向にみがきがかけられる。内面は棒状工具によりみがきが施されるが、若干輪積痕を残す。

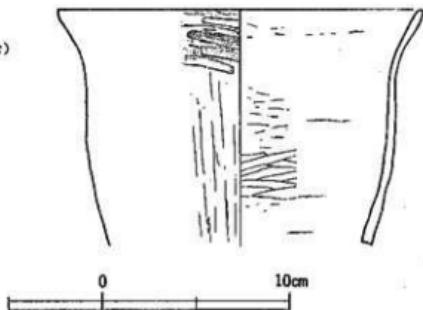
（19号住居址） （第40・41・42図）

【遺構】

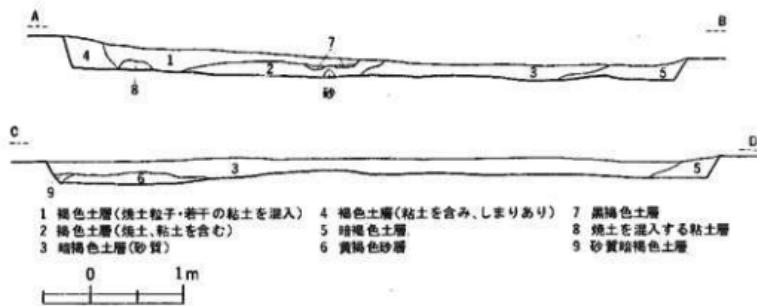
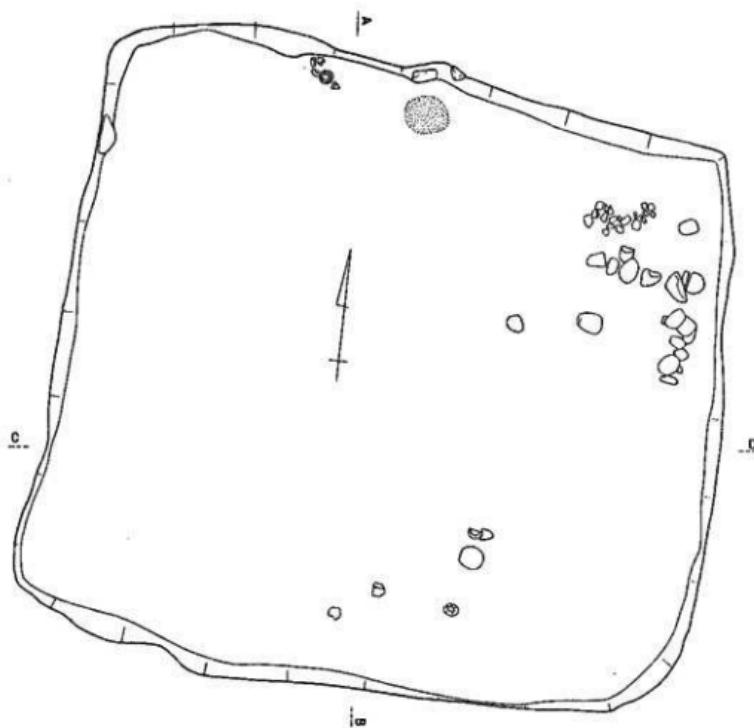
調査区南半部、18号住居址の南側に位置する。最初の平面形態確認では、暗褐色土の落ち込みは東西方向に長い長方形を呈し、その北側は焼土の若干の飛び散りはみられたが褐色土であり地山との区別が困難であった。土層観察用土手を十字に残し発掘する。床面まで検出した段階で北側へさらに続くことが判明。規模は東西約7.2m、南北約6.8m。平面形は隅円長方形を呈



- 1 棕色土層(砂を混入)
- 2 棕色土層(薄褐色土を含む)
- 3 薄褐色土層(砂質褐色土を含む)
- 4 褐褐色土層
- 5 黑褐色土層(砂質)
- 6 灰褐色土層(褐色土を混入)
- 7 棕色土層(ほとんど砂)



第39図 18号住居址(16)出土遺物(3分)



第40図 19号住居址 (3)

する。壁高は25cm～30cm前後を測り、北壁がやや高い。床面は平坦で良好であるが、西半部は砂質土で堅い面はあまりなかった。柱穴・周溝は確認されない。カマドは北壁に構築されたと思われるが、調査の結果遺存状態は極めて悪く、北壁際に燃焼部焼土が検出され周辺には粘土・焼土が散在しグシャグシャであった。

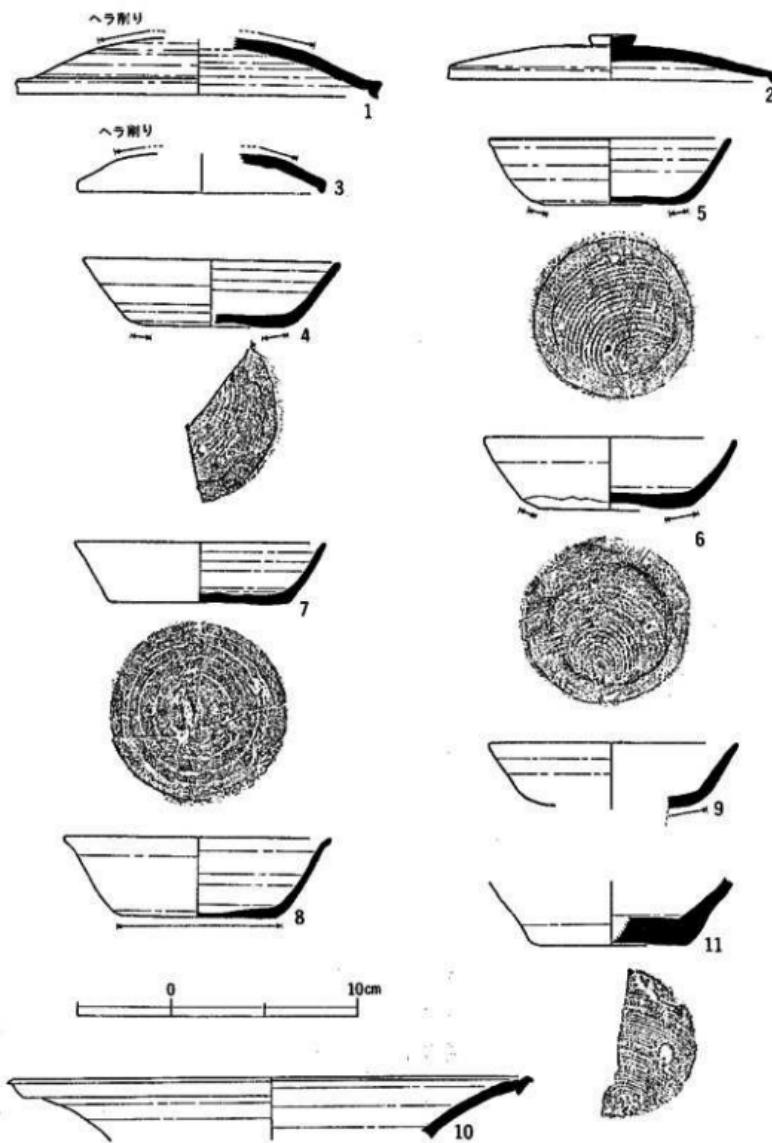
〔出土遺物〕

須恵器が主体に出上している。壺類は北壁際中位に重なるように出土。蓋類は住居内南四半部床面直上に出土。土師器は東四半部に石とともに出土している。出土の仕方に若干の片寄りが見受けられる。

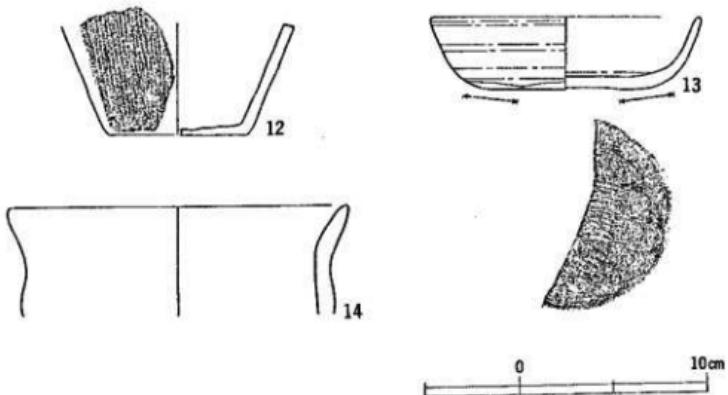
出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外側) (内側)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	須恵器	蓋	—	19.0	—	やや粗い 白色粒子を含む	青灰色 外面 上部回転ヘラ削り 彫欠損
2	須恵器	蓋	2.5	16.2	—	白色粒子を含む	青灰色 彫欠損
3	須恵器	蓋	—	13.0	—	やや粗い 白色粒子を含む	黄灰色 外面 上部回転ヘラ削り 彫欠損
4	須恵器	壺	3.5	13.4	8.4	白色粒子を含む	白灰色 底部 回転糸切り後外周のみヘラ削り 彫欠損
5	須恵器	壺	3.5	12.6	8.4	白色粒子を含む	黄灰色 白灰色 底部 回転糸切り後外周のみヘラ削り 完形
6	須恵器	壺	3.9	13.2	8.0	白色粒子を含む	黄灰色 底部 回転糸切り後外周のみヘラ削り 完形
7	須恵器	壺	3.3	13.2	9.6	白色粒子を含む	白灰色 底部 回転ヘラ切り 彫欠損
8	須恵器	壺	4.2	14.0	8.3	白色粒子を含む	明灰色 底部 ヘラ削り 彫欠損
9	須恵器	壺	—	13.2	—	白色粒子を含む	白青灰色 底部 外周ヘラ削り 破片
10	須恵器	甌	—	27.5	—	白色粒子を含む	青灰色 口縁部破片
11	須恵器	甌	—	—	8.0	白色粒子を含む	青灰色 灰色 底部 静止糸切り 底部破片
12	土師器	甌	—	—	7.3	砂粒・金雲母 を含む	黄白褐色 黄白色 底部 ヘラ削り 外面 縦ハケ整形 底部破片
13	土師器	壺	3.9	14.2	8.4	精 製	黄褐色 底部 回転糸切り後外周ヘラ削り 彫欠損
14	土師器	壺	—	17.8	—	砂粒を含む	黄褐色 外面 口縁部横ナデ 底部 縦ハケ整形 破片



第41図 19号住居址出土遺物 (3)



第42図 19号住居址出土遺物(3分)

〈20号住居址〉(第43・44・45・46図)

【遺構】

調査区南半部東側に位置する。最初の平面形態確認では、一辺3m強の不整方形で暗褐色土の落ち込みを発見。土層観察用土手を残し発掘を行うが、床面が東・北方向へ続くことが判明し拡張していった。規模は一辺約7mで、平面形は方形を呈する。埋没土は砂質で、砂利・礫などが流れ込んでいる。壁高は30cm前後を測る。床面は砂質で堅い面は全体的にはなかった。柱穴は4ヶ所に整然と検出された。周溝はない。カマドは東壁に構築される。規模は長さ約1.1m、幅約1.3mで、白褐色粘土を使い造かれる。燃焼部は床面より若干窪み、厚さ7cm前後で焼上が堆積していた。このカマド上部には比較的大きな石が堆積し、カマドを潰している。

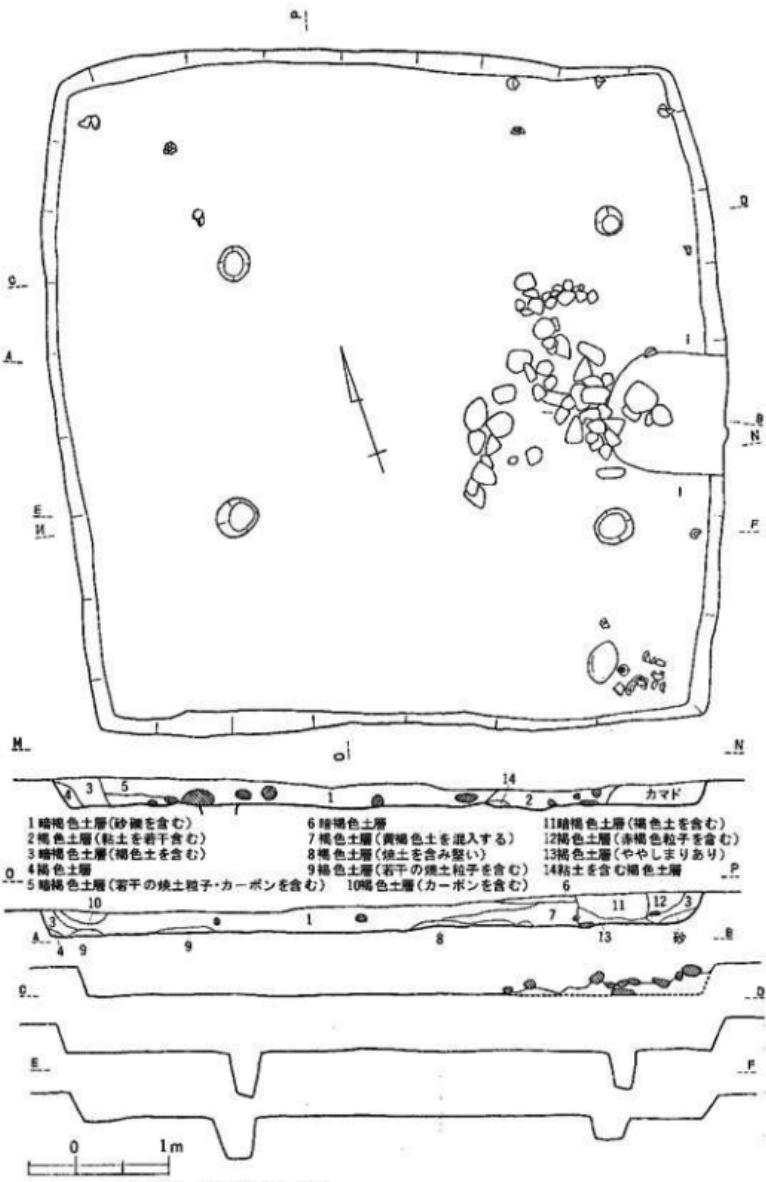
また、土層観察によると遺構確認面位の高さで堅い床面が確認された。出土遺物の内20・21はこの面より上の出土である為、本住居址の上には中世の遺構があったものと思われる。

【出土遺物】

遺物は床面直上か、若干上位からの出土で、本住居址にともなうものと思われる。その位置は、須恵器壺類は北壁際東側に、壺は北西部に、土師器壺類は南東側隅にそれぞれ集中しており、器種などにより片寄りをみせている。



第44図 20号住居址カマド(3分)

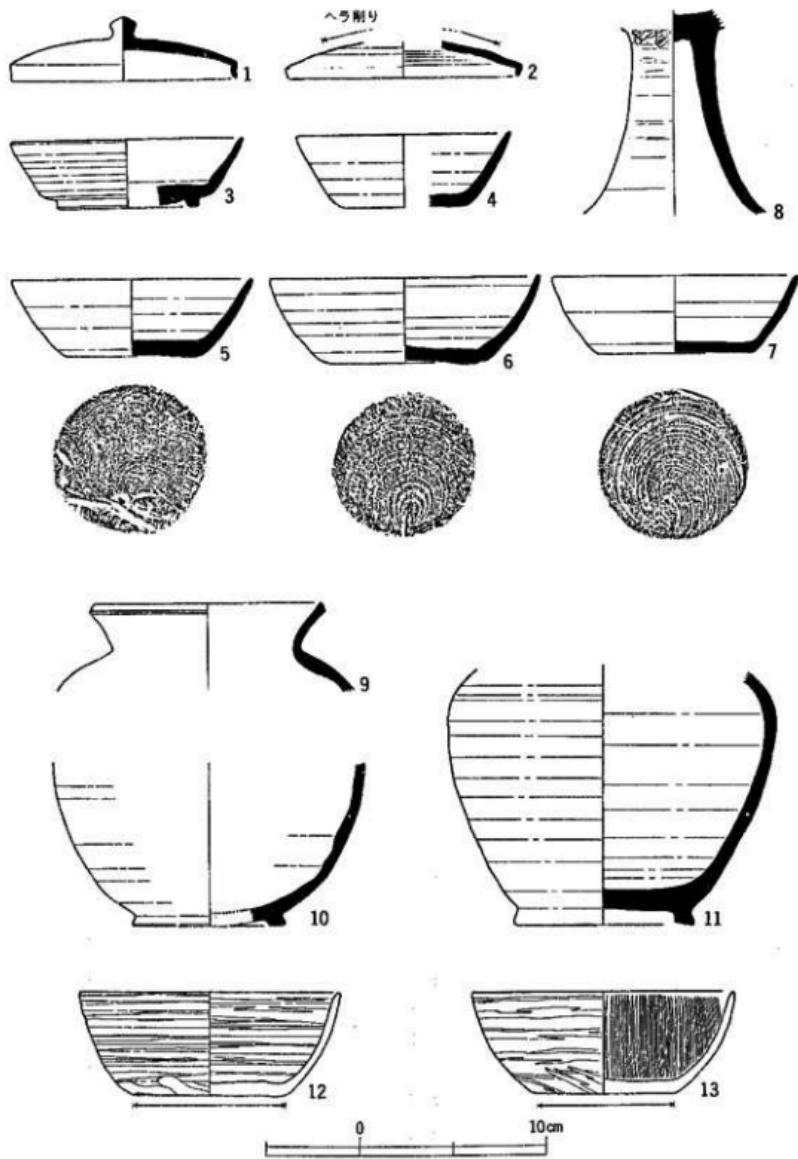


第43図 20号住居址 (16)

出土遺物一覧

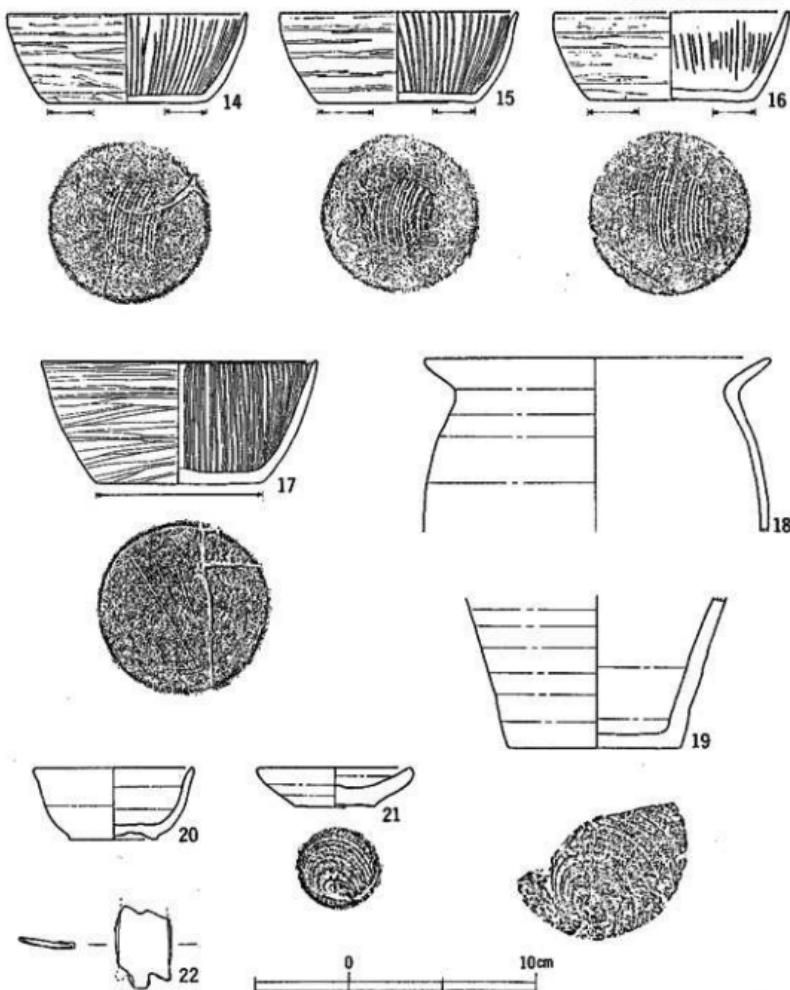
(単位: cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面) (内面)	整形・特徴・その他		
			器高・口径・底径	縦・横・厚					
1	須恵器	蓋	3.4	12.0	—	白色粒子を含む	暗灰色 外面 自然釉 内面	彫欠損	
2	須恵器	蓋	—	12.2	—	白色粒子を含む	黄白灰色 灰色	彫欠損	
3	須恵器	坏	3.6	12.3	7.4	やや粗い 白色粒子を含む	青灰色 黄灰色	付高台	彫欠損
4	須恵器	坏	3.8	11.3	6.6	精 製	白灰色	底部 回転糸切り	彫欠損
5	須恵器	坏	4.1	12.7	7.5	精 製	白灰色	底部 回転糸切り	彫欠損
6	須恵器	坏	4.5	14.3	7.5	微砂粒を含む	黄白灰色	底部 回転糸切り	彫欠損
7	須恵器	坏	4.1	12.8	8.0	白色粒子を含む	黄灰色	底部 回転糸切り	彫欠損
8	須恵器	高坏	—	—	—	白色・黒色粒子を含む	黄灰色		破片
9	須恵器	壺	—	12.1	—	白色・黒色粒子を含む	暗灰色 灰色	外面 自然釉	口縁部破片
10	須恵器	壺	—	—	8.0	白色・黒色粒子を含む	黑灰色 灰色	付高台	破片
11	須恵器	壺	—	—	9.4	やや粗い 白色・黒色粒子を含む	赤灰色 明灰色	底部 静止糸切り 付高台	破片
12	土師器	坏	5.6	13.8	8.0	精 製	黄赤褐色	底部 ヘラ削り 内面・外面 ヘラ磨き みこみ部 放射状暗文	彫欠損
13	土師器	坏	5.5	13.9	7.4	精 製 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 ヘラ削り 外面 ヘラ磨き 内面・みこみ部 放射状暗文	彫欠損
14	土師器	坏	4.7	12.6	8.4	精 製	黄赤褐色	底部 静止糸切り後外周のみヘラ削り 内面・みこみ部 放射状暗文	光面
15	土師器	坏	4.8	12.6	8.4	精 製 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 静止糸切り後外周のみヘラ削り 外面 ヘラ磨き 内面・みこみ部 放射状暗文	11様部若干欠損
16	土師器	坏	4.7	12.4	8.6	精 製 赤色粒子を含む	黄赤褐色 暗黃褐色	底部 静止糸切り後外周のみヘラ削り 内面・みこみ部 放射状暗文	口縁部若干欠損
17	土師器	坏	6.5	14.6	8.8	精 製	赤褐色	底部 ヘラ削り 外面 ヘラ磨き 内面・みこみ部 放射状暗文	彫欠損
18	土師器	壺	—	18.2	—	粗い 砂粒を多量に 含む	暗褐色	口縁部 横ナデ	口縁部破片
19	土師器	壺	—	—	9.0	粗い 砂粒を多量に 含む	黄褐色 白黄褐色	底部 回転糸切り	底部破片
20	土師質	坏	3.8	8.4	4.6	金雲母を多量 に含む	黄黑色 黑色		



第45図 20号住居址出土遺物 (13)

番号	種類	器形	法 量			胎 土	色 調 (外側) (内面)	整形・特徴・その他
			器高・口徑・底径					
21	土師質 皿	皿	2.2	8.0	4.2	やや粗い 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 回転糸切り
22	鉄 器	鉄鉢						



第46図 20号住居址出土遺物 (36)

〔遺構〕

調査区南端に位置する。規模は東西約5.7m、南北約8m。平面形は、南北がふくらむ不整隅円長方形を呈する。削平され、浅い窪穴となっており、壁高は15cm前後を測る。床面は黄褐色土で堅く平坦であった。柱穴は住居址内北側と南側とに整然と並んで4つ検出された。炉址は地床炉で、床面中央部から西方向に約1.3mの所にある。直径約18cmの円形に焼上がり、まわりには灰などが散在していた。他に内部施設として、床面南端南壁にかかる、台形状に一段高まりがあった。入口施設と思われるが確証はない。また、本住居址は火災を受けたらしく、焼土、炭などが散在していた。

〔出土遺物〕

浅い住居址ではあるが、遺物の出土は比較的多い。

壺形土器

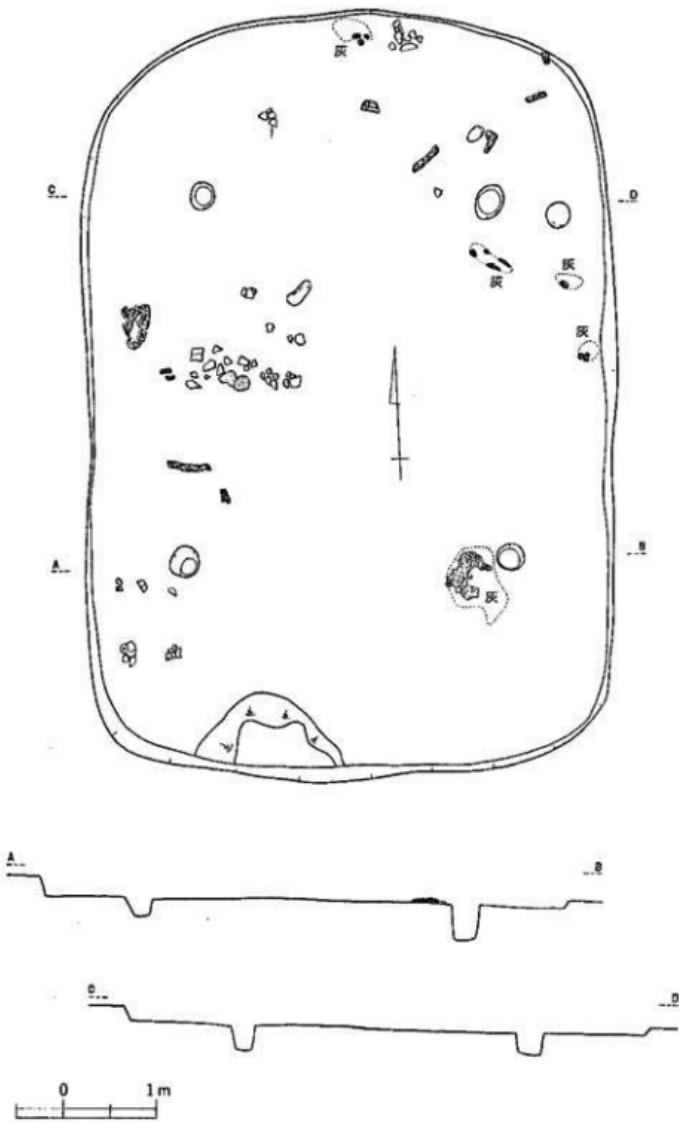
1. 口縁部から頸部にかけての破片。色調は外面褐色、内面暗褐色を呈する。胎土には白色小砂粒・赤褐色粒子を含む。器面は、外面縦方向内面横方向の刷毛目整形の後、みがきが施される。複合口縁外側に8本1単位の棒状浮文が付けられている。口縁端には刷毛目による文様がみられる。
2. 脇部上半以上を欠損。壺形土器の資料。色調は暗褐色を呈する。胎土には白色小砂粒を含む。内外面ともに刷毛目が顯著である。

壺形土器

3. 脇部下半を欠損。色調は赤褐色～淡褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。器外面、頸部は縦方向、脇部は横方向に刷毛で整形。口縁部は横拂で。器内面は刷毛目整形の後丁寧な籠みがきで仕上げてある。頸部から脇部上端にかけて、9条の波状文1帯、9条の横状文1帯、9条の波状文1帯が施されている。
4. 脇部下半を欠損。色調は基本的には赤褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。無文で、口縁部は横拂で、脇部外面は横方向の刷毛整形。内面は籠みがきされるが、輪積痕を残す。
5. 口縁部から頸部にかけての破片。推定復原で口径約16cmを測る。色調は暗褐色を呈する。口縁部は横拂で。内面は刷毛目が顯著である。
6. 脇部下半の破片。色調は赤褐色を呈する。胎土には白色小砂粒、若干の雲母粒を含む。器面は刷毛目がみられるが、磨滅によりザラついている。
7. 脇部下半の破片。色調は暗褐色を呈する。胎土には白色小砂粒を含む。器面は刷毛整形の後、拂でにより仕上げてある。底部に粗の圧痕が認められる。
8. 底部の破片。丹彩される。

鉢形土器

9. 3分1を欠損。色調は暗赤褐色を呈する。胎土には小砂粒、金雲母、赤色粒子等を含む。

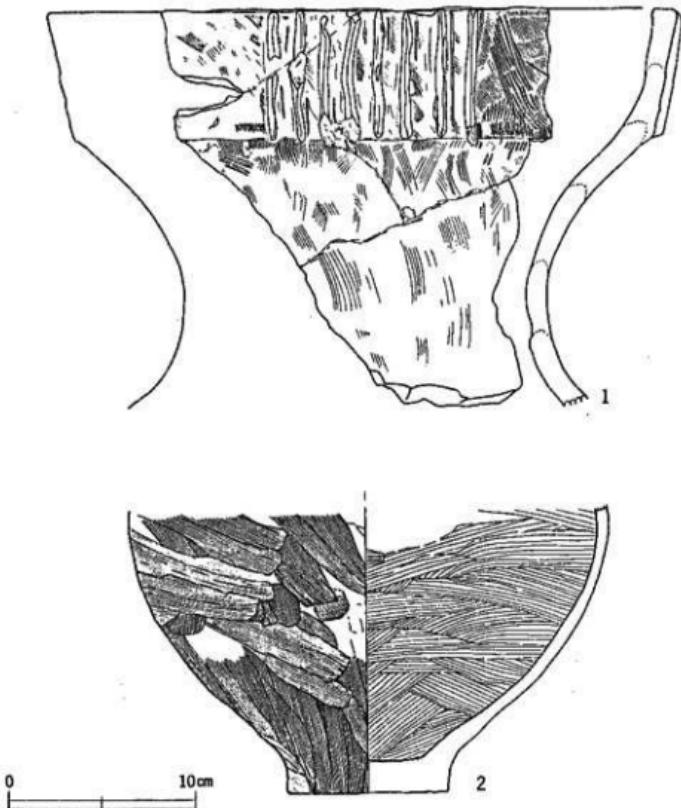


第47図 21号住居址 (3)

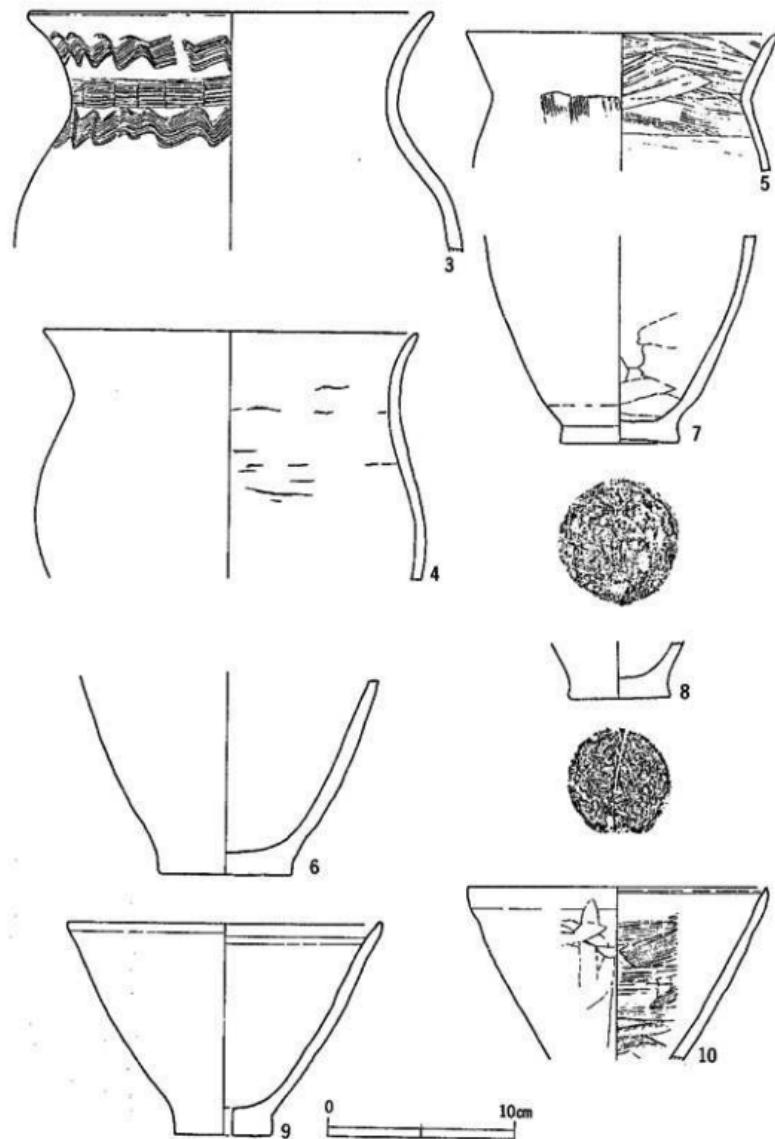
口縁部は横撫で。外面は縦方向に刷毛で整形。内面は棒状工具（？）によりみがきをかけ、器面を密にしてある。底部に直径約1.3cmの単孔があく。

鉢形土器

10. 3分の1の破片。底部がないため甌とも考えられる。色調は赤褐色～褐色を呈する。胎土には白色小砂粒を含む。口縁部は横撫で。外面は縦方向に刷毛で整形。内面は横方向に刷毛整形されるが、輪積痕を残す。



第48図 21号住居址出土遺物 (1/4)



第49図 21号住居址出土遺物（3）

〈22号住居址〉 (第50・51図)

【遺構】

調査区南端に位置する。規模は東西・南北約5mで、平面形は不整方形を呈する。埋没土はほとんど砂礫であった。壁高は35cm前後を測る。床面は平坦であるが、砂等の流れ込みにより明瞭でなかった。柱穴・周溝は確認されない。カマドは北壁と東壁を掘り込んで2基構築されるが、遺存状態は悪かった。両方とも石組粗製である。

【出土遺物】

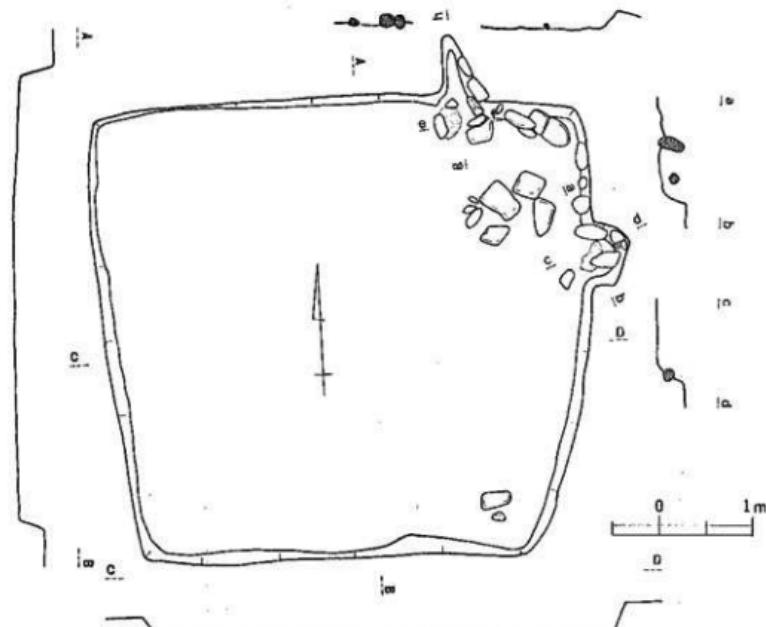
住居址内北東部、カマド周辺に坏類の出土が目立つ。

出土遺物一覧

(単位: cm)

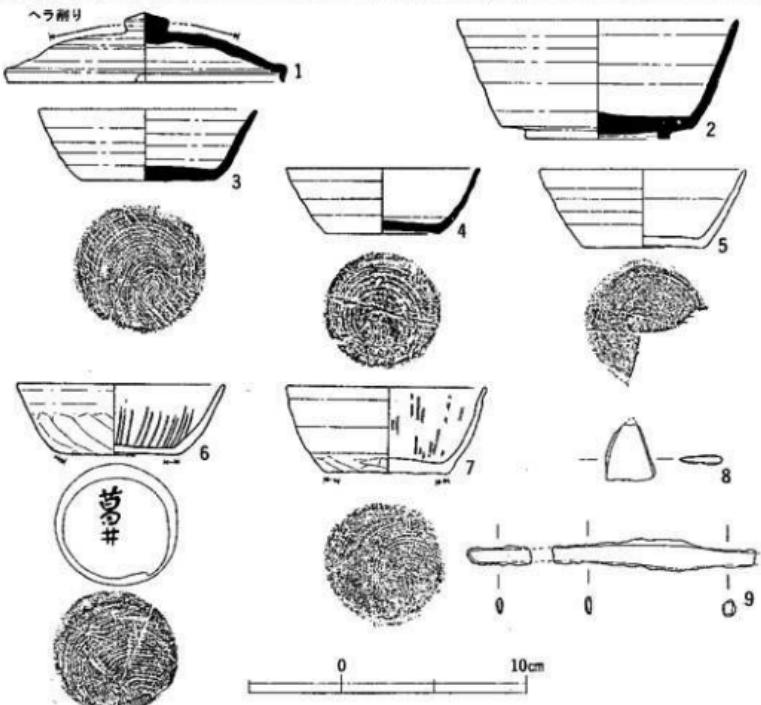
番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外見) (内見)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	蓋	3.8	14.8	—	やや粗い 白色粒子を含む	明灰色	上部 回転ヘラ削り 弓欠損
2	須恵器	坏	6.4	15.0	7.8	白色粒子を含む	明灰色	付高台 弓欠損

a. b. c. d.



第50図 22号住居址 (3/6)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (火色) (火色)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径					
3	須恵器	环	3.8	11.6	7.0	白色粒子を含む	黄灰色	底部 回転糸切り 1/2欠損
4	須恵器	环	3.5	10.3	6.0	白色粒子を含む	黄灰色	底部 回転糸切り 1/2欠損
5	土師質 須恵器	环	4.2	11.0	6.4	微砂粒を含む	黄灰褐色	底部 回転糸切り 1/2欠損
6	土師器	环	3.9	11.0	6.3	精 製 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 同転糸切り後外周及び体部 下半ヘラ削り 内面・みこみ部 着文 1/2欠損
7	土師器	环	4.6	10.6	6.5	精 製	赤褐色	底部 同転糸切り後外周及び体部 下半ヘラ削り 内面・みこみ部 着文 1/2欠損
8	鐵 器	刀?						
9	鐵 器	刀子						



第51図 22号住居址出土遺物 (3分)

〈23号住居址〉 (第52・53図)

〔遺構〕

調査区南半部19号住居址の東側に位置する。規模は東西約5.5m、南北約5.7m。平面形は略隅円方形を呈する。削平され遺存状態は悪く、北壁は高さ約30cm、南壁は高さ約15cm、東西壁は高さ約20cmを測る。床面は軟弱。柱穴・周溝はない。カマドは北壁を約30cm掘り込んで構築される。燃焼部は床面より若干座み、焼土の厚さは8cm前後。石と土を使い築かれていたと思われる。

〔出土遺物〕

坏類はカマド南西周辺部に、鉄器は床面南端部に出土している。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎 土	色 調 (外観) (内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	坏	—	—	9.0	白色粒子を含む	明灰色	底部 ヘラ削り 破片
2	土師器	坏	4.6	14.3	9.0	精 製	黄褐色	底部 ヘラ削り 劣欠損
3	土師器	坏	5.8	15.8	10.0	細かい粒子を含む	暗赤褐色	丁寧に磨かれている 底部 磨滅 劣欠損
4	土師器	坏	3.4	13.8	7.0	精 製	淡赤褐色	丁寧に磨かれている 劣欠損
5	土師器	甕	—	20.4	—	砂粒を含む	黄褐色	口縁部 横ナデ 破片
6	土師器	甕	—	—	10.0	砂粒・赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部破片
7	鉄 器							
8	土師器	坏						器外面に縱方向の暗文がある資料 内面 ヘラ磨き

〈24号住居址〉 (第54・55図)

〔遺構〕

調査区南半部に位置する。23号住居址と西侧で重複しているが、切り合い関係は明瞭でなかった。規模は東西約3.7m、南北約3m。平面形は長方形。壁は北壁が高く約35cm、他は高さ20cm前後を測る。カマドは南東端に位置するが、袖石など、遺存状態は悪かった。

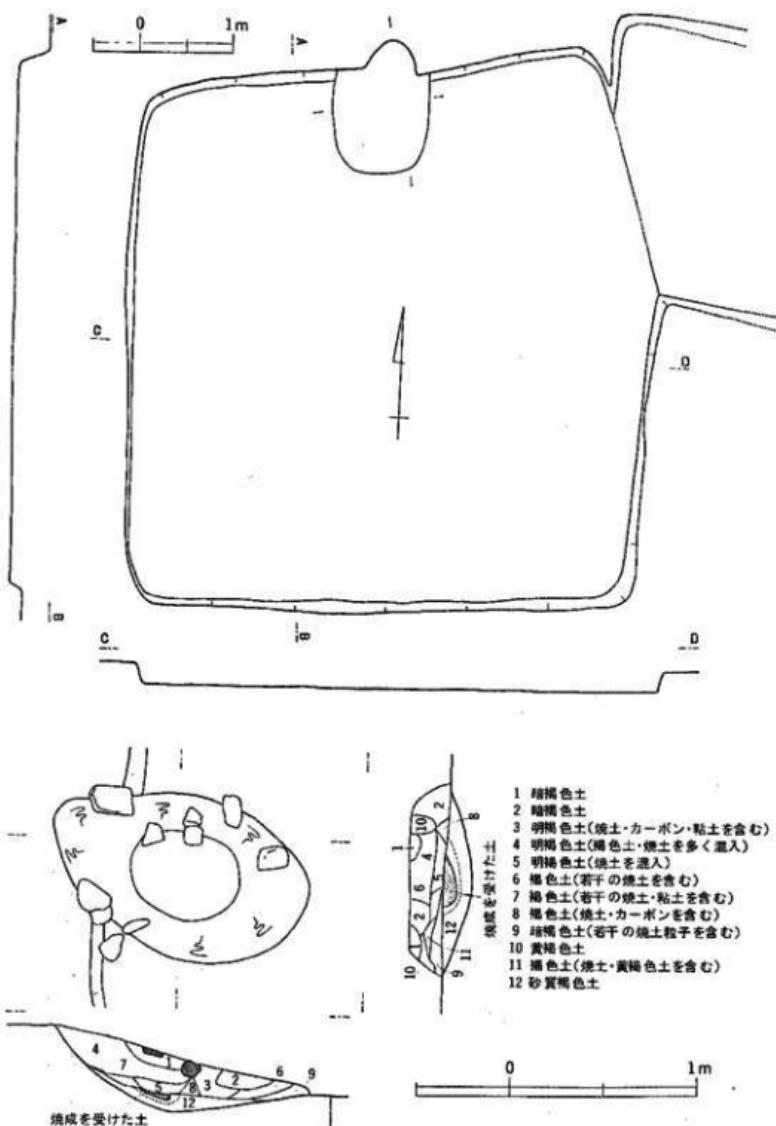
〔出土遺物〕

カマド周辺に僅かに遺物が出土した。

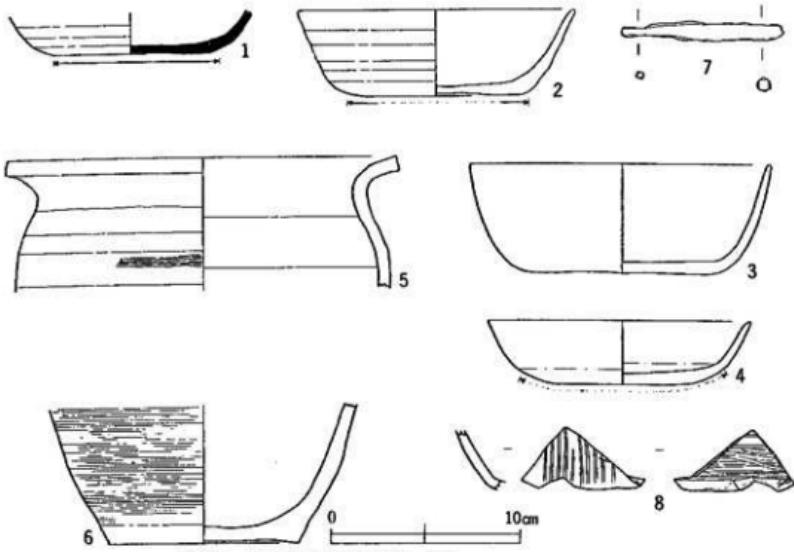
出土遺物一覧

(単位: cm)

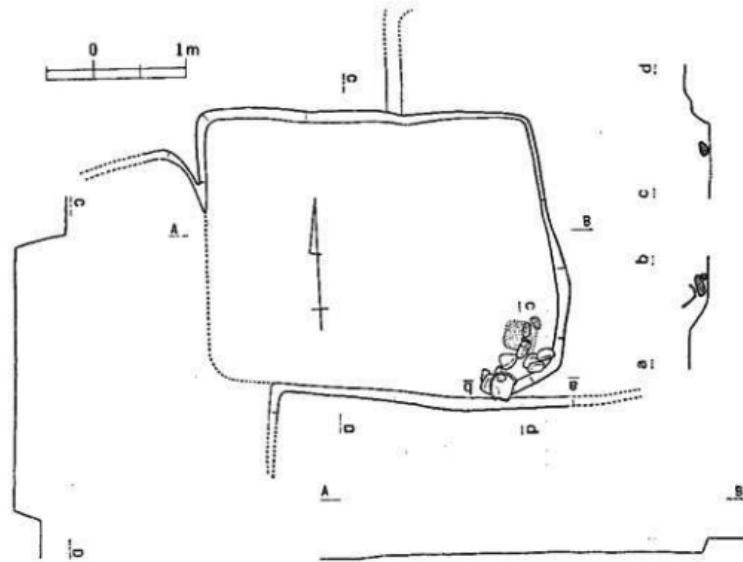
番号	種類	器形	法量			胎 土	色 調 (外観) (内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	土師器	坏	4.8	12.3	8.2	精 製 赤色粒子を含む	黄赤褐色	底部 ヘラ削り 墨書き 外面 ヘラ磨き 若干欠損 内面・みこみ部 暗文



第52図 23号住居址 (16) カマド (16)

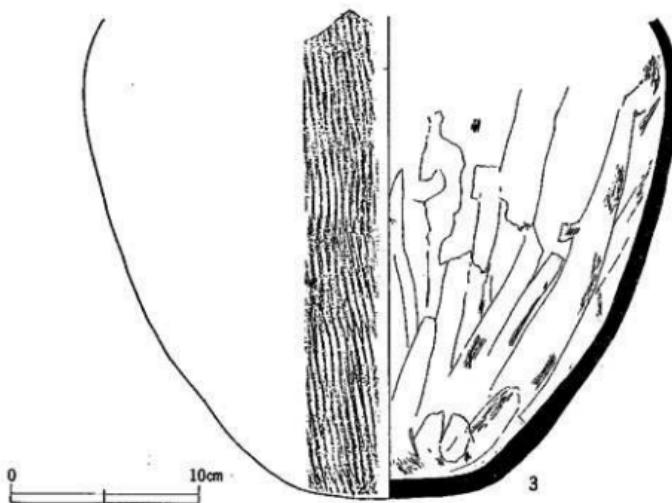
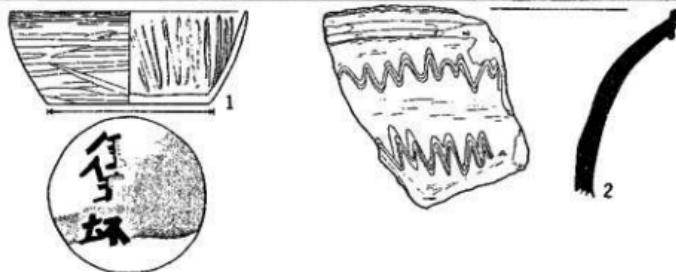


第53図 23号住居址出土遺物 (3)



第54図 24号住居址 (3)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調 (外面) (内面)	整形・特徴・その他
			高さ・口径・底径	容積			
2	須恵器	甕	—	—	やや粗い 白色粒子を含む	暗灰色 灰色	外面 波状文あり 口縁部破片
3	須恵器	甕	—	—	赤色、白色粒 子を含む	黄赤灰色	外面・底部 呼き目 内面 ハケ状工具による整形

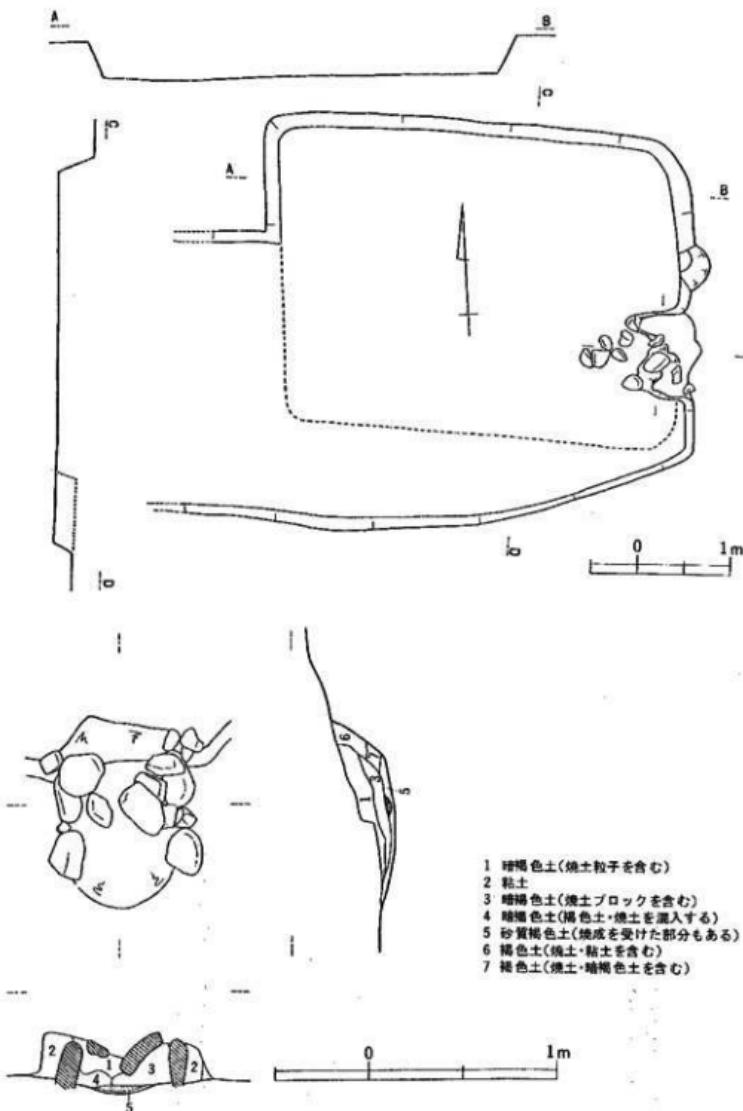


第55図 24号住居址出土遺物(3)

〈25号住居址〉 (第56・57図)

〔造構〕

調査区南半部に位置する。西側は24号住居址壁を切って床面が続いていた。規模は東西約4.5m、南北約3.4m。平面形は隅円長方形を呈する。壁は外傾し、高さ40cm前後を測るが、南壁は埋没土との区別が困難だった為破壊してしまった。カマドは東壁に位置し、袖部に石を用い粘土で覆って築かれる。燃焼部は床面より若干深み、厚さ3cm前後に焼土が堆積していた。



第56図 25号住居址 (16) カマド (16)

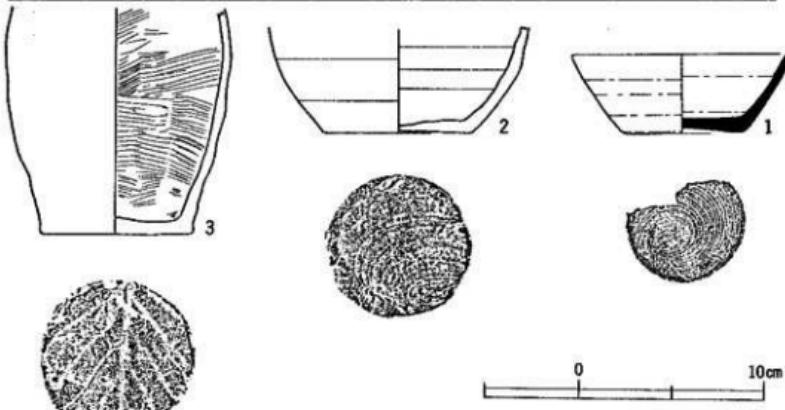
〔出土遺物〕

遺物の出土は少ない。

出土遺物一覧

(単位: cm)

番号	種類	器形	法量			胎土	色調 (外向) (内向)	整形・特徴・その他
			器高	口径	底径			
1	須恵器	壺	4.2	11.6	6.2	白色・黒色粒子を含む	黄灰色	底部回転糸切り 線刻あり 彌欠損
2	土師器	甕?	—	—	7.7	粗い赤色粒子を含む	黄灰色	底部回転糸切り ロクロ水挽き(?) 破片
3	土師器	甕	—	—	7.8	砂粒・金雲母を含む	暗褐色	底部木葉痕 外面紙ハケ整形 内面横ハケ整形



第57図 25号住居址出土遺物(3)

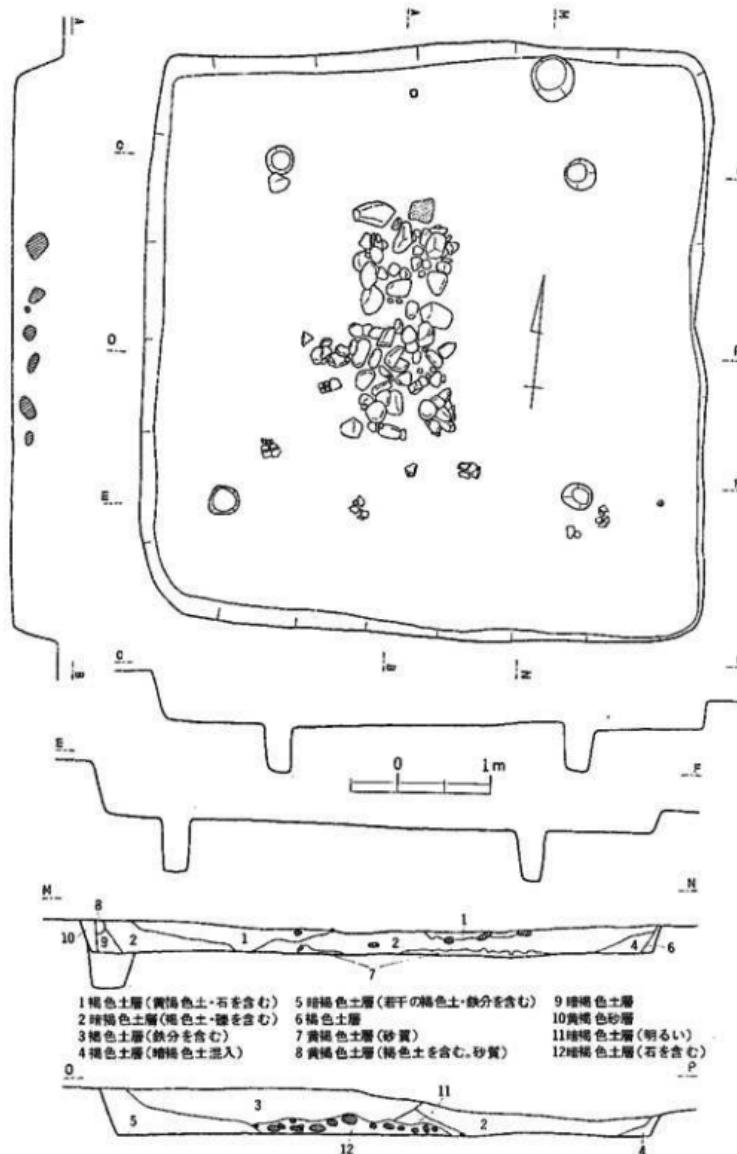
(26号住居址) (第58・59・60図)

〔遺構〕

調査区中央に位置する。規模は一辺約6m強で、略方形の平面形を呈する。埋没土の状態は褐色土と暗褐色土が交互に堆積。東側は削平されているが、形の整った深い住居址である。壁高は25cm~50cm前後を測り西壁が高くなっている。床面は平坦で軟弱。柱穴は整然と並んで4ヵ所検出された。他に北壁にかかって、直径約50cm、床面からの深さ約35cmの穴が検出された。炉址は地床炉で、床面中央部から北方向に約1.5mの所にあり、一辺約25cmの不整方形に、床面より若干座んで焼土があった。尚住居址内中央に、床より上位5cm~30cm位の範囲で石が集っていた。

〔出土遺物〕

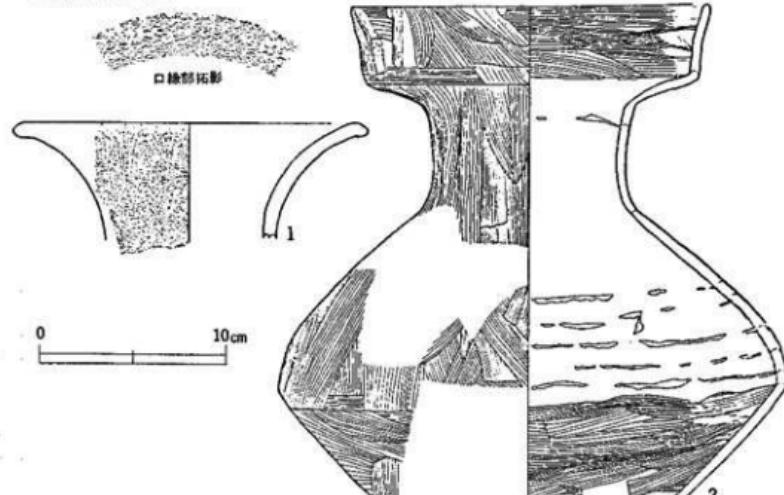
土器の出土状況は、住居址内南半部に集中し、床面よりやや上位であった。大半は本住居址にともなうものであろう。



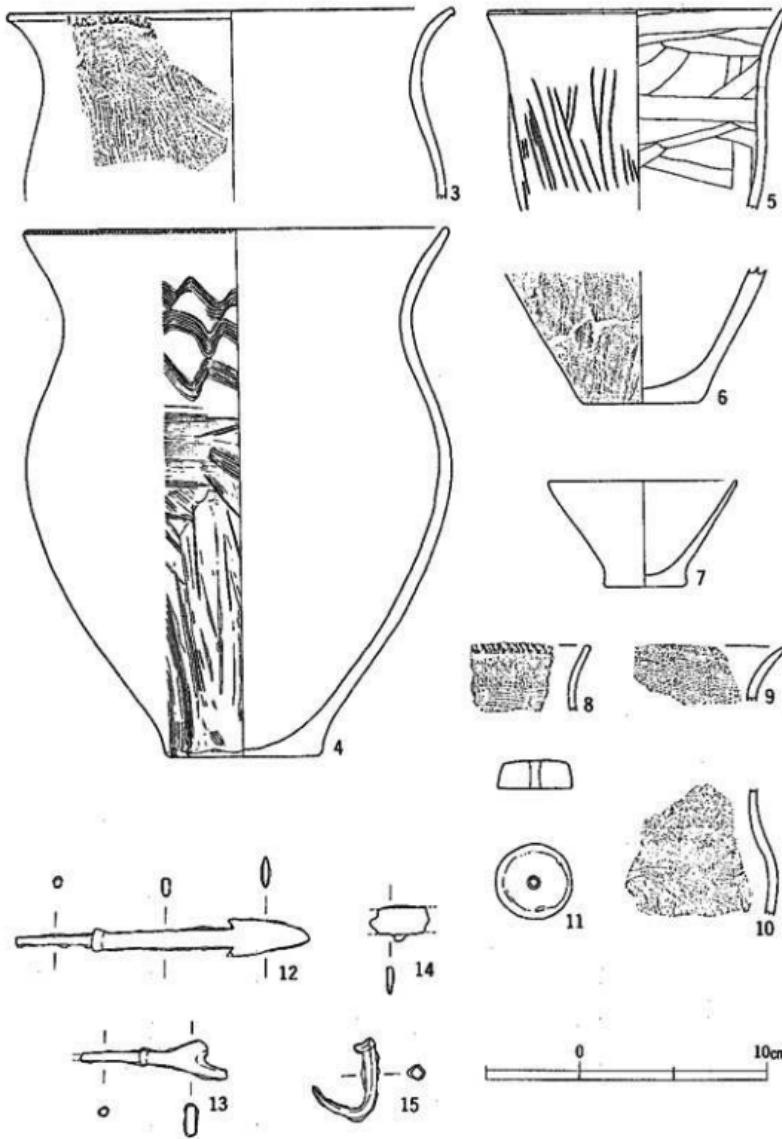
第58図 26号住居址 (16)

壺形土器

1. 口縁部から頸部にかけての破片。色調は白褐色を呈する。胎土には白色小砂粒・赤褐色粒子を含む。器面は、外面縦方向内面横方向の刷毛整形。口縁内面と頸部外面に波状文が施される。
2. 底部および2分の1を欠損。色調は淡暗褐色を呈する。胎土には砂粒・赤色粒を含む。器外表面は刷毛目が顕著である。内面はみがきがかけられるが、胴部上半は輪積痕を残し、胴部中位以下は刷毛状工具による整形。口縁部は横撫でが施される。
3. 口縁部から頸部にかけての破片。色調は褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。器外表面は刷毛整形、内面は細かい刷毛整形が施される。口縁には刻目が連続する。
4. 4分の1を欠損。色調は赤褐色～淡褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。器外表面、頸部から胴部にかけて、横～斜位の刷毛整形を行い。胴部下半はその上を粗い範みがきがかけられる。口縁部は横撫で。器内面は刷毛整形の後丁寧な範みがきで仕上げてある。頸部に8条の波状文3帯が施されている。口縁には刻目が連続する。
5. 口縁部から胴部にかけての破片。色調は外面暗褐色、内面白褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。器外表面は刷毛目の上にみがきをかけ、内面は刷毛目の上を撫でてある。口縁部は横撫で。
6. 底部破片。外面暗赤褐色、内面白褐色を呈する。胎土には白色小砂粒を含む。器面は棒状工具により整形。



第59図 26号住居址出土遺物 (3)



第60図 26号住居址出土遺物 (3分)

8～10は變形土器の破片資料。波状文・簾状文などが施される。

坏形土器

7. 3分の1を欠損。色調は淡赤褐色を呈する。胎土には石英・長石小砂粒を含む。籠みがきにより器面を密にしており、丹彩される。

土製紡錘車

11. 直径4cm、厚さ1.5cm、孔の直径は5mm前後を測る。

鉄器

12. 鉄鎌。略完形。

13. 鉄鎌。欠損している。

14. 両端が欠損し、つぶれた管状の鉄製品と思われるが、詳細は不明。

15. 釘。釣針状に曲っている。

（配石遺構）（第61・62・63・64図）

〔遺構〕

調査区西北端に位置する。規模は幅約7m、長さ約17m。南側に緩やかに傾斜している。水田下の砂質黄褐色土上に石が集っており、中には擦痕が認められるものもあった。土壌が一基確認された。出土遺物により、構築時期は縄文時代と思われる。

〔出土遺物〕

本遺構からは、縄文時代中期から後期にわたる土器が認められた。ここでは文様を中心として分類を行い、時間的経過をみていく。

I群（第62図1・2）

中期初頭に位置づけられるもの。1・2とも暗赤褐色を呈し、焼成良好。胎土に金雲母を多く含む。沈線を地文とし、沈線による弧線文が施文される。三叉状文もみられる。

II群（第62図3～22・第63図23～49）

中期末葉～後期初頭に位置づけられるもの。文様により細分される。

1類（3）

沈線による区画文を施し、「八の井」文がみられる。整形は雑。

2類（4・5）

沈線と微隆帯による区画文が施され、その間隙に磨消縄文が施文されている。4は微隆帯上に、5は無文帯に列点状刺突文が施されている。

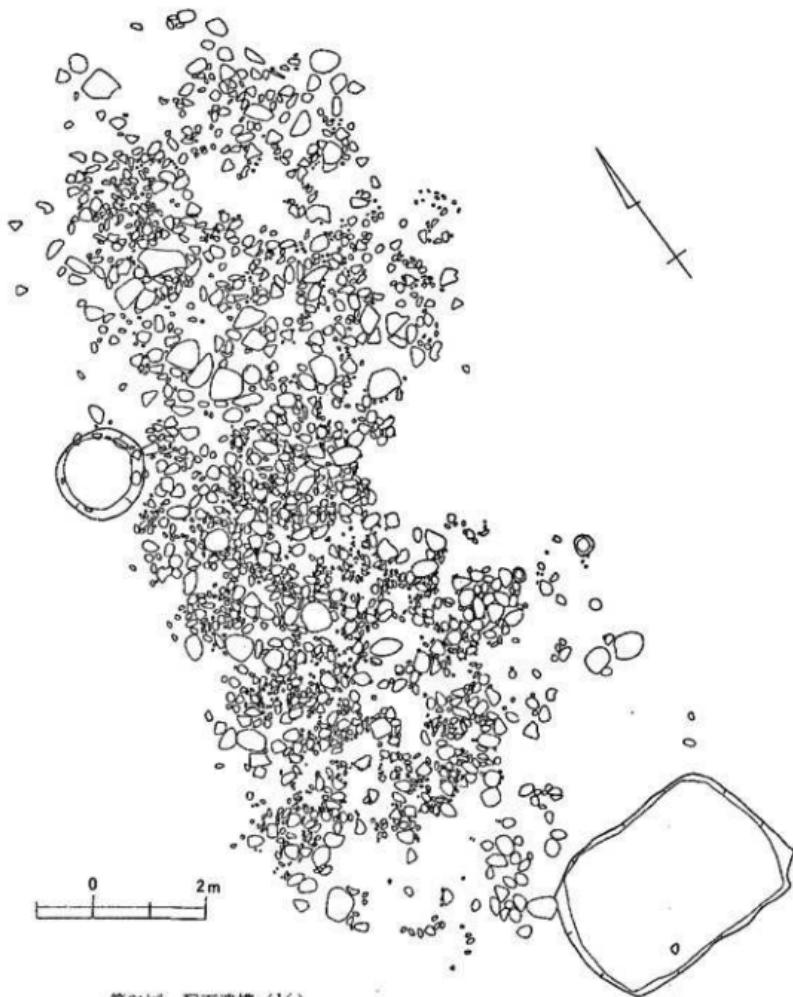
3類（6～9）

内折気味の口線形を呈し、刺突文が列点状に施されるもの。沈線をともなうものもある。

4類（10～12）

無文で、把手に单孔を有する。

5類（13）



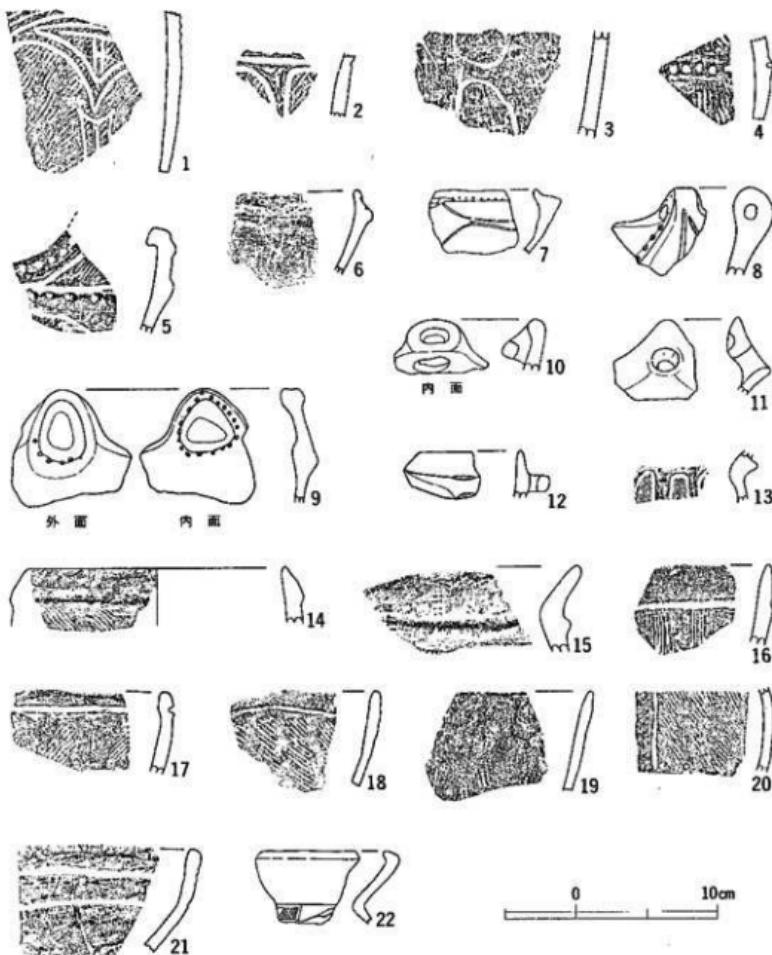
第61図 配石遺構 (3a)

断面三角形状の微隆帯がめぐり、沈線による凸画文の内側に磨消繩文が施文されている。
無文帯には列点状刺突文が施されている。

6類 (14・15)

口縁部に微隆帯がめぐり、上半は無文帯、下半は繩文が施されている。

7類 (16)



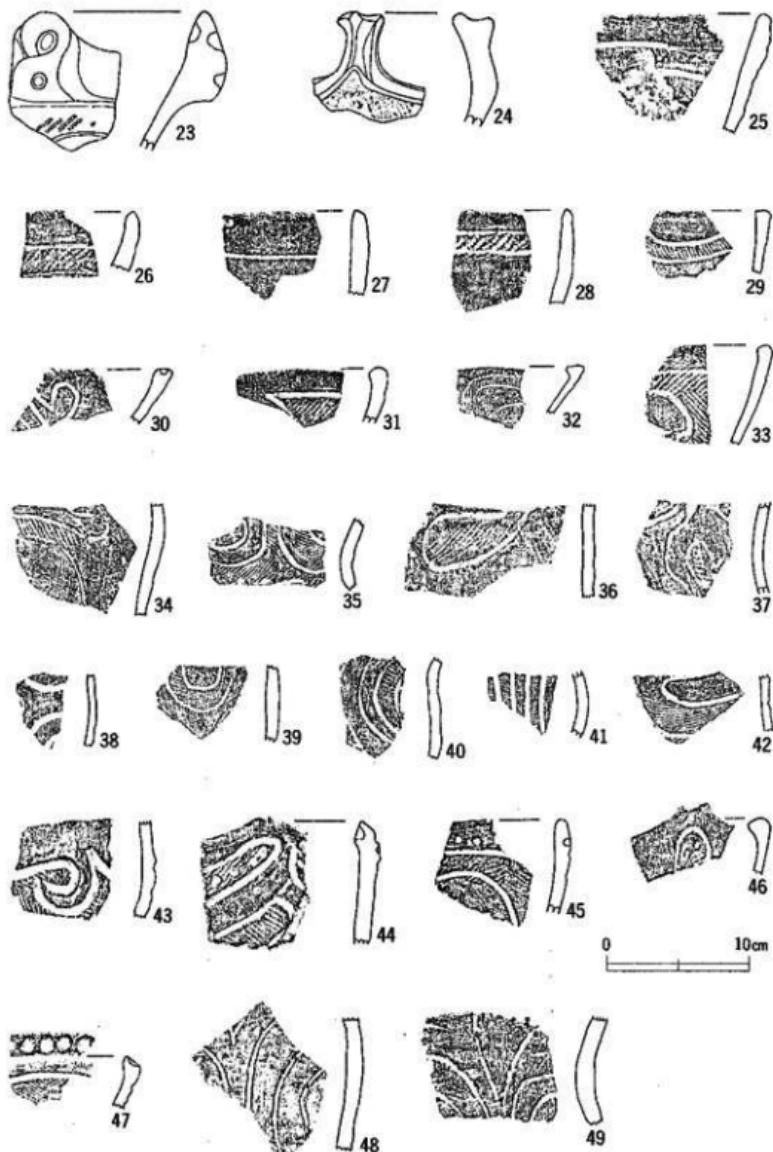
第62図 配石遺構出土遺物（34）

口縁部に沈線文、胸部に条線文が施文されている。

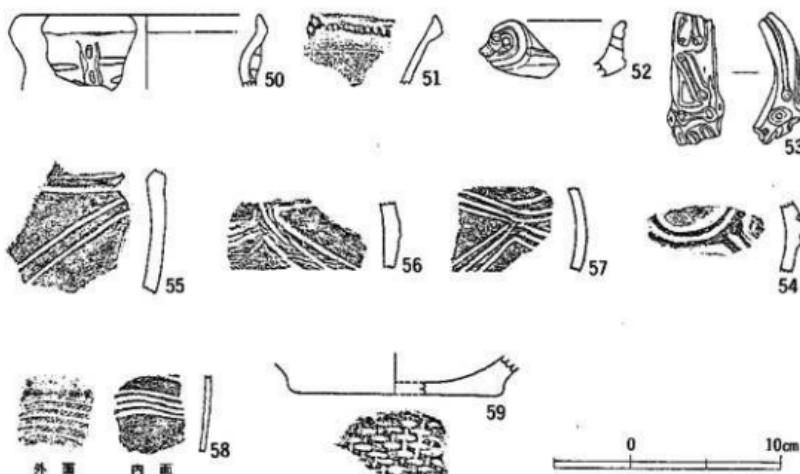
8類（17～22）

口縁部に沈線がめぐり、無文帯と縄文を分けるもの（17・18・22）。沈線がめぐらないもの（19）。沈線が2本めぐるもの（21）。沈線による内面文が施され、その間に磨消縄文が施文されるもの（20）を一括した。

9類（23～28）



第63図 配石遺構出土遺物 (34)



第64図 配石造構出土遺物（3分）

2本の平行沈線がめぐり、その間隙に充填繩文が施されている口縁部資料。24・27は若干異なるか？

10類（29～43）

比較的太い沈線により曲線的な区画文が施され、その間隙に充填繩文が施されている。

11類（44～47）

太い沈線により曲線的な区画文が施され、その間隙に充填繩文・列点状刺突文が施されている。列点状刺突文だけのもの（46）、口縁部無文帯に列点が並ぶものも一括した。

12類（48・49）

比較的太い沈線により曲線的な区画文が施されている。

III群（第64図50～57）

後期前葉に位置づけられるもの。

1類（50・51）

口縁部に「8」の字貼付文が施されている。51は刻目のある微隆帶と、沈線による格子目文が施文される。

2類（52～54）

2点の刺突文を太い沈線で結ぶ微隆帶の区画文が施されている。

3類（55～57）

太い沈線により胴部に文様が施されている。56は磨削繩文が施文される。

IV群（第64図58）

後期中葉に位置づけられるもの。色調は黒褐色を呈し、薄手の土器である。外面には横位と縦位の沈線によって区切られる縄文帯が3条ある。内面には沈線文のみが施される。

59は網代正旗を残す底部資料。

（1号土壙群）（第65図）

調査区北端の4号住居址のまわりに、5基の土壙が確認された。規模は約60cm×約80cmで、平面形は不整長方形を呈する。深さは確認面より30cm前後を測るが、出土遺物はなかった。墓壙と思われるが、確証はない。

（2号土壙群）（第65・66図）

調査区北端部に位置する。5基の土壙と、埋甕が2個体確認された。土壙の規模は直径1.2m前後、平面形は不整円形を呈する。確認面からの深さは約50cmを測る。出土遺物はない。縄文時代の墓壙と考えてみたいが、確証はない。

1号埋甕は土壙群西端に、正位に埋設されていた。胴部上半は破壊により遺存していない。確認面からの掘り込みは、深さ約35cm、直径約50cmを測る。甕は縄文時代中期末葉に位置づけられるもので、胴部外面に微隆帯による懸垂文が施され、その間に無文帯と縄文が施文されている。底部には焼成後にあけられた単孔がある。

2号埋甕は土壙群中央に確認された。破損が著しいが、正位に埋設されていた。縄文時代中期末葉に位置づけられるもので、胴部外面に沈線による懸垂文が施され、その間に無文帯と縄文が施文されている。底部には焼成後にあけられた単孔がある。

（1号掘立柱建物址）（第67図）

調査区北端に位置する。柱間は東西約1.5m、南北約2mで、東西2間南北2間の掘立柱建物址である。柱穴は、直径50cm前後、確認面からの深さ約50cmを測る。出土遺物はなく、構築時期は不明。

（2号掘立柱建物址）（第67図）

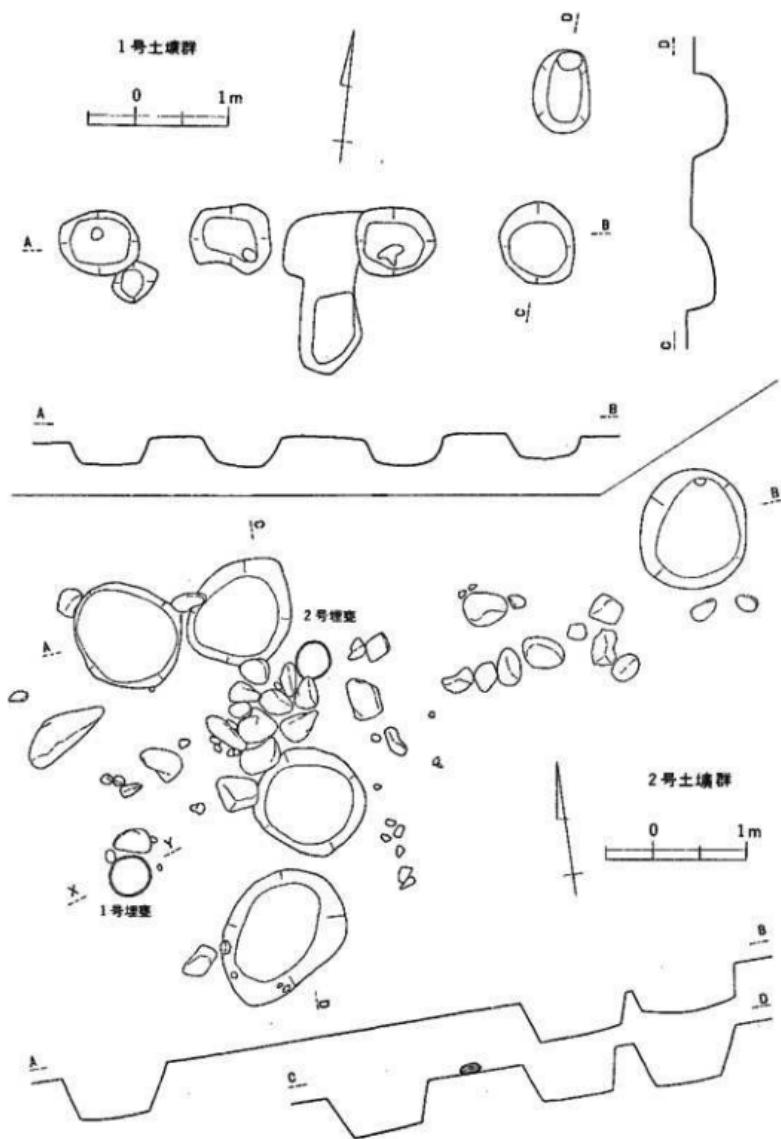
調査区北側9号住居址の東側に位置する。柱間は約1.2mを測り、規模は東西約4m、南北約3m。柱穴は直径約50cm、確認面からの深さは平均43cmを測る。10穴が長方形にめぐり、その内側に4穴がある。出土遺物はなく、構築時期は不明。

（1号溝）（第68図）

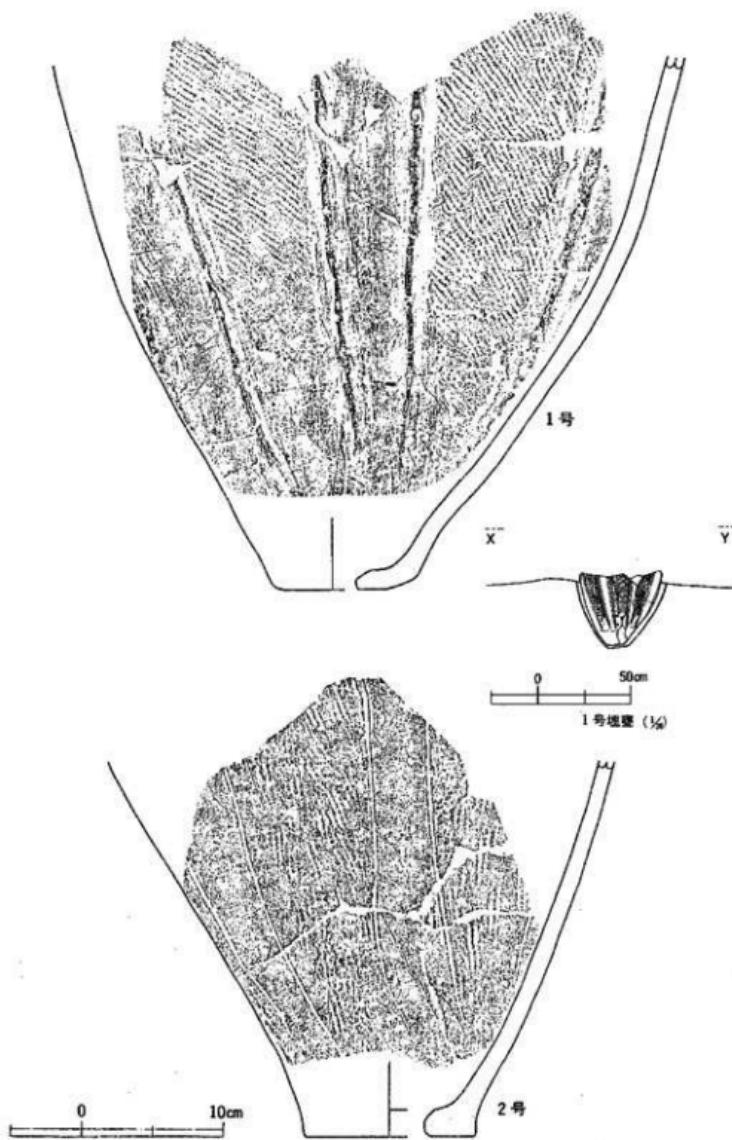
調査区北西部に位置する。北から南に流れをもつ溝。長さ10m50cm、幅50cm～1m以上、確認面からの深さは北から南へ5cm～30cmを測り、南半部で急に深くなり溝幅も広くなっている。

遺物は土器片・石器類が川土している。土器は縄文時代から平安時代までのものであるが磨滅が激しい。石器は、石軋・鎌の巣石がみられる。

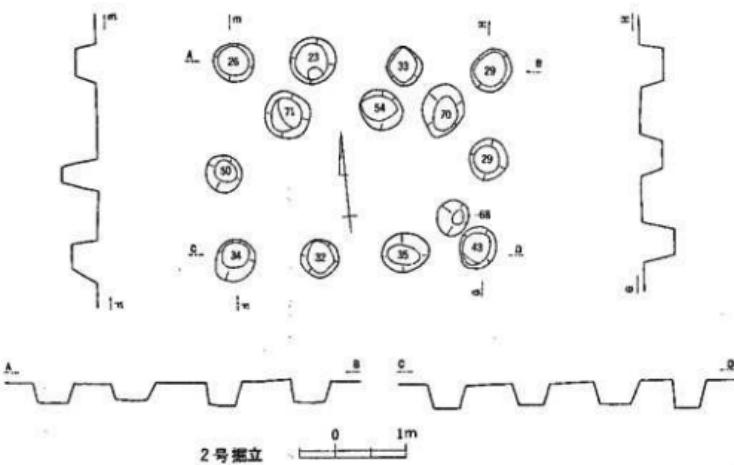
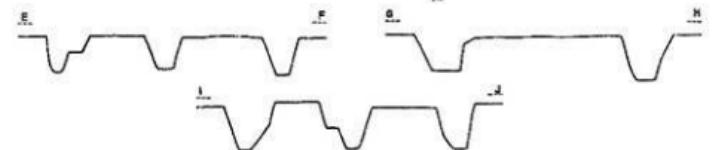
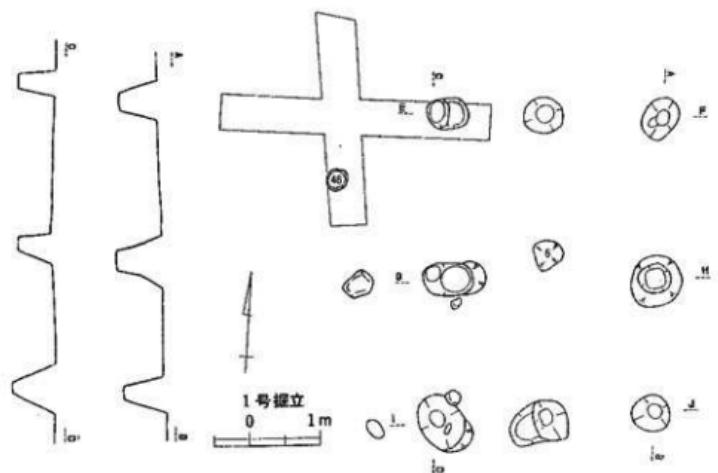
本溝の性格・構築時期等は不明である。



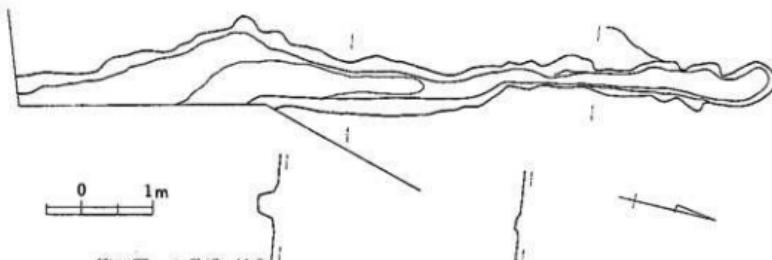
第65図 土壠群 (16)



第66図 埋甃 (3号)



第67図 掘立柱建物址 (1号) (大内数字は、底面からの深さを表わす。cm)

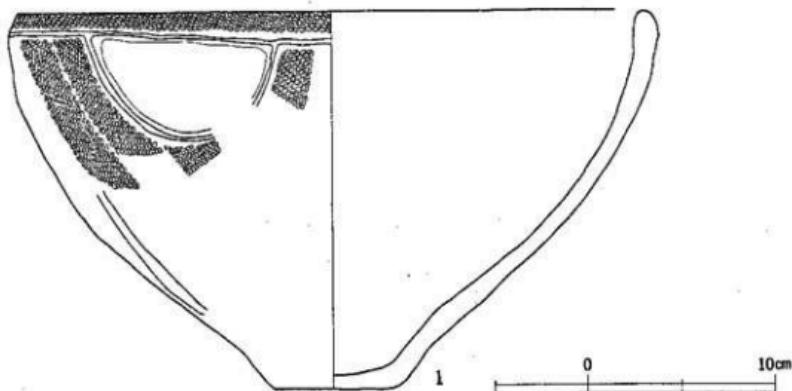


第68図 1号溝 (1/6)

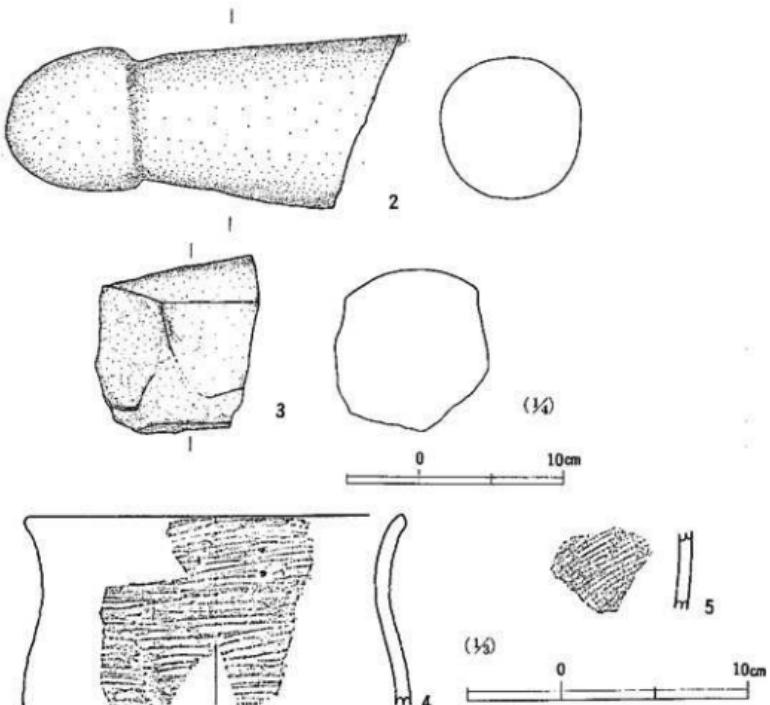
〈遺構外出土遺物〉 (第69・70図)

本遺跡からは遺構外からも遺物の出土があり、以下に縄文時代の土器・石棒、弥生時代の土器片を紹介してみよう。

1. 3分の1を欠損する浅鉢形土器。色調は褐色を呈し、内面に黒斑がある。胎土には白色砂粒を含む。外面は、口縁部に1条の微隆帯がめぐり、それから胴部にかけて微隆帯による懸垂文・弧文が交互に施され無文帯を形成し、それ以外に縄文が施文されている。内面はみがきがかけられている。文様の特徴などから本土器は、縄文時代中期末葉に位置づけられよう。出土地点は、配石遺構より北西方向に約10m離れた所で、地表下約50cmの暗褐色土中に検出された。
2. 破損している石棒の資料。安山岩質の石材でつくられている。出土地点は、11号住居址の南西方向約5mの場所で、排土作業中に検出された。縄文時代中期のものであろう。
3. 遺存部は少ないが、石棒の資料。安山岩質の石材でつくられている。出土地点は2と同じ付近である。縄文時代中期のものであろう。



第69図 遺構外出土遺物 (3/6)



第70図 造構外出土遺物

4. 壱形土器の破片資料。推定復原で口径約20cmを測る。色調は外面暗褐色、内面黄白褐色を呈する。胎土には小砂粒を含む。外面には横位の条痕文が施される。弥生時代中期に位置づけられるものである。

5. 十前器と思われる破片資料。色調は黄赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はみがきが施され、外面には格子状の叩き目が認められる。

V 発掘調査の成果とまとめ

1. 縄文時代

今回の調査で確認された縄文時代の遺構は、竪穴式住居址1軒（11号住居址）、埋甕2基、配石遺構1基等であった。時期的には出土遺物により、それぞれ中期後半、中期末、中期末葉～後期前半に位置づけられる。

竪穴式住居址の発見は1軒とすくないが、中期後半の土器片が比較的多量に出土しているので、開墾耕作などによる破壊を考慮すれば、集落址であった可能性が予測される。また、中期末葉～後期前半の配石遺構の発見は、遺跡の例が少なく空白部とされる後晩期の中にあって、低位の遺跡立地状況とも合わせ、意義あるものであった。

2. 弥生時代

弥生時代の遺構は竪穴式住居址が3軒（18・21・26号住居址）確認された。平面形は、隅円長方形・隅円方形を呈し、4本主柱穴で床炉をもつが、それぞれ形も大きさも不揃いである。特に18号住居址は、中央に2本主柱穴をつくる点で他と異なりをみせており、住居の形態に若干の問題を残している。

出土遺物は、壺・甕形土器などで、櫛描による波状文・簾状文が施されており、長野県中信、北信地方の土器の特徴が認められる。時期的には本県における該期の編年が確立していないので、ここでは大きな範囲で後期ととらえておくこととする。

また、条痕文を有する水神平系の土器が遺構外から出土しているが、本遺跡においても低湿地を背景として、農業を基盤とした集落の形成が推察でき、立地環境からだけでなく、甲府盆地北西端に位置するという地理的側面とも合わせ、県内の弥生時代を考える上で良好な資料となるであろう。

3. 歴史時代

歴史時代の遺構は竪穴式住居址が23軒確認され、出土遺物により奈良時代（5・16・19・23号住居址）、平安時代（1～4・6～9・15・17・20・22・24・25号住居址）、中世（12～14号住居址）に分けられる。他に掘立柱建物址などが確認されている。

奈良時代竪穴式住居址は、平面形は東西あるいは南北に長い隅円長方形を呈するが、規模は一定していない。カマドは北壁を掘り込んで構築される。平安時代竪穴式住居址は、平面形は略正方形が主体であるが、長方形もある。規模は一辺約3m～約7mまで色々である。柱穴が確認されたものは20号住居址だけであり、規模も最大であった。カマドは東壁か北壁を掘り込んで構築されるが、9・15号住居址は壁コーナーに構築される。中世竪穴式住居址としたものは、規模は異なるが、カマドを偏けておらず焼土あるいは焼跡が床面に検出されるのを特徴としている。

以上、簡単に遺跡の概要をまとめてみたが、本遺跡の竪穴式住居址からは、須恵器の出土が比較的多いことが特徴として上げられる。そこで、奈良・平安時代の土器に関して、若干の考察を加え編年を試みることにする。

4. 編年試案 カッコ内は（挿図番号—遺物番号）を表わす。

須恵器、土師器ともに良好な資料を出土している竪穴式住居址ごとに、壺類の形態変化・消長、整形方法の変化を参考に、I期～V期に区分を行った。

I期 5号住居址のものをあてる。

須恵器・土師器とも壺・甕などで構成される。

須恵器壺は、口径約13.8cm、底径約9cm、器高約3.4cmで底部切り離し後に全面回転箇削りを行うもの（12-1）、口径約15cm、底径約9.5cm、器高約3.5cmで体部が外反し口縁部が開き、底部は切り離し後に深い外周回転箇削りを行うもの（12-4）、底部が回転斂切りで、口径12～13.5cm、底径7.5～8cm、器高4cm前後で丸底状を呈するもの（12-6・7・8）、口径13cm、底径9cm、器高3.5～4cm代で平底で口縁部が開くもの（12-2・3・5）、高台を付けたもの（12-9）がある。土師器壺は、器高の低いもので、底部外縁が丸味を呈するもの（12-11）、底部を静止糸切り後外周を箇削りするもの（12-12）がある。須恵器甕は破片であり、あまり良好な資料はなかった（13-13）。土師器甕は、撫で整形による小形甕（13-14）、箇削りによる小形甕（13-15）と、長胴甕（13-16・17）がみられる。他に底部に箇削り痕のある灯明皿（13-18）も含まれる。

II期 19号住居址のものをあてる。

須恵器は壺・蓋・甕・土師器は壺などで構成される。

須恵器壺は、底部回転糸切り離し後外周を箇削りし、口径12.5～13.5cm、底径8.5cm前後、器高3.5～4cm代のもの（41-4・5・6・9）、底部回転箇切り無調整のもの（41-7）、底部静止（？）箇削りのもの（41-8）がある。土師器壺（42-13）は、底部回転糸切り離し後体部下端から底部外周を手持ち箇削りしてあり丸味をおびている。須恵器蓋は、外縁でいたん水平に張り出し口唇部が外反しながら屈折するもの（41-1）、器高が低くボタン状のつまみを有し口唇部が垂直に屈折するもの（41-2）、小形のもの（41-3）がみられる。須恵器甕は、口縁部の開くもの（41-10）と、糸切痕を残す底部（41-11）がみられる。土師器甕は、良好な資料はなかった。

III期 3号住居址のものをあてる。

須恵器壺・蓋・甕・土師器壺・甕で構成される。

須恵器壺は、底部が回転糸切り後無調整となり、口径約14cm、底径約8.5cm、器高約4cmのもの（8-1）と、高台付壺（8-2）がある。土師器壺は高台付の深いもの（8-3）がみられる。須恵器蓋（8-4）は、擬宝珠状のつまみをもつ小形のものである。須恵器甕（8-4）は、小形の長頸甕で、土師器甕（8-5）も同形態と思われる。

IV期 7B・17・20・24号住居址のものをあてる。

須恵器は壺・蓋・壺・甕、土師器は壺・甕などで構成される。

須恵器壺は、底部回転糸切り離し無調整で、口径12.5~14.5cm、底径7~8cm、器高4cm前後代のもの（18-7、38-3、45-5・6・7）、それよりも一回り小形のもの（45-4）があり、他に高台付壺（45-3）があるがいずれもⅢ期よりも法量に縮小化がみられる。土師器壺は、口唇部が細く尖ったような形状を呈し、身の深い底径の大きな形態を特徴とするものが多い。底部を全面箝削りし、体部内外面に横位の箝磨きを施すもの（45-12）、体部外面に横位の箝磨き内面に暗文のみられるもの（45-13・17、55-1）、体部下端を箝削りし内面に暗文のみられるもの（18-8）がある。また、底部切り離し後外周を箝削りし、体部外面に横位の箝磨きを施し内面に暗文のみられるもの（45-14・15・16）、体部下端を箝削りし内面に暗文のみられるもの（18-9）がある。他に内面に暗文のある高台付壺（38-2）がみられるが、これら全ての土師器壺はみこみ部にも暗文のある共通点をもつ。須恵器蓋は、口唇部が外反し屈折する大形のもの（38-1）、小形のもの（45-1・2）がある。須恵器甕・甕は、比較的小形のもの（38-4、45-9・10・11）、頬部に横彫きによる波状文の施されるもの（55-2）、叩き目による整形のもの（55-3）などがみられる。土師器甕は、撫で整形による長胴形のもの（46-18・19）がみられる。

V期 8B・22号住居址のものをあてる。

須恵器は壺・蓋、土師器は壺などで構成され、土師質須恵器（51-5）がみられる。

須恵器壺は、底部回転糸切り離し無調整で、口径10~12cm、底径6~7cm、器高3.5~4cm代のもの（20-3、51-3・4・5）で、より法量が縮小化する。高台付壺（51-2）は、口径15cmと大形の深いものであるが高台部の取縮が目立つ。土師器壺は、形態的にはIV期と同様の口唇部が尖形状を呈す底径の大きなものであるが、法量の縮小化がみられ併出の須恵器とあまり変わらない大きさとなる。底部回転糸切り離し後、体部下端及び底部外周を箝削りし体部内面及びみこみ部に暗文のみられるもの（51-7）、体部下半及び底部外周を箝削りし体部内面及びみこみ部に暗文のみられるもの（51-6）、体部内面のみに暗文のみられるもの（20-5）、底部は静止糸切りで体部下半の箝削り及び内面の暗文がないもの（20-4）がみられる。尚、土師器甕については良好な資料が得られなかった。

5. 年代

山梨県においては、過去発掘調査などによって絶対年代を決定するような資料の出土はなく、また、須恵器窯址の発見・調査研究が遅れているため、土師器と併出する須恵器を通して、しかも他地域の編年を用いて年代観の決定を行わざるを得ないような状況下にあるが、近年、末木健、坂本美夫、堀内真、奈良泰史各氏の積極的な研究により、その編年区分・年代観に大きな成果をもたらしている。¹¹⁾

ここではやはり須恵器壺を通して、それらの研究成果を踏まえ、また他地域との比較の中で

本遺跡の奈良・平安時代土器の年代観を考えていくことにする。しかしながらそれは、坂本氏の言うように「他地域の編年上の変化が同一になされたという大前提に立つもの」であり、今後の調査研究により当然修正される可能性のあることを付記しておく。

I期 8世紀第3四半期をあてる。——底部が窓切りで丸底状のものは8世紀前半の特徴を示しており、他のものは法量的に前内出2号窓期（8世紀第3四半期後半～8世紀第4四半期前半）に比定できる⁽³⁾また、底部窓切りの坏は、長野県箕輪町中道遺跡第5号住居址・第20号住居址出土須恵器坏に類似があり、8世紀後半としてとらえられている。

II期 8世紀第4四半期をあてる。——本期に特徴的な底部回転糸切り離し外周を窓削りするものは、その整形方法及び法量から前内出1号窓期（8世紀第4四半期後半～9世紀第1四半期前半）に比定できる。底部切り離し後に全面静止窓削りを行うものは、整形的には永田不入窓址製品などの古い段階においてみられるものであるが、法量に疑問が残る。また口唇部が外反する器形は他と異りをみせているが、長野県中野市草樹窓址群大久保3号址品に類似したもののが認められる。大久保3号址は8世紀後半から末葉に構築されたとされている。

III期 9世紀第1四半期をあてる。——底部回転糸切り無調整の坏は、整形方法では新段階に入るが、法量的にはII期を踏襲しており、IV期が9世紀第2四半期となるため、本期を9世紀第1四半期に位置づけておく。

IV期 9世紀第2四半期をあてる。——本期の坏は、整形方法・法量から御殿山37号窓式（9世紀第1四半期後半～9世紀第2四半期前半）に比定できる。尚、7B号住居址の須恵器坏と土師器坏は、他のものと比較して形態に若干の変化が認められるので、時間的に後出するものと思われる。

V期 9世紀第3四半期をあてる。——底径は6cm前後で、御殿山59号窓式（9世紀第2四半期後半～9世紀第3四半期）に比定できるが、口径が11cm前後で口径×底径×2の領域に入っている点で若干のズレがありそうである。尚、須恵器坏と土師器坏の形態から、22号住居址のほうが時間的に若干先行するものと思われる。

註 (1) それらの成果は、坂本美夫・末木健・堀内真・他「シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題（第Ⅱ版）」『神奈川考古』第14号 1983 神奈川考古同人会に集約されている。

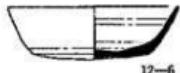
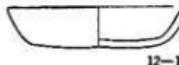
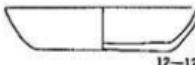
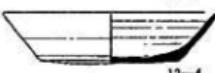
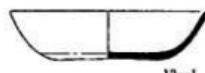
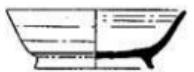
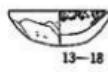
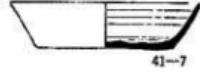
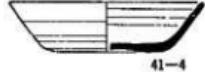
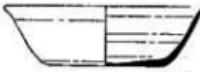
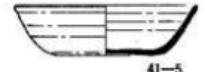
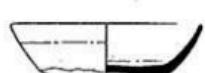
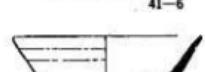
註 (2) 坂本美夫・他「甲斐地域：前掲『神奈川考古』第14号

註 (3) I期中、特に(12-1)に関しては、服部敬史氏より、北武藏前内出2号窓期併行の製品であり、8世紀第3四半期(760年頃)に位置づけられる。との御教示を得た。

尚、他の住居址についても年代を推定しておこう。

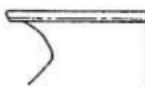
16・23号住居址は、須恵器の良好な件出がなく、上部器坏の器形もバラエティーに富んでおり、

中田小学校遺跡出土土器編年表 (1/4)

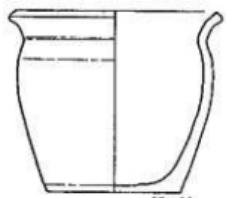
	須 恵 器 壱 類	土 師 器 壱 類
I 期		
		
		
		
		
		
		
II 期		
		
		
		
		

蓋類

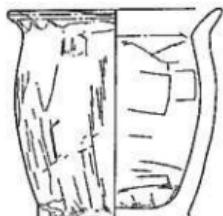
壺·甕類



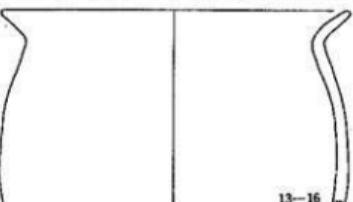
13-13



13-14



13-15



13-16



13-17



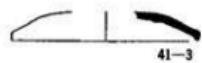
41-1



41-10



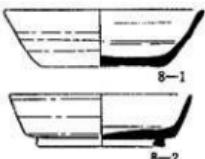
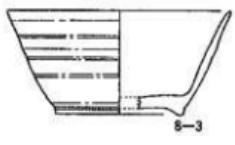
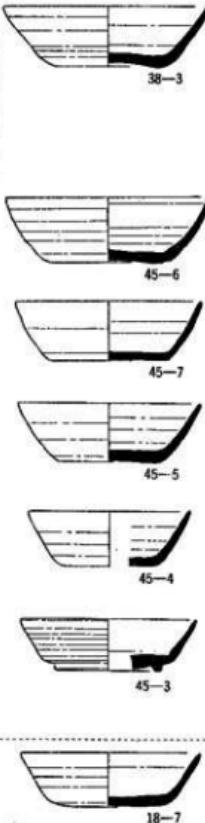
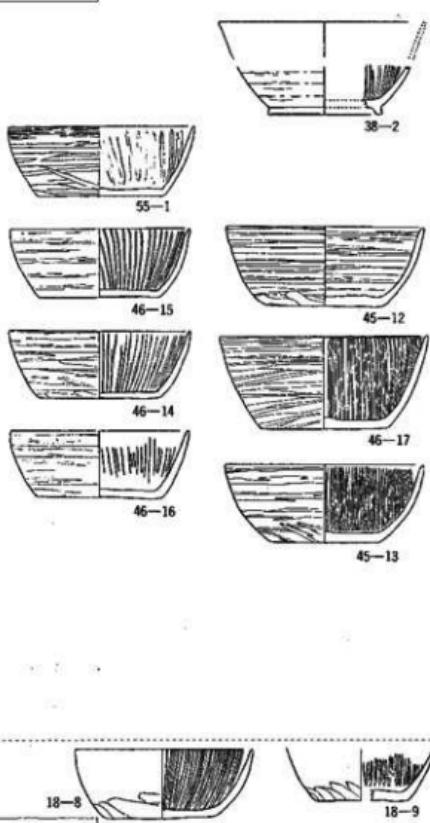
41-2



41-3



41-11

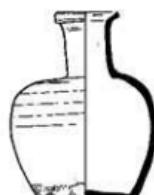
	須 恵 器 坩 類	土 部 器 坩 類
III 期		
IV 期		

蓋類



8-6

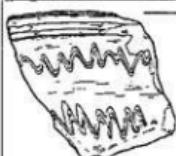
壺・甕類



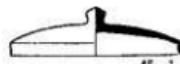
8-4



8-5



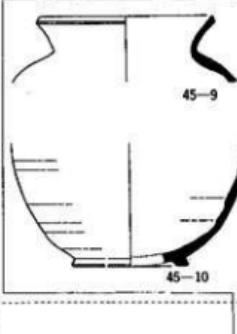
55-2



45-1

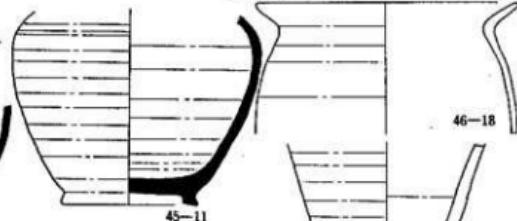


45-2



45-9

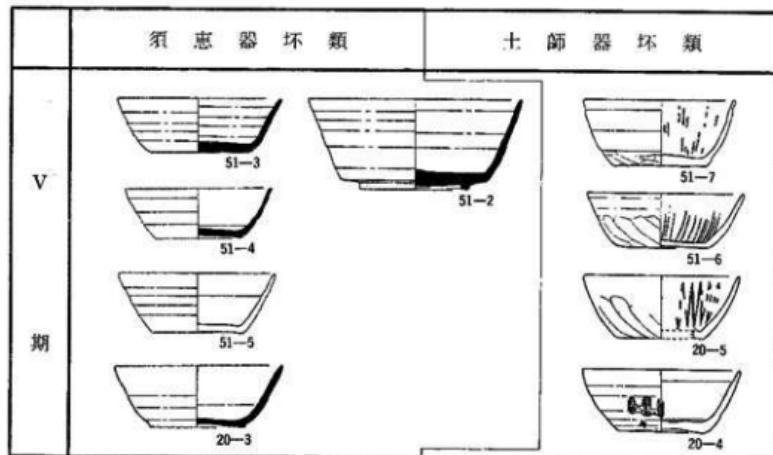
45-10



45-11

46-18

46-19



り、Ⅰ期・Ⅱ期の区分に明確に当てはまらないがおよそ8世紀後半代に位置づけておく。4号住居址は須恵器坯形態からⅢ期頃に、7A号住居址は遺構の切り合いでIV期以前に、2号住居址は土師器坯形態からIV期に位置づけられる。その他それぞれ土師器形態等により、8A号住居址は10世紀後半以降、1・9・15号住居址は11世紀以降、12・13・14号住居址は12世紀以降に位置づけられる。6号住居址は資料的に現段階では年代推定に確証が得られない状況である。

6. 墨書き土器について

本遺跡からは墨書き土器が5点出土している。判読可能なものは「山」「葛井」「○○坏」の3点で、「山」は土師器坯体部外面に、他は底部に書かれている。

「葛井」は「ラシイ」と読み、本遺跡周辺は古来「藤井平」などと称され、本県有数の穀倉地帯であり、「藤井」という地名が古く平安時代頃までさかのぼれる可能性を秘めている。しかし、「葛井」が地名を表わすものか氏族名を表わすものか⁽¹⁾まだ不明な点が多く一概に決論を出せない。

「○○坏」は、前2文字が判読困難であるが、坏の底部に「坏」という文字が書かれているということは、坏の使用形態を知る上でおもしろい資料と言える。今後前2文字が解読されれば、用途を表わしたものか使用者名を表わしたものかが解明されることであろう。

註 (1) 朝鮮半島からの帰化人に葛井氏という氏族がいたことが「続日本紀」などの記録にみられるが、平安時代に甲斐の国に存在したかどうかは不明である。

7. 奈良・平安時代の集落構造

本遺跡で、前項4・5で述べた編年区分年代観に基づいて、各期に区分された堅穴式住居址は

蓋類	壺類
	

一期3～4軒前後のまとまりをもち、その構築領域も時期により変化が認められる。それらの変化を通じ、また各堅穴式住居址の形態から集落構造の実態に迫ることが可能であると思われるが、ここでは今後の課題として、いくつかの問題点を上げておく。①本地域の集落全体を考える上で、本遺跡にみられる3～4軒の小単位が、ひとつの集落をなすものか、それとも大きな集落の中のひとつのグループを形成するものかどうか。②同時期の堅穴式住居址間での格差——住居址の規模と遺物の優位性の問題。③堅穴式住居址の形態的相違——住居構築に係る規制（律令制の進行が大きな一因を占めると思われる。）等の影響など。それらは本遺跡ばかりでなく、広く該期の集落構造を考える上で検討されなければならない。

おわりに

中田小学校遺跡は、調査面積は比較的小規模であったが、縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代、中世までと多岐にわたって遺構が確認され、古くから塩川右岸氾濫原の低位に集落が形成されてきたことを物語る貴重な遺跡であり、今回の発掘調査は意義のあるものであった。また奈良・平安時代に関しては、堅穴式住居址から上土器壺類に伴い須恵器壺類の良好な出土がみられ、時期的区分を明らかにすることができた。それは今後検討していくものであるが、本県における該期の土器を考える上で大きな成果をもたらしたと言える。しかし、縄文時代、弥生時代を含め、遺構・遺物の検討等、残された問題は多くのものがあり、今後の調査研究の必要性を痛感する次第である。

尚、文末でありますが、鉄器処理に関し技術指導をしていただいた保坂康夫氏と、編年作業にあたり貴重な助言をいただいた坂本美夫氏に厚くお礼を申し上げます。

(文責 山下)

参考文献

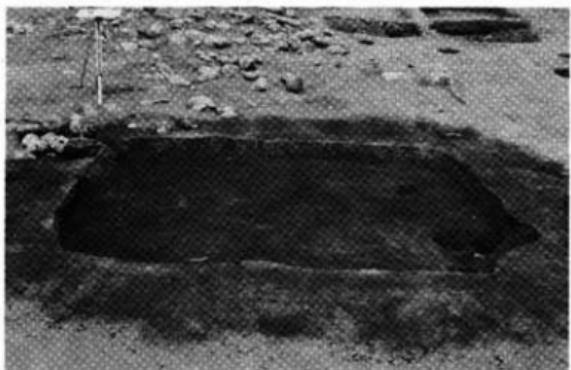
- 安孫子昭二 「関東・中部地方」『縄文土器大成③後期』 講談社
- 中島庄一 「土器文様の変化—称名寺様式を中心として—」『神奈川考古』第12号
- 新津純一 「八ヶ岳南麓における縄文後・晩期の遺跡について」『甲斐考古』21—1
- 野口義磨・安孫子昭二 「磨消縄文の世界」『縄文土器大成③後期』 講談社
- 山村貴輝・田中純男 「縄紋時代中期後半の土器紋様の変化とその意味」『神奈川考古』第13号
- 多摩都市計画道路事業1・3・1分線関連遺跡調査会 『向ヶ岡遺跡』 1983
- 佐原真編 「弥生土器」『日本の美術10』 至文堂
- 末木健一他 「山梨県中巨摩郡敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告」長野県考古学会誌第33号
- 末木健一他 「山梨県敷島町金の尾遺跡調査報告」長野県考古学会誌第36号
- 猪股喜彦 「山梨県における奈良・平安時代の集落遺跡」『歴史手帖 特集山梨県の考古学』13—1
- 國平健三 「相模国の奈良・平安時代集落構造(上)」『神奈川考古』第12号
- 坂本美夫・他 「シンボジウム奈良・平安時代土器の諸問題(第Ⅱ版)」『神奈川考古』第14号
- 信藤祐仁 『山梨県甲府市大坪遺跡』 甲府市教育委員会 1984
- 末木健一他 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡長坂・明野・墓崎地内一』 山梨県教育委員会 1975
- 末木健一他 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書一北巨摩郡須玉町地内一』 山梨県教育委員会 1976
- 玉口時雄・他 『シンボジウム盤状壙—奈良時代土器の様相—』 東洋大学未来考古学研究会 1981
- 奈良泰史 『堀之内原遺跡発掘調査報告書』 都留市教育委員会 1980
- 奈良泰史 『中谷・宮脇遺跡』 都留市教育委員会 1981
- 服部敬史・福田健司 「南多摩窯址群における須恵器編年再考」『神奈川考古』第12号
- 浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編2』 伊場遺跡発掘調査報告書第4冊 1980
- 多摩市遺跡調査会 『東寺方遺跡』 1983
- 長野県史刊行会 『長野県史 考古資料編全1巻(2)主要遺跡(北・東信)』 1982
- 長野県史刊行会 『長野県史 考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中・南信)』 1983

図 版

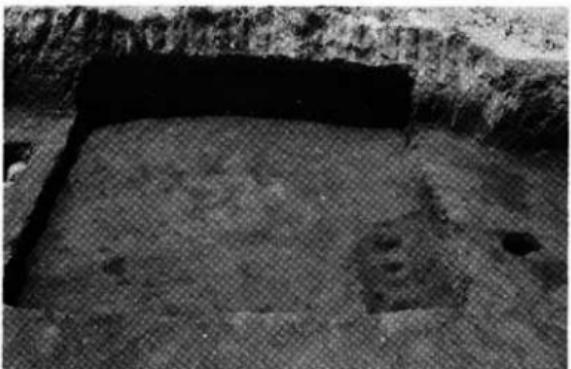
図版 1



遺跡遠景



1号住居址



2号住居址

圖版 2



3号住居址



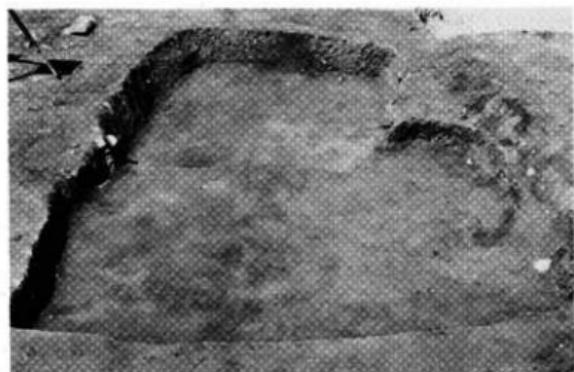
4号住居址



5号住居址



6号住居址



7号住居址

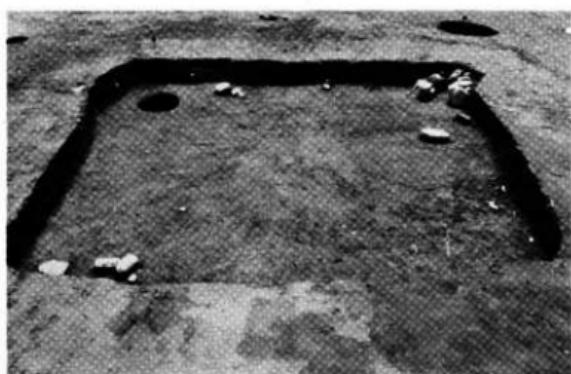


8A号住居址

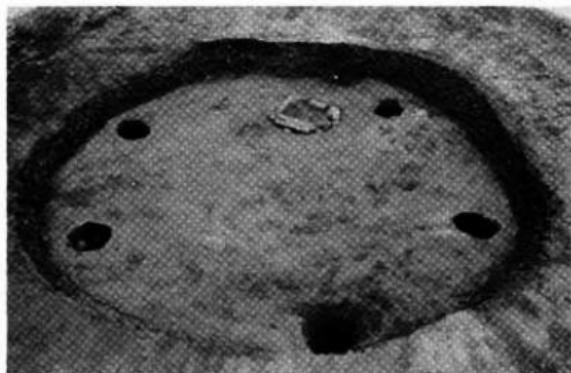
図版 4



8B号住居址



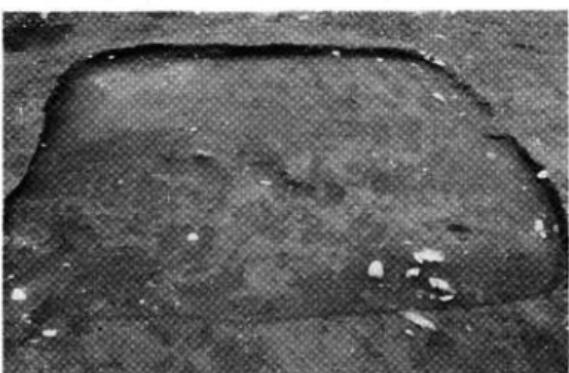
9号住居址



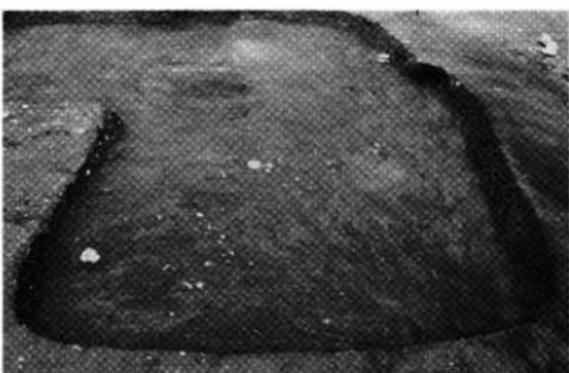
11号住居址



12号住居址

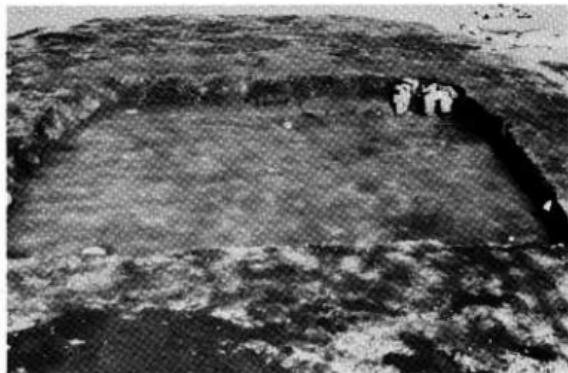


13号住居址



14号住居址

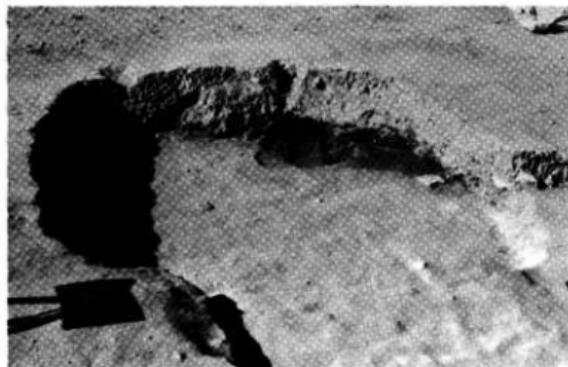
図版 6



15号住居址

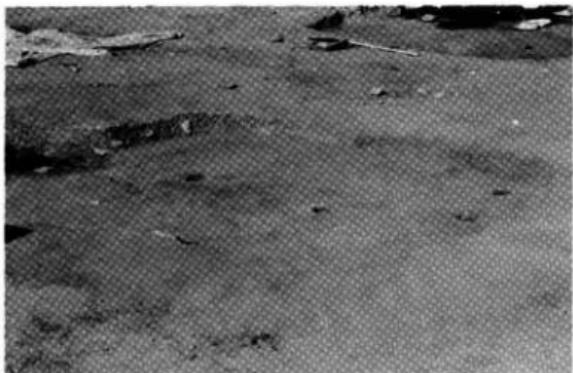


16号住居址



17号住居址

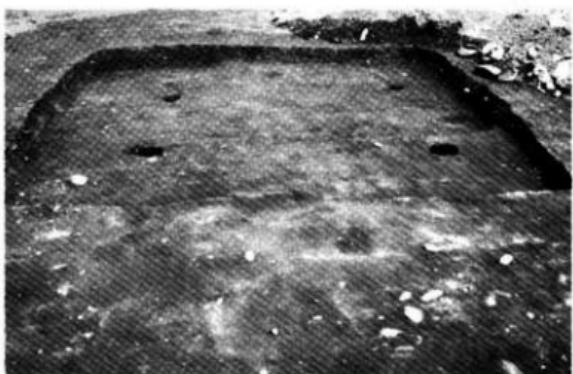
圖版 7



18号住居址

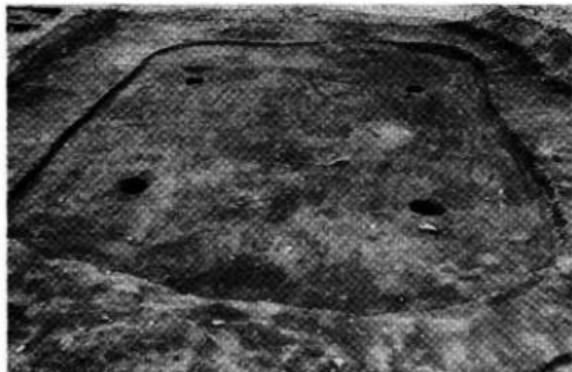


19号住居址



20号住居址

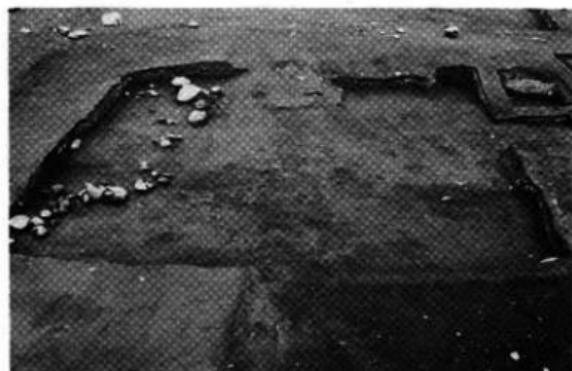
圖版 8



21号住居址



22号住居址



23号住居址

図版 9



24号住居址

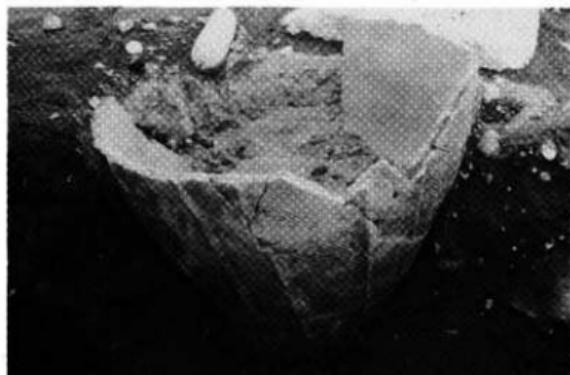
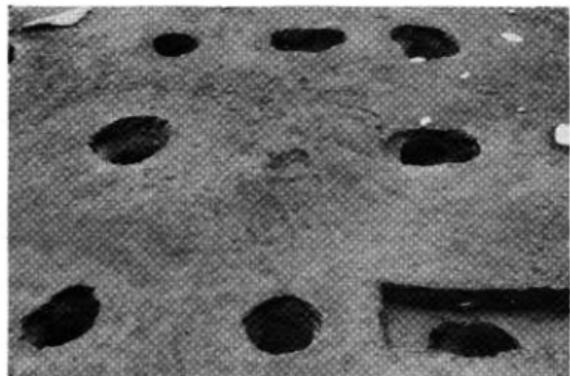


25号住居址



26号住居址

圖版 10





3号住居址
遺物出土状況



13号住居址
鎗出土状況



17号住居址
鎌出土状況

図版 12



19号住居址
遺物出土状況



20号住居址
遺物出土状況



21号住居址
遺物出土状況

圖版 13



1号住居址出土遺物



4号住居址出土遺物



5号住居址出土遺物

图 版 14



6号住居址出土遗物



7A号住居址出土遗物



7B号住居址出土遗物



8B号住居址出土遗物

図版 15



14号住居址出土遺物



15号住居址出土遺物



16号住居址出土遺物



17号住居址出土遺物



4



5



6



7



8

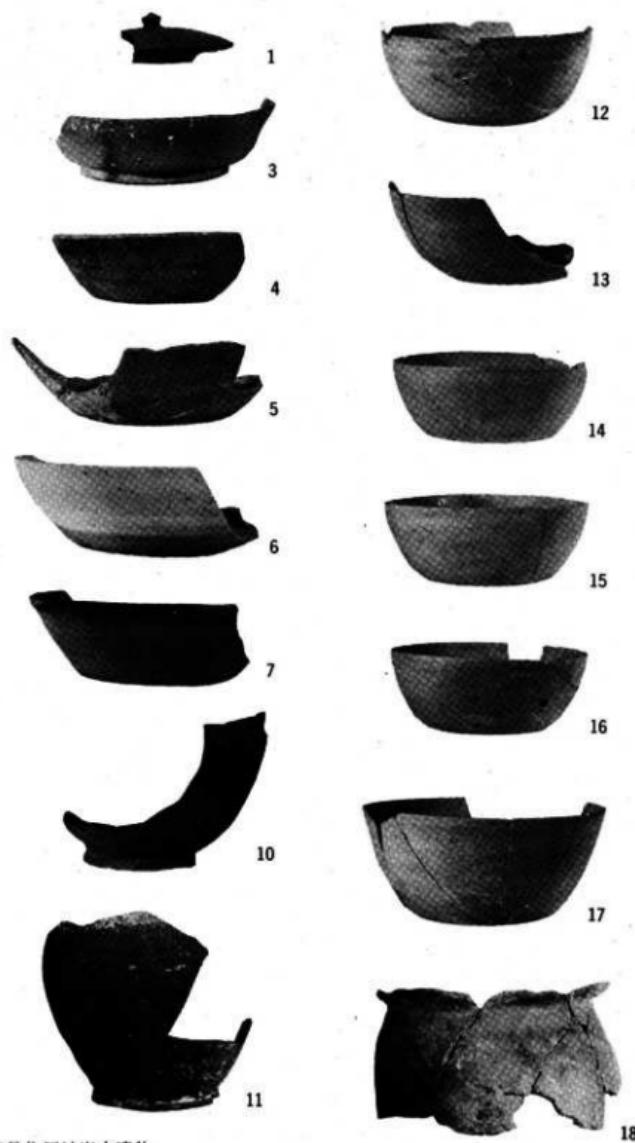


9



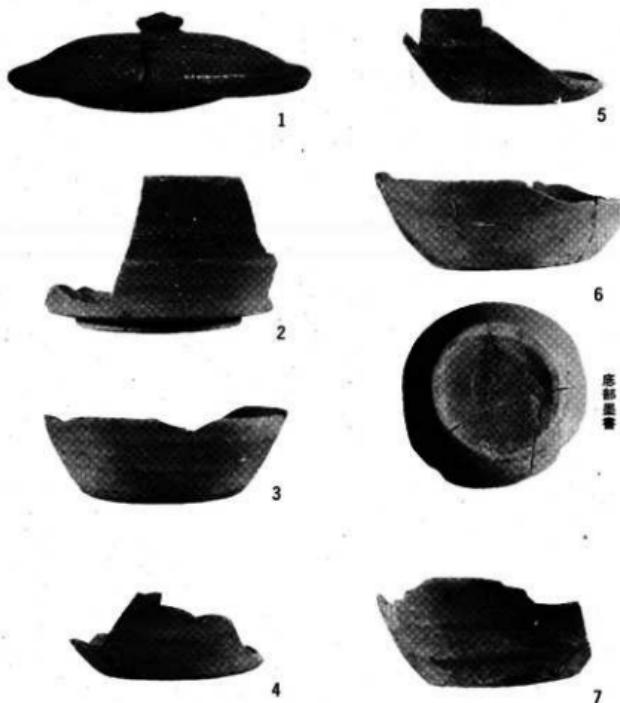
13

図版 16

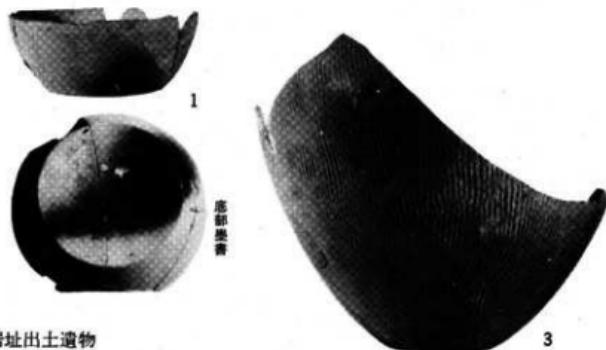


20号住居址出土遺物

圖版 17

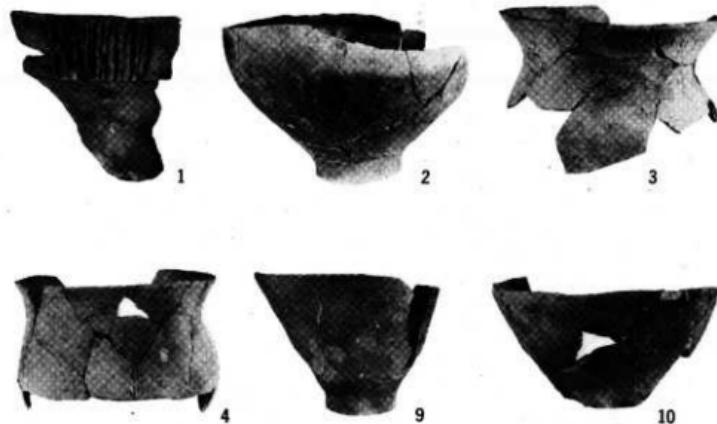


22号住居址出土遺物

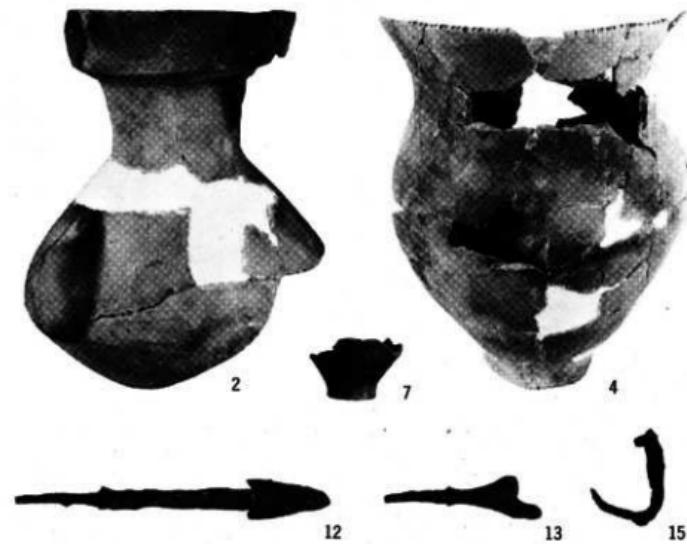


24号住居址出土遺物

図版 18



21号住居址出土遺物

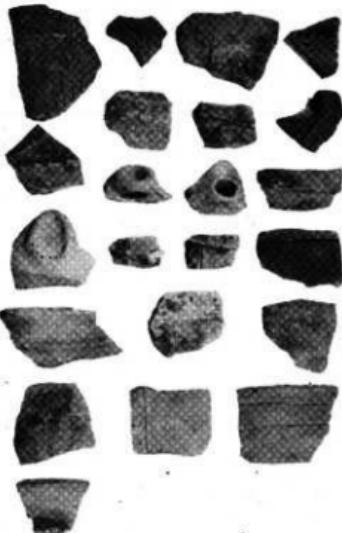


26号住居址出土遺物

図版 19



幻の10号住居址出土遺物



配石遺構出土遺物

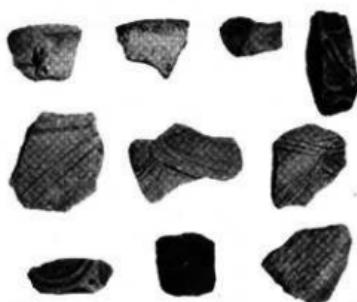
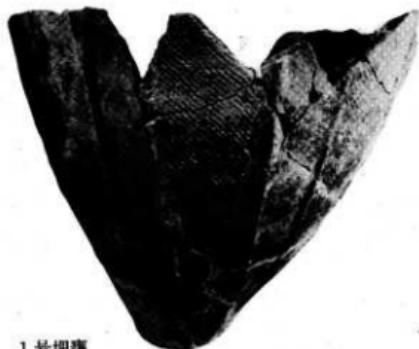
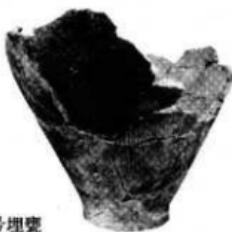


图 版 20



1号埋甕



2号埋甕



溝状遺構出土遺物



1



2



4

遺構外出土遺物

中田小学校遺跡

発行日 昭和60年3月31日

発行 茅崎市教育委員会
山梨県茅崎市水神一丁目3番1号
☎ 0461-22-1111㈹

印刷 欧北印刷株式会社
山梨県北巨摩郡長坂町長坂上条
☎ 0551-32-3245㈹

